



Title	アイヌ語の複雑述語の研究
Author(s)	岸本, 宜久
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13403号
Issue Date	2019-03-25
DOI	10.14943/doctoral.k13403
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/74489">http://hdl.handle.net/2115/74489</a>
Type	theses (doctoral)
File Information	Yoshihisa_Kishimoto.pdf



[Instructions for use](#)

平成 30 年度博士学位論文

# アイヌ語の複雑述語の研究

北海道大学大学院文学研究科

岸本 宜久

## 目 次

第 1 章 序論 .....	1
1.1. 研究の背景と目的 .....	1
1.2. アイヌ語について .....	1
1.3. 調査資料とアイヌ語の表記 .....	2
1.3.1. 調査資料 .....	2
1.3.2. 調査方法 .....	6
1.3.3. アイヌ語の表記 .....	6
1.3.3.1. 表記の統一 .....	6
1.3.3.2. 音素 .....	7
第 2 章 アイヌ語の複雑述語の記述 .....	9
2.1. アイヌ語述語の基本構造 .....	9
2.1.1. アイヌ語述語の形態・統語的な特徴 .....	9
2.1.2. アイヌ語述語の人称標示 .....	10
2.2. 複雑述語について .....	11
2.3. アイヌ語の複雑述語 .....	12
2.3.1. 補助動詞構文 .....	13
2.3.1.1. 補助動詞構文の先行研究 .....	13
2.3.1.2. 補助動詞構文概観 .....	14
2.3.1.2.1. V1 wa an (V1 ている) .....	15
2.3.1.2.2. V1 wa isam (V1 てしまう) .....	19
2.3.1.2.3. V1 wa inkar (V1 てみる) .....	20

2.3.1.2.4. V1 wa inu (V1 てみる)	21
2.3.1.2.5. V1 wa anu (V1 ておく)	23
2.3.1.2.6. V1 wa okere (V1 てしまう)	24
2.3.1.3. 補助動詞構文のまとめ	26
2.3.2. 助動詞構文	28
2.3.2.1. 助動詞構文の先行研究	28
2.3.2.2. 助動詞構文概観	30
2.3.2.2.1. 助動詞構文「V1+Vi」	31
2.3.2.2.2. 助動詞構文「V1+Vt」	34
2.3.2.3. 助動詞構文のまとめ	36
<b>第3章 複雑述語の複合制約</b>	<b>37</b>
3.1. 補助動詞構文の複合制約	37
3.1.1. 用例にみられる制約	38
3.2. 助動詞構文の複合制約	40
3.2.1. 用例に見られる制約	42
<b>第4章 複雑述語の分析</b>	<b>45</b>
4.1. 分析に用いる理論について	45
4.2. 生成文法からのアプローチ	45
4.2.1. 日本語の複合動詞と生成理論	46
4.2.1.1. 複合動詞のタイプ	46
4.2.1.2. 統語的複合動詞の補文関係	46
4.2.2. アイヌ語「V1+V2」の複合構造	47

4.2.2.1.	「V1+Vi」の統語構造.....	47
4.2.2.2.	自動詞 V2 の複合制約.....	48
4.2.2.3.	自動詞 V2 の統語的特徴のまとめ .....	51
4.3.	Role and Reference Grammar からのアプローチ .....	53
4.3.1.	RRG の基本概念.....	53
4.3.1.1.	RRG における節構造 .....	53
4.3.1.2.	RRG における接続と接合 .....	55
4.3.2.	RRG による分析.....	58
4.3.3.	補助動詞構文の分析 .....	59
4.3.3.1.	「V1 wa Vi」の LSC.....	59
4.3.3.1.1.	V1 wa an (V1 ている) の LSC.....	59
4.3.3.1.2.	V1 wa isam (V1 てしまう) の LSC.....	66
4.3.3.1.3.	V1 wa inkar (V1 てみる) の LSC .....	68
4.3.3.1.4.	「V1 wa Vi」の LSC まとめ.....	70
4.3.3.2.	「V1 wa Vt」の LSC.....	71
4.3.3.2.1.	V1 wa anu (V1 ておく) の LSC.....	71
4.3.3.2.2.	V1 wa okere (V1 てしまう) の LSC.....	76
4.3.3.2.3.	「V1 wa Vt」の LSC まとめ .....	79
4.3.4.	助動詞構文の分析.....	81
4.3.4.1.	「V1+Vi」の LSC.....	81
4.3.4.1.1.	「V1+tunas/moyre」の LSC.....	81
4.3.4.2.	「V1+Vt」の LSC .....	85

4.3.4.2.1. 「V1 oyra」のLSC .....	85
4.3.4.2.2. 「V1 etoranne」のLSC .....	87
4.3.4.2.3. 「V1 okere」のLSC .....	88
4.3.4.3. 「V1+V2」のLSCまとめ .....	90
<b>第5章 考察 .....</b>	<b>92</b>
5.1. 補助動詞構文の制約 .....	92
5.2. 助動詞構文の制約 .....	94
<b>第6章 まとめと課題 .....</b>	<b>96</b>
謝辞 .....	98
参考文献 .....	99
付録 .....	104

## 略語表

1	first person	1 人称
2	second person	2 人称
3	third person	3 人称
ADV	adverbial	副詞
ARG	argument	名詞項
ASP	aspect	アスペクト
CAUS	causative	使役
COMP	complementizer	補文標識
CONJ	conjunctive particle	接続助詞
IMP	imperative	命令
INDF	indefinite (personal affix)	不定 (不定人称接辞)
LDP	left detached position	左方遊離位置
LSC	layered structure of the clause	節の層状構造
MOD	modality	モダリティ
NEG	negation	否定
NMLZ	nominalizer	名詞化辞
NP	noun phrase	名詞句
NUC	nucleus	内核
OBJ	object	目的格
PAF	personal affix	人称接辞
PERIPH	periphery	周辺的な非項要素
PL	plural	複数形
PRED	predicate	述語
PREN	pre-nominal modifier	連体詞
PRF	perfective	完了
PRO	personal pronouns	人称代名詞
RRG	role and reference grammar	役割指示文法
SBJ	subject	主格
SG	singular	単数形
SVC	serial verb construction	動詞連続構造
TAM	tense, aspect, modality	テンス・アスペクト・モダリティ
Vi	intransitive verb	自動詞
Vt	transitive verb	他動詞

## 第 1 章 序論

### 1.1. 研究の背景と目的

アイヌ語は、北海道、樺太（サハリン）、千島列島およびその周辺地域に分布してきた言語である（田村 1988b : 7）。系統的には孤立言語であり、また、言語類型においては膠着的な特徴に加え、複統合的、抱合的な特徴を有し（ブガエワ 2014 : 33）、日本語をはじめとした周辺の諸言語とは異なる形態・統語的な特徴が散見される。

名詞項と述語の文法的な関係の標示は、日本語とアイヌ語で大きく異なる点の 1 つである。これは言語類型論においても日本語が従属部標示型（dependent-marking）、アイヌ語が主要部標示型（head-marking）の言語であるという違いとして特徴づけられる。一方で、日本語との接触による影響で獲得・発達させたと推定される分析的な述語構文も指摘されている（ブガエワ 2014 : 68）。

本稿では、アイヌ語の述語構造のうち、特に複雑述語である補助動詞構文（V1+CONJ+V2）と助動詞構文（V1+V2）を取り上げ、それぞれの構文における V1 と V2 の複合制約に焦点を当てる。これらの構文は、日本語の複雑述語との構造的・機能的な近接性が指摘されてきたが、日本語とは異なるアイヌ語の形態・統語的な述語構造のなかで成立しているものである。複合上の統語的な制約関係を示すことは、アイヌ語の述語研究に寄与するものとする。以下では、アイヌ語の複雑述語構文について整理したうえで、補助動詞構文・助動詞構文それぞれの複合制約について RRG 理論を中心に分析する。結論として、アイヌ語の複雑述語構文は、V2 のすべての項が V1 と関係をもつ必要があり（共有関係や埋め込み関係）、そのために V2 に立って補助動詞・助動詞をなす動詞の自他に制約が生じていることを示す。

### 1.2. アイヌ語について

アイヌ語は地域によって言語的な差異（方言差）がある。大きく北海道方言、樺太方言、千島方言の 3 グループにわけられ、記録が乏しい千島方言を除いては、それぞれがさらに下位の方言に分類される（田村 1988b ほか）<sup>1</sup>。特に北海道方言は、Asai（1974）の分類に従うと、宗谷を中心とした北部方言グループ、旭川・美幌・釧路などの北東部方言グループ、渡島・胆振・日高北部あたりの南西部方言グループ、そして様似を中心とした日高南

---

<sup>1</sup> 服部・知里（1960）は、北海道の 13 地域の方言、樺太の 5 地域の方言について、基礎語彙の言語年代学的に計算に基づき、各方言間の親疎関係を数値的に明らかにしている。その結果、北海道方言と樺太方言の間に大きな断層がある点など、諸方言間の特徴を指摘した。これを科学的な方言分類の嚆矢とし、Asai（1974）は、北海道の 15 地域の方言、樺太の 6 地域の方言に千島方言を加えた基礎語彙のクラスター分析をおこなった。各データが方言というよりも個人語（idiolect）であるという資料上の制約などから、明確な線引きは難しいとしながらも、北海道方言・樺太方言・千島方言の大方言グループ（major division）と、記録の乏しい千島方言を除いた各地域の下位方言グループ（minor division）を、系統的・分類学的な観点から明らかにした（Asai 1974 : 100）。



部の南東部方言グループの4つに分類される<sup>2</sup>。

アイヌを取り巻く社会環境の変化により、近代以降は急速にアイヌ語の継承が途絶えはじめ、現代では危機言語のひとつとして知られる<sup>3</sup>。一方で、明治期以来、研究者やアイヌ語話者によるアイヌ語の文字記録や音声記録が蓄積され、その一部は公開・公刊されてきた。

本稿ではアイヌ語北海道方言のうちでも、比較的、研究や記録の蓄積が多い南西部方言グループの沙流方言を対象に、複雑述語の分析をおこなっていく。体系の把握のためには通方言的な視点ならびに歴史的な視点も必要ではあるが、本稿においては深入りせず今後の課題としたい。

### 1.3. 調査資料とアイヌ語の表記

#### 1.3.1. 調査資料

本稿では、公刊されているアイヌ語テキストを中心に、複雑述語の用例調査および分析をおこなう。公刊された文字テキスト自体は二次資料にあたるため、その一次資料にあたる音声資料にアクセスできるものを主な調査対象とした。また、用例の調査範囲を広げるために、一部の文法記述・辞書記述中の用例やテキストのみが公刊されている資料も対象とした。ただし、本稿で用例を示すさいは、基本的に音声公開されている資料から引用する。

本稿ではアイヌ語北海道方言のうちでも、比較的、研究や記録の蓄積が多い沙流方言の資料を調査対象とする<sup>4</sup>。用例調査に用いた公刊資料は以下のとおりである。

#### 音声にアクセス可能な資料

- |                          |              |             |
|--------------------------|--------------|-------------|
| 萱野茂 (1998a) 『萱野茂のアイヌ神話集成 | カムイユカラ編 I』   | 1. 東京: 平凡社. |
| 萱野茂 (1998b) 『萱野茂のアイヌ神話集成 | カムイユカラ編 II』  | 2. 東京: 平凡社. |
| 萱野茂 (1998c) 『萱野茂のアイヌ神話集成 | カムイユカラ編 III』 | 3. 東京: 平凡社. |
| 萱野茂 (1998d) 『萱野茂のアイヌ神話集成 | ウウエペケレ編 I』   | 4. 東京: 平凡社. |
| 萱野茂 (1998e) 『萱野茂のアイヌ神話集成 | ウウエペケレ編 II』  | 5. 東京: 平凡社. |

<sup>2</sup> Asai (1974) では、北海道方言の下位方言グループを North, East, Central South, Eastern という名称で示しているが、本稿ではそれぞれの位置関係から北部、北東部、南西部、南東部という名称をあてた (佐藤 2008 : 6)。

<sup>3</sup> UNESCO (2010) は、アイヌ語北海道方言を絶滅寸前 (critically endangered) と報告している。村崎 (1963、1996) は、千島方言と樺太方言についてすでに話者が絶えたことを報告している。また、北海道方言についても、北原 (2011 : 92) が「高齢層になるほど、短い文で会話できる、単語を知っているという確率はあがるが、アイヌ語を第1言語として、あるいは幼少期から親しんで流暢に操れる話者は、少なくとも研究者が把握している限りではほとんどが他界してしまった」と報告するように非常に厳しい状況にある。

<sup>4</sup> 沙流方言は南西部方言グループに属するが、なかでも千歳方言、鶴川方言とは特徴的に近い関係にあることが指摘されている (田村 2002)。必要に応じて沙流方言以外の方言からも用例を参照するが、そのさいには方言名を明示する。方言名を特別あげていないものはすべて沙流方言の用例とする。

- 萱野茂 (1998f) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウエペケレ編 III』 6. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998g) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ユカラ編 I』 7. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998h) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ユカラ編 II』 8. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998i) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ユカラ編 III』 9. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (2005) 『新訂復刻 ウウエペケレ集大成』 東京: 日本伝統文化振興財団.
- 田村すず子 (1984) 『アイヌ語音声資料』 1. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1985) 『アイヌ語音声資料』 2. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1986) 『アイヌ語音声資料』 3. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1987) 『アイヌ語音声資料』 4. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1988a) 『アイヌ語音声資料』 5. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料』 6. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 千葉大学 (2015a) 『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2 年次 (北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書』 1. 千葉: 国立大学法人千葉大学.
- 千葉大学 (2015b) 『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2 年次 (北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書』 2. 千葉: 国立大学法人千葉大学.
- 千葉大学 (2015c) 『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2 年次 (北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書』 3. 千葉: 国立大学法人千葉大学.

### テキストのみの資料

- 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』 東京: 岩波書店.

以上の資料の書誌情報は参考文献欄と分けて本稿の巻末に「資料」としてあげている。それぞれの資料の特徴を、テキストの採録年代、テキストジャンルなどの構成、体裁にわけて以下に簡略的に示す。

### 萱野 (1998) 『萱野茂のアイヌ神話集成』

(採録年代) 1961 年～1975 年 (主に 1960 年代に採録されたもの)

(内容構成) 韻文形式の口承文芸である神謡 (kamuyyukar) 23 編、英雄叙事詩 (yukar) 4 編、散文形式の口承文芸である説話 (uwepeker) 13 編で構成され、いずれも沙流川流域で採録されたテキストである。なお、偏りはあるが 15 名の伝承者によって語られている。

(資料体裁) 左頁にアイヌ語がローマ字とカタカナで示され、右頁に日本語訳が示されている見開きの形式で、約 2,000 ページあり、各ジャンルの全体に占める比率は、神謡が約 23%、英雄叙事詩が約 27%、説話が約 50% である。全テキスト

に対応する付属の音声資料（CD）の総収録時間は約 11 時間である。テキストは 9 巻に渡る。

#### 萱野（2005）『ウウェペケレ集大成』

（採録年代）1961 年～1968 年

（内容構成）散文形式の口承文芸である説話（uwepeker）11 編で構成され、いずれも沙流川流域で採録されたテキストである。なお、1、2 編ずつ 7 名の伝承者によって語られている。

（資料体裁）1 ページの左半分がカタカナで書かれたアイヌ語のテキストであり、アイヌ語の下には日本語の逐語訳が付けられている。また、右半分は日本語訳であるが対訳的ではない。この形式で約 200 ページあり、全テキストに対応する付属の音声資料の総収録時間（CD）は約 2 時間である。

#### 田村（1984-1989）『アイヌ語音声資料』

（採録年代）1955 年～1969 年

（内容構成）沙流川流域の語り手による散文形式の口承文芸（uwepeker、upaskuma）が 28 編、韻文形式の神謡が 3 編、その他、歌謡や自然談話など 40 編、合わせてテキストの長短、ジャンルがさまざまな 71 編が収録されている。偏りはあるが 15 名の伝承者によって語られ、謡われている。

（資料体裁）見開きで左頁にローマ字のみのアイヌ語テキスト、右頁に日本語訳が示されている形式で、約 400 ページある。全テキストに対応する付属の音声資料の総収録時間は約 9 時間である。テキストは 6 巻に渡る。

#### 千葉大学（2015）『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2 年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書』

（採録年代）1969 年（平取町教育委員会が主体となって採録）

（内容構成）散文形式の口承文芸である説話（uwepeker）が 53 編（音声にして約 11.3 時間）、散文形式の英雄叙事詩（rupaye）が 4 編（音声にして約 1.1 時間）、韻文形式の口承文芸である神謡（kamuyyukar）が 29 編（音声にして約 3.1 時間）、英雄叙事詩（yukar）が 11 編（音声にして約 3.3 時間）、言葉遊び 1 編（約 1 分）の合計 98 編、約 19 時間におよぶ（ただし、ここでいう「編」は物語数ではなく、音声のトラック数であり、長大な物語などは複数のトラックにわかれて収録されている）。6 名の伝承者によって語られ、謡われている。

（資料体裁）アイヌ語カナ表記・ローマ字表記とその日本語訳が 1 行 1 セットとなり、それが 1 頁に約 9～13 セットずつ示されている。「語り」とそれについての伝承者・記録者による「解説」が交互に掲載されている。ひとつの報告書であ

るが3冊にわかれ、総ページ数2,388頁におよび、そのほとんどが上記のテキストである。本資料はデジタルアーカイブとして下記インターネットサイトでもテキスト・音声公開されている（いずれも2018年11月30日現在）。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館「アイヌ語・アイヌ口承文芸」

<http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/culture/language/story/>

文化庁「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化事業」

[http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/archivejigyo/index.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/archivejigyo/index.html)

### 久保寺（1977）『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』

（採録年代）1929年～1950年（主に1932年、1936年の採録が8割を占める）

（内容構成）韻文形式の口承文芸である神謡（kamui-yukar）106編と聖伝（oina）17編の計123編で構成されるが、このうち116編が沙流川流域で採録された「沙流川筋所伝」のテキストである。本稿ではこの116編を調査対象とする。なお、偏りはあるが5名の伝承者によって語られている。音声資料はない。

（資料体裁）アイヌ語はおおよそ4～6音節ほどの切れ目ごとに改行され、日本語の対訳がこれに並行して1行をなして116編通して約32,500行、約520ページのテキストである。なお、アイヌ語はヘボン式のローマ字で記されている。

これまでに公刊された沙流方言の資料は多く、資料調査として決して網羅的ではないが、1930年代から1970年代にかけて流暢なアイヌ語話者から採録されたこれらの資料群を用いる。また、これに加え、久保寺（1992）、中川（1995）、田村（1996）、萱野（2002）などのアイヌ語の辞書記述と、そこに示されている用例なども適宜参考・参照している。

上記の資料は、ほとんどが物語テキストである。アイヌの言語文化のなかで優れて発達した口承文芸は、これまで言語学、文化人類学はじめ多くの学術的な関心を集め、また、文化の伝承・保存の点からも記録が盛んにおこなわれ、その公開が期待されている。一方で、日常会話などのいわゆる自然談話の類は、口承文芸の記録に比して限られており、その多くは未公開といえる（上記の資料のなかでは田村1984が自然談話に近い資料である）。言語研究における文例調査の成果報告など、物語ではない言語資料も多く刊行されているが、音声資料が公開されているものは限られる<sup>5</sup>。

物語テキストは大きく韻文と散文に分けられる。韻文の口承文芸には神謡や英雄叙事詩

<sup>5</sup> 筆者は2012年以来、アイヌ語鶴川方言のフィールドワークをおこなってきた。とりわけ、吉村冬子氏（むかわ町在住）からは、長年にわたり鶴川地方のアイヌ語および関連する知識について親身にご教授を賜っている。本研究のテーマである複雑述語についても、吉村氏からこれまで多くの貴重なご教示を賜っている。ここにお名前を記し、吉村冬子氏ならびにご家族さまのご厚意に深く感謝申し上げる。

があり、日常語とは少し異なる修辭的、韻律的なスタイルで語られる。一方、散文の口承文芸、とりわけ説話（uwepeker）は、比較的日語に近い言葉で語られていく<sup>6</sup>。

テキストジャンルの偏りが、語彙や構文の出現に影響するおそれはあるが、現時点では上記の資料を用いて用例を確認する。また、物語テキストにおいては、韻律的な影響が比較的少ない散文テキストからの参照を優先する。

### 1.3.2. 調査方法

資料を検索可能な状態にするための簡易的なコーパスを作成して用いた。まず、上記のうち紙媒体で公開されている各資料を電子化するため、手入力またはOCRからの変換によってアイヌ語をテキストファイル化した。そのうえで、それぞれのテキストを音声資料と対照し、音声とテキストが一致するよう逐一確認、修正をしている。テキストファイルの検索には、正規表現検索が可能なgrepソフトを使用している。

本稿で用いたアイヌ語のテキストは、それぞれに採用している表記体系が異なる<sup>7</sup>。それぞれの資料の電子化にさいしては、原文の表記そのままにテキストファイル化した。検索においては正規表現での指定や表記体系に合わせた検索をおこなった。用例として本稿で引用するさいには、例示上の統一性を出すために、次節で示す表記に改めた。

### 1.3.3. アイヌ語の表記

#### 1.3.3.1. 表記の統一

アイヌ語は、これまで研究者およびアイヌ語話者自身によって、主に仮名やローマ字によるさまざまな表記の試みがなされてきた（中川 2006）。本稿で用いた資料のアイヌ語テキストも、それぞれに採用している表記体系や文法的な記号<sup>8</sup>が異なる。資料からのアイヌ語の用例引用にさいしては、例示上の統一性を出すため、筆者が次節の音素表記に書き改めた。なお、書き改めた音素表記、グロス、日本語訳の誤りは全て筆者に帰するものである。

---

<sup>6</sup> 知里（1955 [1973] : 140-145）は、散文の物語の特徴を詳述するなかで、自叙体散文物語（1人称叙述の形式）は日常語と異なる雅語を用い、側叙体散文物語（3人称叙述の形式）は日常の談話体で語られると特徴づけている。本稿の資料に含まれる散文物語はそのほとんどが3人称叙述の物語であり、日常語に近いものと考えられる。

<sup>7</sup> 中川（2006 : 2-3）は、アイヌ語の表記について「表記法はいまだ統一されたものではなく、個人ごとに違うと言ってもよい状況である（中略）ローマ字表記とカナ表記に2分されるが、それぞれにおいても、さらにいくつかのバリエーションがある」として、これまでの研究者やアイヌ人自身による文字表記の試みと、それぞれの表記体系をまとめている（引用中の中略は筆者による）。

<sup>8</sup> たとえば、人称などの文法的な標示において、語基との形態素境界を示すかどうか、示す場合はハイフンで示すかイコールで示すかなど、研究者によって、また、テキストによって異なりがみられる。

### 1.3.3.2. 音素

本稿で示すアイヌ語の表記は、服部（1964：34）に倣う。以下に、アイヌ語表記の音素とおよその音価を示す<sup>9</sup>。子音は以下の12個、母音は5個である<sup>10</sup>。

#### 子音

/p/	{/p/→[p] / _Vowel} {/p/→[pʰ] / Vowel_#}	/n/	[n]
/t/	{/t/→[t] / _[a], _[u], / _[e], / _[o]} {/t/→[tʰ] / _[i]} {/t/→[tʰ] / Vowel_#}	/r/	[r]
/k/	{/k/→[k] / _Vowel} {/k/→[kʰ] / Vowel_#}	/w/	[w]
/c/	[tɕ]	/y/	[j]
/s/	{/s/→[s] / _[a], / _[u], / _[e], / _[o]} {/s/→[ɕ] / _[i]}	/h/	{/h/→[ϕ] / _[u]} {/h/→[h] / _[a], / _[e], / _[o]} {/h/→[ç] / _[i]}
/m/	[m]	/ʔ/	[ʔ]

なお、声門閉鎖音 [ʔ] / ʔ / は、環境から出現が予測可能であるため、多くの先行研究と同様に本稿でも基本的に表記を省略する<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> 子音には有声性や有気性の対立はない。破裂音が有声性を帯びて発音されることはあるが、規則的な有声化ではない。摩擦音/s/は口蓋化することがある。およその音価ではこれらの異音の表記を一部省略した。

<sup>10</sup> 相補分布する異音の条件を{/x/→[y] / \_z}という形式で表した。これは、音素xが音価yとなる環境はアンダーハイフンの位置であるという意味である。例えば、{/h/→[ϕ] / \_[u]}では、音素/h/が[ϕ]という音価になるのは、母音[u]の前の位置に/h/が立つときという条件になる。なお、「#」は、アンダーハイフンの位置が音節末であることを示す。

<sup>11</sup> 声門閉鎖音は、ほかに子音音素が無ければ音節頭に現れるという点で、その現れが環境から予測できるためにたいしては表記が省略される（ブガエワ 2014：36）。声門閉鎖音を音素として立てるべきかは研究者によって議論がわかれる。例えば、浅井（1969：772）は、声門閉鎖音が音節頭の母音の前や稀に子音の前でも現れると観察を述べたうえで、音素として扱わない立場を示している。また、Refsing（1986：68）は、声門閉鎖音について研究者の間で音素としての認定や表記が異なる点に触れたうえで、自身の言語調査ではこの現象をとらえることが難しかったとして、記述において表記しないと述べている。

## 母音

/i/ [i]

/e/ [e]

/a/ [a]

/o/ [o]

/u/ [u]

母音の音価はおよそ日本語（標準語）の5母音と近いが、アイヌ語の/u/は日本語の「ウ」に比べて少し後ろで発音される（金田一 1931 : 4、田村 1988b : 6 ほか）。また、アイヌ語の[u]と[o]はともにやや円唇性があり、アクセントのない、緊張の緩い位置では音が近づいて聞き分けにくいことがあるなど、日本語の母音とは若干異なる点もある（佐藤 2008 : 10、ブガエワ 2014 : 37 ほか）。

本稿で用例として示すアイヌ語の表記は、基本的に上記の音素表記に統一して示す。音素表記中で用いる文法的な記号として、人称接辞および派生接辞の境界をすべてハイフン（-）で示す。また、ゼロ形態の人称接辞（3人称、2人称命令）を明示する目的で「ø-」を加えている。

## 第2章 アイヌ語の複雑述語の記述

### 2.1. アイヌ語述語の基本構造

アイヌ語は類型論的に主要部標示型の言語であり、文の主要部にあたる述語は名詞項などの従属部に比して文法的な標示を多く受ける。形態的な屈折と派生を中心に、以下で述語（動詞）の主要な特徴を示す。

#### 2.1.1. アイヌ語述語の形態・統語的な特徴

アイヌ語の文法範疇においては、基本的に動詞が述語を成す<sup>12</sup>。また、アイヌ語の動詞は人称で義務的に語形変化する（金田一 1931 : 99、田村（福田）1956 : 47 ほか）。1項動詞（いわゆる自動詞）の場合は、主語の人称を標示する主格人称接辞が動詞語幹に接合し、2項動詞（いわゆる他動詞）の場合は、主格人称接辞と直接目的語の人称を標示する目的格人称接辞が動詞語幹に接合する。ただし、人称接辞のスロットは2つであるため、3項動詞の場合は、主格人称接辞と間接目的語を標示する目的格人称接辞が動詞語幹に接合する（佐藤 2008 : 147-148）。これら動詞の派生と屈折の構造は以下のように整理できる。

- (1) 人称接辞 – 派生接頭辞 – 動詞語基 – 派生接尾辞 – 人称接辞  
語幹

大枠としては、動詞語幹に義務的に人称接辞が接頭もしくは接尾する構造である。沙流方言に接周辞はなく、人称接辞の体系のなかで接頭辞・接尾辞のどちらかが選択される。語基に接頭・接尾する派生接辞は、文法的な数 (number) のほか、使役や再帰、充当 (applicative) など、主だったものはいずれも動詞の結合価 (valency) に関わる要素である。派生接頭辞・接尾辞は基本的にそれぞれ最大2つ、語基に接合させることができる（田村（福田）1956 : 51、中川 2003 : 216）<sup>13</sup>。以上の形態・統語的な特徴からアイヌ語は、言語類型論上、述語に文法関係が標示される主要部標示型 (head-marking) の言語とされる。一方、日本語は、述語ではなく名詞項などに文法関係が標示される従属部標示型 (dependent-marking) の言語とされる<sup>14</sup>。アイヌ語と日本語の述語は形態・統語的な構造で異なりが大きいといえる。

<sup>12</sup> アイヌ語の文法範疇における「動詞」は、日本語のいわゆる形容詞を含む。知里 (1942 : 77) は、金田一 (1931) 以来記述されていた形容詞の範疇を、意味的にも形態的にも統語的にも自動詞 (知里 1942 では完用詞) と区別がないとして、動詞・形容詞ともに「用詞」としてまとめた。以来、アイヌ語の文法範疇においては形容詞を立てず動詞として扱うのが通例である。また、名詞述語を成すコピュラも、主語と補語を取って義務的に人称で語形変化することから、動詞の下位クラスのひとつとして分類される (田村 1988b : 14)。

<sup>13</sup> 田村 (1956) は、語基に接頭する派生要素として最大3つの接合可能性を記述しているが、それは化石的な語の分析を含めての最大数である。生産性からすると、中川 (2003) が示すように最大2つとみたほうがよい。

<sup>14</sup> 類型論における特徴づけは、その言語において絶対的な性質ではなく、あくまでその性質の有無、強弱を判断するものである。その点で、風間 (2015) は、書き言葉の日本語が従属部標示型であるのに対し、話し言葉の日本語では主要部標示型の性質が現れることを指摘している。ただし、アイヌ語については宮



また、アイヌ語の動詞の結合価 (valency) は、人称接辞や派生接辞によって形態・統語的に決まり厳守される。中川 (1993 : 163) は「アイヌ語はいわゆる動詞価 (valency) に関して、非常に透明度が高いという特徴を持っている。すなわち、各動詞の動詞価が意味論的にではなく、統語論的に明確に規定でき、人称接辞によって表層構造の上でそれが明示される」として、アイヌ語の動詞が要求する名詞項の数が統語的に算出可能な構造であると述べている。これもまた、日本語とは異なる特徴といえる。

以上が、アイヌ語の述語構造において基本となる形態的、統語的な特徴である (人称接辞の体系については次節で述べる)。本稿で示す沙流方言の用例にはグロスを付すが、これらの述語構造を前提とした分析である。

### 2.1.2. アイヌ語述語の人称標示

アイヌ語の動詞は人称に呼応して義務的に語形変化する。1 項動詞 (自動詞) には常に主語に呼応する主格の人称接辞が標示され、2 項動詞 (他動詞) には主語と目的語に呼応する主格と目的格の人称が標示される。沙流方言の動詞の人称接辞の体系を、田村 (1988b : 22) および田村 (1996) の記述に基づいて示す。

表 1 沙流方言の人称接辞の体系

	主格人称接辞		目的格人称接辞
	自動詞語幹	他動詞語幹	
1 人称単数	ku- / k-	ku- / k-	en-
1 人称複数除外形	-as	ci- / c-	un-
1 人称複数包括形	-an	a-	i-
2 人称単数	e-	e-	e-
2 人称複数	eci-	eci-	eci-
3 人称単数	∅-	∅-	∅-
3 人称複数	∅-	∅-	∅-
不定人称	-an	a-	i-

表 1 は、沙流方言の動詞に標示される人称接辞の一覧である<sup>15</sup>。動詞の単複や複数の除外形・包括形、語幹の自他などによって人称接辞が異なってくる。1 人称の主格人称接辞にみられる ku-と k-, ci-と c-はそれぞれ異形態の関係にあり、/i/を除く母音に接頭するときは k-

岡 (1992 : 44) が周辺諸言語との形態的標示の型との対照において「抜きんでて主要部標示型である」と述べており、日本語 (書き言葉) との対照においては、形態的、統語的に体系が異なるといえる。

<sup>15</sup> 人称接辞は基本的に動詞に標示されるが、名詞においても、特に譲渡不能 (inalienable possession) の名詞には人称接辞がついて所有関係を表わす。

c-となり、その他の音素に接頭するときは ku-、ci-となる。また、1 人称複数の除外形と包括形とは、1 人称複数の「私たち（が/に）」に聞き手を含むかどうかの別であり、含まない場合を除外形、含む場合を包括形と呼ぶ。

3 人称は単複や自他に関わらず音形のある形態的な接辞が標示されない。そのため、3 人称は形態的にゼロであることで 1 人称、2 人称と対立しているといえ、体系上はゼロ形態の接辞が付与されているとみなせる<sup>16</sup>。この音形のない体系上の形態素を表わすために「ø」を用い、音素表記のテキストにおいても 3 人称の人称接辞の存在を表わすためにあえて記す。

引用文中の 1 人称主格・目的格は単複に関わらず表 1 の不定人称と同じ標示になる。本稿で示す用例には物語中の引用文も多く、これらは主格・目的格ともに不定人称の標示形式で 1 人称の標示がなされている。本来は不定人称としてのグロスを付すべきであるが、本稿では便宜上、意味的に 1 人称との呼応が明白な場合に、これを 1 人称の人称接辞としてグロスを付す。

## 2.2. 複雑述語について

複雑述語 (complex predicate) という用語の定義は広く、さまざまな述語形式をさす<sup>17</sup>。初期の定義としては Alsina, Bresnan, and Sells (1997 : 1) が、複数の主要部をもつ述語 (predicates which are multi-headed) と示している。すなわち、それぞれが主要部に関係する情報を担う複数の文法要素 (形態素または語) によって構成される述語形式とのことである<sup>18</sup>。この定義は、複雑述語として括ることができる諸構造の大きな研究契機となったが、何を主要部とみなすかなど定義として曖昧な点もあり、その後も多くの研究者によって定義が示されてきた (岸本秀樹・由本 2014 : 2)。そのため、現在においても複雑述語の範囲を明確に規定するような定義はない (Amberber, Baker, and Harvey 2010 : 1)。すなわち、複雑述語の括りのなかでは、形態的にも統語的にも多様な述語形式が扱われる。

本稿においても、アイヌ語と日本語の複雑述語を厳密に定義して網羅的に記述することを目的としていない<sup>19</sup>。そこで、岸本秀樹・由本 (2014 : 1) が示す「述語要素を二つ以上

---

<sup>16</sup> ただし、動詞の命令形 (imperative) は 2 人称主格の標示が現れず、主格のスロットには音形のある人称接辞が立たない。これを 3 人称と同じくゼロ形態の接辞 (ø) が付与されているとみなすべきかは議論の余地があるが、本稿では命令形の主格も「ø-」として示す。

<sup>17</sup> 岸本秀樹・由本 (2014) は、複雑述語の定義を研究史に沿って整理したうえで、複雑述語として扱われてきた構文をリスト化して示している。軽動詞や複合動詞、連続動詞構文など複雑述語と括られる構文は多様であり、その統語的、形態的な緊密性も構文によって異なる。

<sup>18</sup> 定義の原文は次のとおり (斜体部)。Complex predicates can be defined as predicates which are multi-headed; they are composed of more than one grammatical element (either morphemes or words), each of which contributes part of the information ordinarily associated with a head. (Alsina, Bresnan, and Sells 1997 : 1)

<sup>19</sup> Baker (1996) などの初期の定義においては、複雑述語とは最低でも 2 つの形態素からなり、それぞれが  $\theta$ -grid としての句の項をマークする動詞構造であると定義しており、これに従って述語の使役形 (causative)、充当形 (applicative) なども複雑述語として分析する研究もある (Lomashvili 2011 ほか)。アイヌ語にも形態論的な派生として使役形や充当形が存在するが、本稿では論点の分散を防ぐために、これらを複雑述語に含めていない。

含みながら意味的には一つの述語として振る舞うもの」を複雑述語の定義とする<sup>20</sup>。

このような述語形式は通言語的に広くみられ、アイヌ語にも日本語にも存在する。以下では、本稿で対象とするアイヌ語の複雑述語を概観する。

### 2.3. アイヌ語の複雑述語

「述語要素を二つ以上含みながら意味的には一つの述語として振る舞うもの」（岸本秀樹・由本 2014 : 1）を複雑述語の定義とすると、アイヌ語の複雑述語は、以下の2つの構文でみられる（以下、下線などの強調はすべて筆者による加筆である）。

- (2) heroki tekpiraha ku-ø-kar wa  
 ニシン 開き 1SG.SBJ-3.OBJ-作る CONJ  
ku-ø-satke wa k-ø-anu.  
 1SG.SBJ-3.OBJ-干す CONJ 1SG.SBJ-3.OBJ-置く

ニシンの開きを私は作って干しておいた

田村 (1996 : 708)

- (3) tane menokopo ø-suke wa ipe-an okere  
 今 娘 3SG.SBJ-炊事する CONJ 食事する-1PL.SBJ 終える  
 kor ora ka aynu ø-arki yak ø-pirka  
 と それから 人 3PL.SBJ-来る なら 3.SBJ-良くなる

今、娘さんが料理を作っているので、私たちが食事しおえて、それから（談判しに来る）人が来るが良い

田村 (1989 : 50)

(1)、(2) の下線部が複雑述語にあたる形式である。述語における 2 つの動詞形式のうち前部を V1、後部を V2 とすると、(1) は「V1+CONJ+V2」、(2) は「V1+V2」という構成で意味的に複合してひとつの述語としてふるまっている。本稿では前者を補助動詞構文、後者を助動詞構文と呼ぶ<sup>21</sup>。

これらは、日本語の複雑述語である「V1 テ形+V2」(e.g. 干しておく) や「V1 連用形+V2」(e.g. 食べおえる) のような複合動詞と分析的な構造や機能が類似しているように見え、特にアイヌ語の「V1+CONJ+V2」は日本語の「V1 テ形+V2」との近接性から、言語接触による日本語からの影響で発達した構文である可能性が指摘されている（田村 1978 : 220、ブガエワ 2014 : 65）。しかし、アイヌ語と日本語は本来的に異なる体系を有し、機能的な類似があ

<sup>20</sup> 定義としては簡潔なものであるが、Amberber, Baker, and Harvey (2010) においても、複雑述語とは複数の述語が単節構造をなすもの (multi-predicational, but monoclausal structures) と簡潔に定義され、これ以上に厳密な規定を設けるような議論を避けている。

<sup>21</sup> 本稿で「補助動詞 (構文)」「助動詞 (構文)」という名称を用いるのは、田村 (福田) (1960)、田村 (1988b、1996 ほか) が「V1+CONJ+V2」を補助動詞として (田村 1978 では補助用言)、「V1+V2」を助動詞として記述していることに依る。研究者によって、記述によって用語に揺れはあるが、本稿では上記の呼称とする。

ったとしても、複雑述語が成立する上での形態的・統語的な点での相違も大きい。次節では、それぞれの構文について、先行研究をもとに特徴を概観していく。

### 2.3.1. 補助動詞構文

本稿で補助動詞構文と呼ぶ複雑述語は、述部において2つの動詞が接続助詞でつながり、意味的にひとつの述語として機能している構文である。補助動詞構文を成す接続助詞はいくつかあるが、本稿では補助動詞構文で共通して用いられる接続助詞 *wa* を取り上げて「V1+CONJ.wa+V2」とし、これらの用例から分析をおこなう<sup>22</sup>。

#### 2.3.1.1. 補助動詞構文の先行研究

ある組み合わせにおいて「V1+CONJ.wa+V2」がひとつの述語としてふるまうこと（V2がV1に文法的な意味をくわえること）は、早くは金田一（1931）の動詞アスペクト形式の記述にもみられる（それぞれの記述は後節で各形式を取り上げるさいに示す）。以後、この述語形式はアスペクトや接続助詞の記述において断片的に現れるが、これらの述語形式を述部複合のひとつの構文としてはじめて取り上げたのは田村（1972）である。

田村（1972：152-153）は、「V1+CONJ.wa+V2」が全体でひとつの動詞句として成立するときのV2を「補助動詞」と呼んでいる。構造的な特徴として、ひとつは、V1に入る動詞がオープンなのに対し、補助動詞となるV2が数語に限られている点、もうひとつは、意味的に補助動詞であるV2も人称変化することから形態的には本動詞であるといえる点の2つをあげている（田村1972：153）。特に、V1、V2ともに人称変化をするという特徴は、V2の形態・統語的な独立性を示すものであり、日本語の複雑述語とは異なる点である。

以後、「V1+CONJ.wa+V2」の機能や形態的な特徴は、静内方言を記述した Refsing（1986：193-195、200-203）や千歳方言を記述した Bugaeva（2004：60-69）、佐藤（2008：87-89）など、各方言の文法記述において示されてきた。また、補助動詞構文が表わす個別の機能の研究として、中川（1981）、佐藤（2006、2007）は「V1+CONJ+V2」で表されるアスペクト形式の用法に焦点を当てた記述をおこなっている。特に佐藤（2006、2007）は、完了のアスペクトを表わす形式（V1+CONJ.wa+an「V1 テイル」ほか）の用法を、日本語のアスペクト論における分類のなかで分析している。アイヌ語の複雑述語による完了アスペクト表現の特徴を日本語との対照のなかで明らかにし、その差異を指摘している。

機能面の記述が中心であった補助動詞構文に対し、Bugaeva（2014、2018）<sup>23</sup>は、複雑述語としての「V1+CONJ.wa+V2」の形態・統語的な特性に着目し、歴史的な観点からアイヌ

<sup>22</sup> 補助動詞構文をなす接続助詞は、*wa* のほかに *kor* および稀に *hine* があげられる（ブガエワ 2014：64）。*wa* と *hine* は接続される事象のまとまりの度合いに違いがあるようだが、意味が接近し使い分けは判然としない（田村 1972：156-157、中川 1995：331、佐藤 2008：44）。*kor* は V2 に存在詞が入るさいに進行のアスペクトとして補助動詞構文を形成するが、構文としては限られるため本稿では扱わない。

<sup>23</sup> Bugaeva（2018）は、「V1+CONJ.wa+V2」に関する研究発表のスライド資料である Bugaeva（2014）の研究をさらに進めて刊行された成果である。以後は Bugaeva（2018）を中心に参照する。

語の複雑述語のふるまいを論じている。Bugaeva (2018) は、アイヌ語の「V1+CONJ.wa+V2」について、その分析的な構造と機能が接近する日本語の「V1 テ形+V2」構文と対照しながら、複雑述語としての文法化の程度を分析している。まず、Bugaeva (2018 : 251-258) は補助動詞構文を V2 の人称のふるまいから 3 タイプに分け、それぞれ複雑述語としての節の統語的な緊密性 (単節性) をはかるために、10 個のパラメーターに基づく統語テストをおこなっている<sup>24</sup>。その結果、補助動詞構文を成す多くの V2 が単節的な特徴を示すなか、存在に関わる V2 (an 「いる、ある」、isam 「なくなる」) の場合は、ほとんどの統語テストにおいて複節的 (等位接続的) な特徴が示されたことから、文法化が初期的な段階であることを指摘している (Bugaeva 2018 : 258)。また日本語の「V1 テ形+V2」構文との対照のなかで、アイヌ語の補助動詞構文について次の特徴を明らかにした。まず、日本語の「V1 テ形+V2」構文は従属関係にある 2 つの節が文法化によって単節化した形式であるのに対して、アイヌ語の「V1+CONJ.wa+V2」構文は等位関係にある 2 つの節が文法化によって単節化している形式である点で異なる。また、文法化の程度もアイヌ語のほうが全体的に進んでいない特徴を示す (Bugaeva 2018 : 269)。さらに、これらアイヌ語の補助動詞構文は、日本語との接触によって発達・変化してきたことを示す証拠をあげて論じている (Bugaeva 2018 : 267-268)。

これら先行研究における機能的・統語的・歴史的な指摘はいずれもアイヌ語の体系的な複雑述語の記述に迫るうえで優れて重要なものである。一方で、後節で取り上げるアイヌ語の補助動詞構文における V1 と V2 の複合制約の問題など、未解明の部分も多く残されている。

### 2.3.1.2. 補助動詞構文概観

補助動詞構文の各形式を、田村 (1972 : 153-155、1988b : 21、1996 : 821-822) に基づいて整理すると、主に以下の 7 形式があげられる<sup>25</sup>。なお、動詞には単数形・複数形の別があるものもあるが、以下では特別な必要がない限りは単数形のみを代表して示す。これらの

<sup>24</sup> Bugaeva (2018 : 251-258) は、人称の標示、項の共有、複数性の標示、尊敬形、TAM および証拠性の表現、否定の表現、関係節化および名詞化、主題化と焦点化、等位接続、副詞のスコープなどのパラメーターから「V1 wa an」、「V1 wa isam」、その他の「V1 wa V2」それぞれの統語的な単節性、複節性を示した。

<sup>25</sup> 田村 (1972 : 154) は、接続助詞 wa の補助動詞構文として「(ne) wa siran (...ている、...である)」という形式をあげている。siran は結合価 0 の完全動詞であり、補助動詞構文を考えるうえで重要な形式のひとつである。しかし、V1 に入る動詞が ne (...である、になる) に限られるなど特異な点も多く、本稿での分析では扱わない。また、佐藤 (2008 : 89、千歳方言) は、「V1 wa tunas (...するのが早い)」という形式をあげている。後の補助動詞構文「V1+tunas (...するのが早い)」との関連性から非常に興味深い構文形式であるが、本稿で資料調査した限りの沙流方言のテキストからは用例が得られなかったため、本稿では分析に含めない (また、Bugaeva 2014 が調査に用いた沙流方言の民話コーパスにおいても「V1 wa tunas」の用例が得られなかったとのこと)。また、日本語の「V1 テ形+イク/クル」(V1 ていく/V1 てくる) 構文と並行的な構造をもつアイヌ語の構文「V1 wa arpa/ek」は先行研究でも記述がみられるが、その多くは物理的な移動をともなう意味である。抽象化したアスペクト的用法としての例は、Bugaeva (2014 : 24) や佐藤 (2008 : 87-88) が示すようにあることにはあるが、それぞれ稀な例として指摘している。本稿の資料調査でも当該の用例はほとんど得られなかった。「V1 wa arpa/ek」も補助動詞構文のひとつではあるが、本稿では扱わない。

構文の代表的な用例は、本稿の巻末に付録として示した。以下の括弧内の No. は付録の用例番号に対応する。

- a. V1 wa an 「V1 している、V1 してある」(付録 No.1~37)  
< an 「いる、ある」(1 項動詞)
- b. V1 wa isam 「V1 して (なくなって) しまう」(付録 No.38~53)  
< isam 「なくなる」(1 項動詞)
- c. V1 wa inkar 「V1 してみる」(付録 No.54~61)  
< inkar 「見る」(1 項動詞)
- d. V1 wa inu 「V1 してみる」(付録 No.62~65)  
< inu 「聞く」(1 項動詞)
- e. V1 wa anu 「(あらかじめ) V1 しておく」(付録 No.66~74)  
< anu 「置く」(2 項動詞)
- f. V1 wa okere 「V1 してしまう (完了する)、V1 し終える」(付録 No.75~84)  
< okere 「終える」(2 項動詞)
- g. V1 wa kore 「V1 してあげる、V1 してくれる」  
< kore 「あげる、もらう」(3 項動詞)

以下、各形式の先行研究と用例をあげて特徴を概観する。ただし、g. の「V1 wa kore」(V1 してくれ) については、本稿をとおして扱えなかったため以下での概観を割愛する。3 項動詞を含めた総合的な複雑述語の記述は今後の課題とする。

#### 2.3.1.2.1. V1 wa an (V1 ている)

V2 に存在詞の an (複数形 oka) が立って、日本語のアスペクト形式「V1 テ形+イル」(V1 ている) と構造的・機能的に類似した補助動詞構文を成す。アイヌ語のアスペクト形式の議論のなかで取り上げられ、比較的、他の補助動詞構文を成す形式よりも記述的な研究の蓄積が多い。

「V1 wa an」は完了のアスペクトを表わし、主に V1 の「変化の結果の状態」を表わす(中川 1981)<sup>26</sup>。中川(1981)は、V1 と an の人称関係(項の共有)が、V1 に立つ動詞の性質によって異なることを、複数のアイヌ語話者の判断を含めた詳細な分析のなかで明らかにし、タイプわけをしている。多くの複雑述語構造の成立において項の共有関係は非常に重要な特徴であるため<sup>27</sup>、以下、中川(1981)が V1 の動詞の性質によって分類した V1 と an

<sup>26</sup> 佐藤(2007)は、日本語の完了アスペクト類型をもとにアイヌ語千歳方言の用例を分類し、日本語のアスペクト論に基づいたより詳細な機能記述をおこなっている。

<sup>27</sup> 複雑述語のひとつである動詞連続構文(SVC)の研究において、Aikhenvald(2006:12)は V1 と V2 の間の文法範疇に関わる特徴として"Sharing Argument in SVC"(動詞連続構造における項の共有)をあげ、"Prototypical serial verb constructions share at least one argument." (典型的な動詞連続構造は少なくともひとつ

の人称関係のタイプをみていく。なお、それぞれのタイプの用例を中川（1981）から引用して示すが、例文番号は本稿での通し番号に改変した。また、グロスや表記なども、筆者が本稿での用例表記にあわせて改変している。

中川（1981）は、知里（1942）に基づきアイヌ語の動詞を「状態性動詞」と「非状態性動詞」の2つにわけている。前者は「単独で〈静的な状態〉を表わし得る（〈状態性〉を持つ）動詞」として、pirka「良くなる」、poro「大きくなる」、eraman「わかる、知っている」、kor「持つ、持っている」、an「いる/ある」、ne「である」のような例があげられ、そうではない動詞を後者の「非状態性動詞」と呼んでいる。

中川（1981：132）は、「非状態性」を表わす自動詞を3タイプにわけている。ひとつは、ahun「入る」やek「来る」のような自動詞で、これらがV1に立つと「主体の位置の移動」の結果状態が表される。なお、中川（1981）で「主体」の定義はないが、用例を見るかぎりでは主題役割における「動作主（agent）」「経験者（experiencer）」にあたるものと考えられる。

- (4)    nen ka soy ta        ø-ek                    wa                    ø-an.  
       誰 か 外 に        3SG.SBJ-来る        CONJ                3SG.SBJ-いる

誰かが外に来ている

中川（1981：132、原典（1）改変）

もうひとつは ray「死ぬ」や siyeye「病気になる」のような自動詞で、これらがV1に立つと「主体の状態変化」の結果状態が表される。

- (5)    tap    ku-siyeye                    wa                    k-an.  
       今    1SG.SBJ-病気になる        CONJ                3SG.SBJ-いる

今、私は身体の具合が悪い（lit. 病気になっている）

中川（1981：132、原典（2）改変）

最後のひとつは、hotke「横になる」のような自動詞で、V1に立つと「主体の位置の移動」の結果状態とも「主体の状態変化」の結果状態ともとることができるものである。

---

の項を共有する）と指摘している。また、同じく SVC について Dixon (2010：406) も "The general rule is that all verbs in an SVC should have the same subject." (一般的な規則としてひとつの動詞連続構造のなかのすべての動詞は同じ主語をとる) として、連続する動詞の間では特に主語の名詞項の共有が一般的であることを指摘している。日本語の複合動詞においても前部要素と後部要素の間に「主語（卓立項）一致の原則」があると指摘されており（松本 1998）、項の共有は複雑述語構造での動詞の複合における重要な特徴であるといえる（なお、アイヌ語の複雑述語は厳密には SVC ではないが、近似した構造であり参考にする）。

- (6)    ne    ø-hotke                      wa                      ø-an                      okaypo  
          その 3SG.SBJ-横になる CONJ                      3SG.SBJ-いる                      若者  
          ø-mos                      ka somo    ki    no  
          3SG.SBJ-目覚める も NEG    する CONJ.NEG

その寝ている若者は目ざめもしないで

中川 (1981 : 132、原典 (3) 改変)

以上、中川 (1981 : 132) は、非状態性の自動詞 V1 と an の組み合わせが「主体の位置移動・状態変化の結果状態を表わす完了アスペクト」として機能すると記述している。「V1 wa an」が表わす完了アスペクトが主体の「位置の移動」なのか「状態変化」なのかは必ずしも可分ではないが、いずれにしても非状態性の自動詞 V1 と an は主体（動作主や経験者の役割をもつ主語）の項を共有し、同じ人称が標示される。

また、中川 (1981 : 133-134) は「非状態性」を表わす他動詞を 2 タイプにわけている。ひとつは ani「持つ」や mi「着る」などの他動詞で、V1 に立つと「主体の状態変化」の結果状態が表される。

- (7)    sinnayno    ø-an                      amip    e-ø-mi                      wa                      e-an.  
          異なって 3.SBJ-ある    着物    2SG.SBJ-3SG.OBJ-着る CONJ                      2SG.SBJ-いる

変わった着物を着ているね

中川 (1981 : 133、原典 (6) 改変)

他動詞 V1 と an が主体の項を共有するため、an の人称は V1 の主格の人称と一致する。ただし、このタイプの他動詞は、次にあげるような V1 の目的語の項と an のとる項の共有を許さない。

もうひとつのタイプは、anu「置く」や epakasnu「教える」などの他動詞で、V1 に立つと「対象の状態・位置の変化」の結果状態が表される。このとき、他動詞 V1 の目的語の項と an のとる項が共有されるため、an の人称は V1 の目的格の人称と一致する。このときの「対象」は、主題役割における「主題 (theme)」にあたるものととらえておく。

- (8)    toan    kur    eun    ku-ø-ye                      wa                      ø-an                      kusu  
          あの 人    に    1SG.SBJ-3.OBJ-言う CONJ                      3.SBJ-ある から  
          ø-pirka                      na  
          3.SBJ-良くなる    ぞ

あの人に頼んであるから大丈夫だよ (lit. 言っている)

中川 (1981 : 134、原典 (8) 改変)

ただし、このタイプの他動詞は「主体の変化」の結果状態として、V1 と an の人称が主格で一致することも可能である。



- (9) toni un kur eun ku-ø-ye wa k-an kusu  
 あそこの人 に 1SG.SBJ-3.OBJ-言う CONJ 1SG.SBJ-いる から  
 ø-pirka wa  
 3.SBJ-良くなる よ

あの人に頼んであるから大丈夫だよ (lit. 言っている)

中川 (1981 : 134、原典 (7) 改変)

以上のとおり、中川 (1981) は、V1 に立つ動詞の性質によって、V1 と V2 (an) の項の共有に制約があることを示している。

また、中川 (1981) で「単独で〈静的な状態〉を表わし得る (〈状態性〉を持つ) 動詞」としてあげられている状態性の動詞 (pirka 「良くなる」、poro 「大きくなる」、eraman 「わかる、知っている」、kor 「持つ、持っている」、an 「いる/ある」、ne 「である」など) については、沙流方言の資料調査から以下のような用例がみられる。

- (10) soy ta MACINOKI a-ø-etohta wa  
 外 に 松の木 1SG.SBJ-3.OBJ-植える CONJ  
ø-pirka wa ø-an a p  
 3.SBJ-良くなる CONJ 3.SBJ-ある PRF もの  
 ekusukonna ø-cinine hine ruwe ne kusu  
 突然 3.SBJ-枯れる CONJ の だ から

外に松の木を植えてきれいであったのに、突然枯れてしまったので

千葉大学 (2015b\_15-15 : 1456) <sup>28</sup>

- (11) ohasir ta ø-yayhetukure wa to nen poka  
 誰もいない家 で 3SG.SBJ-一人で育つ CONJ あの なんとか  
ø-poro wa ø-an ruwe ne p  
 3SG.SBJ-大きくなる CONJ 3SG.SBJ-いる の だ もの

(村長の息子が) 誰もいない所で一人で育ち、あのようにどうかこうにか大きくなっているのだけれど

田村 (1985 : 42)

- (12) pewre-an korka a-onaha si-itak kor kur ne wa  
 若い-1SG.SBJ が 1SG-の父 本当の-言葉 持つ 人 である CONJ  
 nep ne yakka ø-i-epakasnu wa  
 何 である ても 3SG.SBJ-1SG.OBJ-教える CONJ  
a-ø-eraman wa an-an pe ne kusu  
 1SG.SBJ-3.OBJ-わかる CONJ いる-1SG.SBJ もの だ から

私は若いが、私の父は物知りであってなんであっても私に教えて、私は知っていたものだから (そのように神々に祈りました)

萱野 (2005 : 198)

<sup>28</sup> 千葉大学 (2015) の出典でアンダーハイフンの次に示しているのは、同資料における通しのファイル番号である。コロンの次に示しているのは、他の引用出典と同様にページ番号である。

以上は、沙流方言のテキストに現れる「状態性」の動詞が V1 に立つ用例の一部である。いずれも、「主体の状態変化」の結果状態を表わしており、V1 の主格と an の人称が一致している。

### 2.3.1.2.2. V1 wa isam (V1 てしまう)

V2 に否定動詞 isam 「ない、なくなる」が立って、日本語の「V1 テ形+シマウ」(V1 てしまう) と機能的に類似した補助動詞構文を成す。「V1 wa isam」の機能的な記述は早くからみられ、金田一 (1931 : 166) は、動詞の「已然態」として、『…して (もはや) 無し』の意、『してしまつた』となる」とその意味を記述している。また、田村 (福田) (1960 : 73) は、「その行動の結果何かが無くなってしまったこと」という対象の消失を意味にともなう点を、佐藤 (2008 : 88、千歳方言) も、「対象の損壊・消滅を意味する」と記述している。よって、「V1 wa isam」は対象の消失をともなう「完了」の機能を表わすといえる。

形態・統語的な特徴について Bugaeva (2018 : 258-259、261) は、存在 (an) と消失 (isam) を V2 にもつ「V1 wa an」(V1 ている) と「V1 wa isam」(V1 てしまう) が、V1 と V2 の主格項の共有を必要とせず、かわりに目的格の項の共有を許す点で、補助動詞構文のなかでも他の補助動詞 V2 に比べてより複節性 (biclausality) が高いという特徴を指摘している。

以上の記述から、「V1 wa isam」が何らかの消失、欠損をともなう意味でまとまるためには、V1 と isam がともに「損壊・消滅」を受ける対象の項で共有される必要がある。以下で、具体的な用例をあげる。

まず、「V1 wa isam」の V1 には他動詞が立つことができる。

- |      |               |                  |                     |           |               |
|------|---------------|------------------|---------------------|-----------|---------------|
| (13) | <u>ø-poro</u> | <u>a-matnepo</u> | <u>a-ø-rayke</u>    | <u>wa</u> | <u>ø-isam</u> |
|      | 3SG.SBJ-大きくなる | 1SG -の娘          | INDF.SBJ-3SG.OBJ-殺す | CONJ      | 3.SBJ-なくなる    |
|      | なる            |                  |                     |           |               |
|      | hawe          | ne               |                     |           |               |
|      | 話             | だ                |                     |           |               |

私の上の娘は殺されてしまったんだね

(lit. 誰かが私の上の娘を殺して私の上の娘がいなくなったのだ)

千葉大学 (2015c\_18-2 : 1724)

このとき、他動詞 V1 の主語は isam と共有されず、あくまで「損壊・消滅」の変化を受ける対象が目的語の項として isam と共有され、V1 の目的格の項と isam の主格の項とで人称が一致することになる。また、V1 には自動詞が立つこともできる。

- |      |                                 |             |               |            |               |              |
|------|---------------------------------|-------------|---------------|------------|---------------|--------------|
| (14) | <u>nerok kamuy rametok utar</u> | <u>anak</u> | <u>ø-paye</u> | <u>wa</u>  | <u>ø-isam</u> |              |
|      | その神                             | 勇者          | たちは           | 3PL.SBJ-行く | CONJ          | 3PL.SBJ-なくなる |

その神なる勇者たちは行ってしまった

(lit. その神なる勇者たちが行って勇者たちがなくなった)

資料調査の限りでは、自動詞 V1 と isam が項を共有する場合、V1 の多くは (14) のような移動動詞ないしは状態変化の動詞である。特に、移動動詞の場合は V1 の主語である動作主が移動することにより「V1 の動作主の場面からの消失」が表わされる。この移動動詞や mom 「流れる」、sat 「乾く」などの非対格動詞の主語には 3 人称の例しか見られない。仮に自動詞 V1 が 1 人称主格、2 人称主格をとると、項の共有から isam も 1 人称主格、2 人称主格をとることになる。また、他動詞 V1 においても、isam と共有される目的格に 1 人称や 2 人称が立つ例はみられない。引き続き検討が必要であるが、V2 の isam が V1 の人称を制約する点は V1 と isam の複雑述語としての複合性を示すものといえる<sup>29</sup>。

### 2.3.1.2.3. V1 wa inkar (V1 てみる)

V2 に自動詞の inkar 「見る」が立って、日本語の「V1 テ形+ミル」(V1 てみる) と構造的・機能的に類似した補助動詞構文を成す。田村 (1972 : 154) は、視覚に関することからについて「結果がどうかを知るために...する」という意味を記述しており、日本語のモダリティ論における「決着留保 (判断留保)」の機能ととらえることができる (吉田 2012 : 170-171)<sup>30</sup>。

「V1 wa inkar」の V1 には他動詞も自動詞も立つことができる。

- (15) nisatta ne a-ø-epotara wa inkar-an kusu ne  
 明日 に 1SG.SBJ-3.OBJ-祓う CONJ 見る-1SG.SBJ 意志

明日、私が (彼女を) お祓いしてみましよう

田村 (1989 : 40)

- (16) ney ta ka arpa-an wa inkar-an rusuy patek  
 いつにか 行く-1SG.SBJ CONJ 見る-1SG.SBJ たい ばかり  
 ki p ne a korka  
 するものだ PRF が

(父から絶対に行くなと言われてるが) いつか私は行ってみたいとばかり思っていたものだったけれど

萱野 (1998d : 12)

<sup>29</sup> 文法的には isam が 1 人称をとるさいは「ku-isam」ないしは「isam-an」という形が予想される。資料調査の限りでは「ku-isam」の例はみられないものの、「isam-an」で「私が死ぬ」(isam は「なくなる」の意味に死去も含む) という例がみられる。また、2 人称では「e-isam」という形が予想され、「おまえがいなくなる」という意味で当該の例がみられる。このように語彙的動詞としての isam は 1 人称・2 人称の主格をとれるが、補助動詞構文の V2 位置においては許さないという点からも、複雑述語としての意味上の複合性がうかがえる。

<sup>30</sup> 吉田 (2012 : 171) は、日本語のテミル構文 (V1 テ形+ミル (V1 てみる)) の用法がもつモダリティの性質について「行為の結果を見るまでは行為そのものによる事態の決着を差し置く、という『決着留保』の心的態度」と述べている。この点はアイヌ語の「V1 wa inkar」(V1 てみる) および次の「V1 wa inu」(V1 てみる) においても概ね一致する機能といえる (cf. (15)、(16))。

(15) は V1 が他動詞、(16) は V1 が自動詞の用例である。いずれの例も、V2 の inkar 「見る」は V1 と主格の項を共有し、人称が一致している。

日本語のモダリティ論において、吉田 (2012 : 170) は、日本語のテミル構文 (V1 テ形+ミル) の出現条件を「①行為の決定性についての判断留保, ②行為の結果へ関心, の 2 点」としている。前者は行為の結果に対し話者が「100 パーセントの確信を持ってないので、行為に決定性を持たせることをさし控え、結果を見ようという意識が感じられる」場合 (吉田 2012 : 170)、後者は「何らかの理由で行為の結果に関心を有し、かつ結果の観察が可能な場合」(吉田 2012 : 171) である。いずれにしても「ある動作をした後で、その結果を見る」という機能としてまとめられる。アイヌ語の「V1 wa inkar」は田村 (1972 : 154, 1988b : 67-68) が指摘するように、留保している決着 (結果状態) について視覚的に判断・評価するという機能をもつ。これは、吉田 (2012) の日本語のテミル構文の機能記述と合致する。

結果の可視性に関わらず、判断・評価をするために結果を観察する主体 (動作主) が V2 の inkar 「見る」に標示されることになる。行為 V1 の動作主と、その行為 V1 の結果を観察する主体 (動作主) とが一致することで意味的に複合していると考えられる。

#### 2.3.1.2.4. V1 wa inu (V1 てみる)

V2 に自動詞の inu 「聞く」が立って、「V1 wa inkar」と同様に「決着留保」のモダリティを表わす補助動詞構文を成す。機能的には日本語の「V1 テ形+ミル」(V1 てみる) と類似しているが、構造的には日本語に対応する形式がない (\*V1 テ形+キク (\*V1 てきく))。

田村 (1972 : 154) は、聴覚・触覚・味覚など視覚以外に関することがらについて「結果がどうかを知るために...する」という意味を記述しており、日本語のモダリティ論における「決着留保 (判断留保)」の機能ととらえることができる (吉田 2012 : 170-171)。留保された決着が視覚以外の感覚によって判断される場合に用いられる。

具体的な用例としては次のような例がみられる。

- |      |            |            |                  |           |               |            |
|------|------------|------------|------------------|-----------|---------------|------------|
| (17) | arpa-an    | wa         | a-ø-uk           | easkay    | pe            | ne         |
|      | 行く-1SG.SBJ | CONJ       | 1SG.SBJ-3.OBJ-取る | できる       | もの            | である        |
|      | hawe ne    | yakun      | <u>a-ø-ye</u>    | <u>wa</u> | <u>inu-an</u> | kusu ne wa |
|      | 話 である      | なら         | 1SG.SBJ-3.OBJ-言う | CONJ      | 聞く-1SG.SBJ    | 意志 よ       |
|      | sekor      | hawean-an  | akusu            |           |               |            |
|      | と          | 言う-1SG.SBJ | と                |           |               |            |

私が行って取ってくることができるものなら私が話をしてみようという  
千葉大学 (2015a\_6-3 : 472)

- |      |                     |           |              |     |
|------|---------------------|-----------|--------------|-----|
| (18) | <u>ø-ø-e</u>        | <u>wa</u> | <u>ø-inu</u> | yan |
|      | 2.SBJ.IMP-3.OBJ-食べる | CONJ      | 2.SBJ.IMP-聞く | IMP |

(昆布を) 食べてみなさい





この主格・目的格の一致という特性のために、他動詞 *aun* との項の共有を満たすことができない自動詞は V1 に立てないという制約につながっていると考えられる。

### 2.3.1.2.6. V1 wa okere (V1 てしまう)

V2 に他動詞の *okere* 「終える」が立って、「…しおえる、完全に…してしまう」という意味を表わす(田村 1972 : 153)。機能的には日本語の「V1 テ形+シマウ」(V1 てしまう)と類似しているが、構造的には日本語に対応する形式がない(\*V1 テ形+オエル(\*V1 ておえる))。金田一(1931 : 167)は動詞の「已然態」として、「『終る, ……してしまふ』終りまでしてしまふ意味」と記述している<sup>35</sup>。また、田村(福田)(1960 : 73)、田村(1988b : 37)は「予定の行動がすんだこと」を表わす機能と記述しており<sup>36</sup>、Bugueva(2014 : 26)がその機能を *completive aspect* と示すように「完遂」のアスペクトととらえられる<sup>37</sup>。

具体的な用例としては次のような例がみられる。

- (22) uwokpare p uwepeker tap  
 親不孝 もの 昔話 今  
ku-ø-ye wa k-ø-okere hawe tapan na.  
 1SG.SBJ-3.OBJ-言う CONJ 1SG.SBJ-3.OBJ-終える こと だ よ

親不孝者の昔話を今、私が語ってしまったんだよ (lit. 語りおえたんだよ)  
 田村(1985 : 12)

- (23) k-ø-oyra wa okere wa  
 1SG.SBJ-3.OBJ-忘れる CONJ 終える CONJ  
 mak ku-ø-ye p  
 どう 1SG.SBJ-3.OBJ-言う もの

忘れてしまって、何ていうんだ  
 田村(1984 : 56)

(22) (23) のように V1 には他動詞が立つが、項の共有と人称の一致については少々不規則的である。(22) のように V1 と *okere* が主格の項を共有し、人称の一致をする例もあれば、(23) のように *okere* が不変化のようにみえるものもある<sup>38</sup>。

<sup>35</sup> 金田一(1931 : 167)の記述は、次節で扱う「V1 *okere*」という接続助詞を伴わない助動詞構文も含んでいる。また、知里(1936, 1942)は「助詞+用詞からなる連語形式」として「V1 wa *okere*」を完了態のアスペクト形式として記述している。

<sup>36</sup> 田村(福田)(1960 : 73)は「kukú (wa) 'okére」(ku-ø-ku wa *okere*, 1SG.SBJ-3.OBJ-飲む CONJ *okere* 終える)という用例をあげ「飲む筈になっていたのを飲んだ。もし全部飲む予定だったのなら全部を、半分飲む予定だったのなら半分を飲み終わった」ことと説明している。

<sup>37</sup> 佐藤(2008 : 89)は「V1 wa *okere*」の機能として「動作、行為の終了、完成を表わす。また、その結果、状態に(通常、遺憾な)変化が起こることを意味することが多い」と記述を示している。

<sup>38</sup> 金田一(1931 : 167)は、「人稱を取らず助動詞化した動詞に外ならない」として助動詞構文「V1 *okere*」(後節で扱う)と補助動詞構文「V1 wa *okere*」における不変化の *okere* の例をあげている。そのなかで「これはまだ動詞としての意識が十分で、我といふ人稱辭を取つてゐる」として「Poro tuki auina wa aku wa a

金田一（1931：167）の記述においては、「V1 wa okere」の okere が人称変化を伴わない、より文法化した形式であるとみなされている。また、Bugueva and Nakagawa（2013：22）も「V1 wa okere」について、okere の人称が脱落する点、また、接続助詞を伴わず同様の意味を表わす助動詞構文「V1+okere」が存在する点、さらに V1 に自動詞が立つ場合に本来の「終える」からかけ離れた構文的意味となる点などから「V1+CONJ.wa+V2」構文において最も文法化が進んでいる形式であると述べている。

V1 に自動詞が立つ場合については「(属性や状態を表す自動詞(形容詞))のあとに置かれて)非常に/極めて...である(口語的な言い方)」(田村 1996：462)という程度の強さを表わす機能をもつ。具体的な用例をあげる。

- (24) sine ø-pirka wa okere ponkurmat  
 1 3SG.SBJ-良くなる CONJ 終える 和人の娘  
 ø-sapa ø-ø-karkar kor ø-soyne hine  
 3SG-の頭 3SG.SBJ-3SG.OBJ-飾り付ける ながら 3SG.SBJ-外出する て

一人の非常に美しい和人の娘が頭を整えながら出てきて  
 千葉大学 (2015a\_1-8：91)

(24) は、関係節の例であるが「Vi wa okere」は主節の述語としても現れる<sup>39</sup>。また、属性や状態を表わす(形容詞的な意味を持つ自動詞)以外の自動詞が V1 に立つ例は、本稿での資料調査の限りでは得られなかった。音声資料は確認できないが、久保寺(1977)の韻文物語テキストに以下のような例がみられる。

- (25) a-ø-ranke nupe ø-ø-epeka wa ø-an pe  
 1SG.SBJ-3.OBJ-落とす 涙 3.SBJ-3.OBJ-に当る CONJ 3.SBJ-いる もの  
 kamuy ne yakka kamiasi ne yakka ø-ray wa okere  
 神 である ても 化け物 である ても 3.SBJ-死ぬ CONJ 終える

私が落とした涙に当るものは、神様であっても化け物であっても死んでしまう  
 久保寺 (1977：499)

(25) は「V1 wa isam」(cf. 「ray wa isam」死んでしまう)との用法的な差異が問題となる用例である。このような例は非常に稀であり、「V1 wa okere」の自動詞 V1 はほとんどすべてが pirka「良くなる」、wen「悪くなる」、onne「老いる」、poro「大きくなる」、hepututu「ふくれっ面をしている」などの属性や状態を表わす自動詞であることが、資料調査の用例分布からもみてとれる<sup>40</sup>。

okere. (大杯我取りて我飲んで我終わる)」(a-ø-ku wa a-ø-okere ; a- 1SG.SBJ, ø- 3.OBJ, ku 飲む) という例をあげている。文法化において okere は過渡的なふるまいを示す。

<sup>39</sup> 資料調査の限り pirka (良くなる、良い) や wen (悪くなる、悪い) などが V1 に立った「pirka wa okere (非常に良い)」、「wen wa okere (非常に悪い)」は、すべて関係節で現れた。poro (大きくなる)、ri (高くなる) などが V1 に立った「poro wa okere (本当に大きくなった)」、「ri wa okere (本当に(草木のが丈が)高くなった)」は主節の述語として現れる。これがなんらかの制約なのか、テキストジャンルの偏りによるものなのかはわからないが、特徴的な分布である点は今後の課題として検討する。

<sup>40</sup> 1 例、萱野 (2005：167) に自動詞 ran 「(上から下へ) 下がる、落ちる」という一種の移動動詞が V1 に



なお、自動詞 V1 は 3 人称主格の例しか現れない。okere との人称の一致については、3 人称標示がゼロ形態であることから形態上は不明である。ただし、先行研究が指摘するように文法化が進んでいる構文として、過渡的な例は散見されるものの、不変化詞としての okere に移行している可能性が高い。

### 2.3.1.3. 補助動詞構文のまとめ

以上、補助動詞構文の用法と形態・統語的な特徴を先行研究と用例をもとに概観した。「V1+CONJ.wa+V2」の V2 には自動詞 (an 「いる/ある」、isam 「なくなる」、inkar 「見る」、inu 「聞く」) も他動詞 (anu 「置く」、okere 「終える」) も立って構文を成す。また、「V1 wa okere」構文以外は、基本的に V1 と V2 のあいだの人称の一致 (項の共有) が要求される。以下で、各形式の人称の一致 (項の共有関係) に関して簡単に示しなおす。

「V1 wa an」(V1 ている) は V1 が自動詞であれ他動詞であれ、意味的に「位置変化・状態変化の主体 (動作主・経験者)」となる項が V2 の an が取る項と共有され、V1 と V2 の主格人称接辞が一致する。V1 に立つ一部の他動詞は「位置変化・状態変化の対象」となる項でも V2 の an と共有することができ、その場合は V1 と V2 の目的格人称接辞が一致する。

「V1 wa isam」は V1 が他動詞であれ自動詞であれ意味的に「損壊・消滅の対象」となる項が isam と共有される。V1 が他動詞のさいは V1 の目的格と isam、また、V1 が自動詞の場合は主格と isam の人称接辞が一致する。なお、V1 が自動詞である場合はそのほとんどが移動動詞ないし状態変化の動詞である。移動の動作主ないし非対格動詞の主語 (例えば、mom 「流れる」、sat 「乾く」) における移動・変化の対象はすべて 3 人称である。

「V1 wa inkar」および「V1 wa inu」は V1 が他動詞であれ自動詞であれ V1 の動作主と、その留保している行為結果を判断する主体が共有されるため、V1 と V2 が主格人称接辞で一致する。

「V1 wa anu」は V1 に他動詞のみが立つ (V1 に自動詞が立てない可能性がある)。V1 と V2 のあいだでは、V1 の動作主と、行為 V1 による結果状態の保持をおこなう動作主の項が共有され主格人称で一致する。また、行為による変化を受け、その結果状態が保持される対象の項も共有され目的格人称で一致する。基本的に「V1 wa anu」は主格・目的格ともに V1 と anu のあいだで項の共有が要求される。

「V1 wa okere」は、文法化が進んでいるために okere 自体がすでに人称変化をしないことが多い。一方で、人称変化がみられる用例においては基本的に V1 に他動詞が立ち、V1 と okere の主格人称の一致がみられる。

補助動詞構文は補助動詞である V2 も人称変化をするため、V1 と同様に形態・統語的な独立性が高い。また、一部を除き動詞としての意味が残存しているといえる。V1 と V2 が補助動詞構文として成立するうえで求められる項の共有は、上記の概観をとおして、V2 の

---

立つ例が現れる。「cup ø-ran wa okere (日がすっかり落ちた)」(cup 太陽、ø-3.SBJ、ran 落ちる)。(25) の ray 「死ぬ」とあわせて、これらを一種の状態 (死んでいる状態、落ちている状態) ととらえるべきかは、今後、アイヌ語動詞の意味的性質のなかで検討していく。

意味特性を中心とした構文的な機能によって決定されると考えられる。

次節では本稿で扱うアイヌ語のもうひとつの複雑述語「助動詞構文」について、同じく先行研究とあわせて構文の概観を示す。また、以上の構文的特徴を下敷きとして、後章では複合制約について分析・考察をおこなう。

## 2.3.2. 助動詞構文

本稿で助動詞構文と呼ぶ複雑述語は、述部において 2 つの動詞が連続し、意味的にひとつの述語として機能している構文である。ただし、V1 が主動詞（語彙的動詞）であるのに対し、後続する V2 は人称変化をしない助動詞である。本稿では、動詞から転成した助動詞のうち、形態的には動詞としての性質を失っているが、意味的には元の動詞としての意味を残して V1 と複合する形式を対象に「V1+V2」として用例の分析をおこなう。

### 2.3.2.1. 助動詞構文の先行研究<sup>41</sup>

金田一（1931）は、動詞のAspectおよびModality形式についての記述のなかで助動詞をいくつかあげている<sup>42</sup>。ただし、機能的な括りのなかで動詞に後続する要素をすべて取り上げているため、助動詞のみならず、補助動詞やAspectに関わる接続助詞なども含まれる。

これに対し知里（1942）は、統語的な特徴に基づいて他の助詞から助動詞をわけ、さらに形式的、意味的な特徴から助動詞を 3 種に分類している。まず、第一種の助詞（すなわち助動詞）は助動詞としてのみ用いられる *Primary postpositions*（本来的な後置詞）の形式と、共時的に動詞としても用いられる *Secondary postpositions*（他の品詞から派生的に生じた後置詞）の形式にわけられるとした。さらに後者は「用詞としての意味と、助詞としての意味とを異にしてある」形式と「用詞として用ひられる場合と助詞として用ひられる場合とで、意味に大差の無い」形式の 2 つにわけられると指摘している（知里 1942 : 152）。すなわち、「形式上も意味上も動詞的ではない助動詞」、「形式上は動詞的だが意味上は機能語的な助動詞」、「形式上も意味上も動詞的な助動詞」の 3 種の別があることを示している。助動詞が形式上、意味上で差異を有するという指摘は知里の卓見であり、これは続く田村の記述においても反映される。

田村（福田）（1960）は、「動詞的形式 A (V1)」の後ろの位置に立つとともに「動詞的形式 B」を成す要素を助動詞として定義したうえで、助動詞を「(狭義の) 助動詞」(V1 の後ろの位置に立つて決して人称変化することがない要素) と、「動詞の助動詞的用法 (助動詞的に使われた動詞)」(時として語彙的動詞として、時として V1 の後ろの位置に立つて助動詞としてふるまう要素) の 2 つに分類して記述している。

「(狭義の) 助動詞」と「動詞の助動詞的用法」の間にみられる統語的なふるまいの異なりについて、田村（福田）（1960）は以下の例をあげて指摘している。なお、引用にさいしては例文番号を本稿での通し番号に改変した。また、グロスや表記なども、筆者が本稿で

<sup>41</sup> 拙稿、岸本（2016）において、アイヌ語の助動詞構文に係る先行研究をまとめている。本稿での先行研究はこれに依るところが大きい、あらためて整理して示しなおした。

<sup>42</sup> 金田一（1931 : 161-168, 181-182）は、アイヌ語の動詞におけるAspectやModalityに関わる諸形式を「態の助辞」（目次では「動作態の助動詞」）および「願望形」や「想像形」といった文形式についての記述のなかであげている。このなかには「V1 etokoyki」（V1 する支度をする）や「V1 okere」（V1 し終える）など、動詞から転成した助動詞形式（動詞の助動詞用法）も含まれる。

の用例表記にあわせて改変している。

- (26) ku-mokor            ka            ki            rusuy.  
1SG.SBJ-眠る            も            する            たい

私は眠ることもしたい

田村（福田）（1960：76、改変）

- (27) ku-mokor            ka            eaykap.  
1SG.SBJ-眠る            も            できない

私は眠ることもできない

田村（福田）（1960：76、改変）

(26) は狭義の「(狭義の) 助動詞」、(27) は「助動詞的に使われた動詞」の例である（下線部）。V1 と助動詞の間には副助詞 (ka 「も」) を挿入することができる。このとき「(狭義の) 助動詞」は副助詞に直接接続できず ki 「する」という代動詞的な形式を立てる必要があるのに対し、「助動詞的に使われた動詞」はこれが不要で副助詞に直接接続できる（田村（福田）1960：76）。このことから、「助動詞的に使われた動詞」は統語的により動詞的な性格を保っているといえる。また「助動詞的に使われた動詞」が、他の環境では自立した語彙的動詞としても現れうる点も「(狭義の) 助動詞」と区別される特徴である（田村（福田）1960：77）<sup>43</sup>。

Bugaeva and Nakagawa (2013) は、アイヌ語の複雑述語 (V-V complex) の括りにおいて助動詞構文（田村の「助動詞的に使われた動詞」による助動詞構文に相当）を取り上げ、複雑述語として記述的・歴史的な観点からの分析を示している。Bugaeva and Nakagawa (2013) は、述部で連続する2つの動詞形式 V1 と V2 (V2 が他動詞の場合) の形態・統語的な関係から、「V1+V2」を「1. 助動詞構文」、「2. 補文節構文」、「3. 派生名詞をとる他動詞構文」、「4. 合成動詞」という、共在する4つの構造にわけ、これらの4つを文法化連鎖 (grammaticalization chains) ととらえたうえで、複節的な表層構造から単節的な表層構造へと変化していく節融合 (clause fusion) の歴史的プロセスに当てはめて文法化の過程を示している。これらの分析を通じて「V1+CONJ.wa+V2」(補助動詞構文) と「V1+V2」(助動詞構文) が、歴史的に複節的 (biclausal) であったものが単節的な構造に変化している点で共通する一方、前者は等位構造、後者は補文節構造から文法化したものである点で異なると指摘している。アイヌ語の複雑述語の構造的な体系を考えるうえで極めて重要な知見である。

なお、助動詞構文「V1+V2」の形態・統語的および機能的な特徴について、Bugaeva and

<sup>43</sup> 狭義の「助動詞」にも動詞に由来すると考えられる形式が存在する。例えば完了を表わす助動詞 a は自動詞 a 「座る」と語源的に関係があると考えられるが（田村（福田）1960：72）、副助詞を挟む場合は代動詞的な ki を要する。また、「座る」という語彙的な意味が漂白され、もっぱら完了のアスペクトとして V1 に機能している点も「助動詞的に使われた動詞」とは異なる。

Nakagawa (2013 : 24-28) および Bugaeva (2012 : 493) は、先行研究を踏まえ概略以下のよう  
にまとめている。

- ・ V1 は人称で義務的に変化する語彙的な動詞（自動詞も他動詞も入る）、V2 は人称や数  
で変化しない助動詞である
- ・ V1 と V2 の間には任意的に副助詞 ka を挿入できる
- ・ 助動詞 V2 には他動詞も自動詞<sup>44</sup>も入り、いずれも助動詞のほかに語彙的な動詞として  
も使うことができる
- ・ 助動詞 V2 が表わす内容は「認識・感情」「モダリティ」「アスペクト」の3タイプにわ  
けられ、いずれも補文を取る動詞（complement-taking verbs）である

上記の条件を満たす助動詞 V2 は、田村（福田）（1960 : 76-77）をはじめ、田村（1988b :  
67）、佐藤（2008 : 80-85）ほか、さまざまな文法記述のなかでリストアップされ、記述され  
てきた。

本稿で分析の対象とする助動詞構文もこの条件を満たす形式（動詞の助動詞的用法）と  
する。

### 2.3.2.2. 助動詞構文概観

本稿で扱う助動詞構文の V2 は動詞からの転成形式である。どのような動詞が助動詞の用  
法をもつかも含め、V2 に立つ形式を網羅的に上げることは難しいが（佐藤 2008 : 90）、田  
村（福田）（1960 : 76-77）および田村（1988b : 67）に基づき、以下の主だった 8 形式をあ  
げる<sup>45</sup>。なお、以下の括弧内の No. は巻末付録の用例番号に対応する。

- a. V1 tunas 「V1 するのがはやい」（付録 No.85～91）  
< tunas 「はやくなる、はやい」（1 項動詞）
- b. V1 moyre 「V1 するのがおそい」（付録 No.92～98）  
< moyre 「おそくなる、おそい」（1 項動詞）
- c. V1 okere 「V1 し終える」（付録 No. 104～112）  
< okere 「終える」（2 項動詞）

<sup>44</sup> Bugaeva and Nakagawa (2013) は、文法化連鎖の観点からの分析上 V2 をあえて他動詞に限定して論じ  
ている。田村（福田）（1960）、中川（2013）をはじめ、これまでの体系的な記述のなかで助動詞 V2 に自  
動詞が入ることは明らかであるため、ここでは記述を追加した。

<sup>45</sup> 田村（福田）（1960 : 76-77）では、動詞の助動詞的用法として 18 形式をあげており、本稿で示した 8  
形式以外にも他動詞からの転成で「V1 niwkes (V1 し残す)」、「V1 amkir (V1 に覚えがある)」、「V1 eramiskari  
(V1 を見知らない)」、「V1 koyaykus (V1 ができない)」、「V1 eoripak (V1 に恐縮する)」、「V1 etoranne (V1  
を面倒に思う)」、「V1 kopan (V1 を嫌う)」、「V1 sitoma (V1 を恐れる)」、「V1 eykesuy (V1 を嫌がってし  
ない)」があげられる。また、軽動詞的な「ki (する)」も助動詞としてあげられる（田村 1988b : 67、佐  
藤 2008 : 82）。複雑述語の体系的な記述においていずれも扱うべき重要な形式であるが、本稿では扱わず  
今後の課題とする。



(28) (29) の *tunas* 「はやくなる」、*moyre* 「おそくなる」はともに主格人称の標示を受けていることから語彙的動詞といえる。特に (29) の人称接辞は自動詞につく形式であることから<sup>47</sup>、形態的に自動詞であることがわかる。これらは V1 の後ろに立ち、人称変化をしない助動詞としても現れる。

- (30) *tane* *ø-ø-kor* *kiyanne sensey utar ø-arki tunas wa*  
 今 3SG.SBJ-3.OBJ-持つ 年上の先生 たち 3PL.SBJ-来る はやくなる て  
*turano kotan un ø-hosippa kuni ø-ø-ye akusu*  
 一緒に 村 へ 3PL.SBJ-帰る ことになっている 3SG.SBJ-3.OBJ-言う と

今、彼女の年上の先生がたが来るのが早くなって、一緒にくにへ帰るのだと彼女が言うので

田村 (1984 : 54)

- (31) *iwak-an moyre kor i-etoko ta*  
 帰る-1PL.SBJ おそくなる と 1PL.-の先 に  
*iwak-an pakno ø-an wa*  
 帰る-1PL.SBJ まで 3SG.SBJ-いる て

私たちが帰るのが遅いと (おじさんは) 私たちより先に私たちが帰ってくるまでいて

萱野 (1998c : 92)

V1 全体の事象に対して、そのプロセスが「はやくなる」「おそくなる」という意味を加えている<sup>48</sup>。また、(31) のとおり、V1 と V2 は人称の一致がみられない。なお、上記はともに V1 が自動詞の用例であるが、V1 には他動詞も立つ。

助動詞構文の用例のうち自動詞 V2 の用例は、本稿で主に用いてきた資料群だけでは用例の絶対数が少なく体系的な把握が困難だった。そのため、助動詞構文の調査においては以下のインターネット上のアーカイブも利用して用例を追加した (2018 年 11 月 30 日現在)。

<sup>47</sup> 本稿のグロスでは人称接辞「-an」、「a-」に対して 1 人称主格と示してきた。意味上は 1 人称主格であるのだが、人称体系のなかでは正確には不定人称の接辞である。ただし、本稿で多く参照するような物語中では、この不定人称が「引用文中の 1 人称」として機能する (「4 人称」と称されることもある)。この不定人称は自動詞語幹につくさい「-an」、他動詞語幹につくさいは「a-」となることから、接続する動詞語幹の自他が形態的に明示される。

<sup>48</sup> 佐藤 (2008 : 89、千歳方言) は補助動詞構文 (助動詞的連語) のひとつとして「V1 wa *tunas* (～するの早い)」という形式をあげている。用例としては「*ikor anakne neun pak poronno an yakka a-eywanke wa tunas pe ne kusu hayta*。お金 (*ikor*) は (*anakne*) いくら (*neun pak*) たくさん (*poronno*) あっ (*an*) ても (*yakka*) 使う (*a-eywanke*) のが早い (*wa tunas*) ものだ (*pe ne*) から (*kusu*) 足りない (*hayta*)」(佐藤 2008 : 89) が示されている。この例を見る限りでは、*a-eywanke* 「私が (...を) 使う」と *tunas* のあいだで主格の人称は一致していない。本稿での資料調査においては、萱野 (1998i : 44) をはじめ、韻文の英雄叙事詩テキストにおいて「*a-ki wa tunas pe* (私がそうするのが早かったもの (だが))」という決まった表現でみられるのみである。用例に限られ、詳細については今後の課題であるが、*okere* 「終える」(「V1 wa *okere*」～「V1 *okere*」) と同様に補助動詞構文と助動詞構文にまたがる連続性が興味深い。

アイヌ民族博物館「アイヌ語アーカイブ」

<http://ainugo.ainu-museum.or.jp/>

このアーカイブは、文化庁アイヌ語アーカイブ作成支援事業の一環として平成 27 年度以降整備が進められてるもので、一般財団法人アイヌ民族博物館（北海道白老郡）が所蔵するアイヌ語の音声資料などを、テキストのみならず音声とともに公開するものである。沙流方言のアイヌ語音声資料 74 件（約 30 時間）、その他の音声資料 16 件（約 11 時間）、沙流方言と静内方言の映像資料 4 件（約 2 時間）の公開から始まり、公開資料は年々追加されている。本稿では、沙流方言の資料であることを確認したうえで、主に助動詞構文の用例を追加する目的で用いた。

上記のアーカイブから用例を追加し、「V1 tunas」（V1 するのがはやい）および「V1 moyre」（V1 するのがおそい）の V1 に立つ主な動詞をまとめると以下のとおりである。

(32) V1+tunas :

Vt : eese（承諾する）、kasi kik（悪魔払いをする）、eynonnoytak（祈る）、ka opas（助ける）、opici（放す）、...

Vi : ci（煮える）、hetuk（成長する）、hotke（寝る）、rupne（大きくなる）、sikekar（荷造りする）、toykar（畑づくりする）、...

(33) V1+moyre :

Vt : ye（言う）、hosipire（帰らせる）...

Vi : ahun（入る）、ci（煮える）、apkas（歩く）、ek（来る）、hosipi（もどる）、iwak（帰る）、tasaytak（返答する）、...

以上のとおり、基本的に「V1 tunas」「V1 moyre」は V1 に自動詞も他動詞も取る。例えば V1 に他動詞を取る例として次のような用例がみられる。

(34) okkaypo nispa      a-ø-hosipi-re      moyre  
若い男 旦那      1SG.SBJ-3SG.OBJ-帰る-CAUS      おそくなる

私が旦那を帰すのがおそくなる

アイヌ民族博物館（C0178L00774）<sup>49</sup>

<sup>49</sup> 括弧内はアイヌ民族博物館「アイヌ語アーカイブ」において付されている通しの資料番号である（C\*\*\*\*L\*\*\*\*；C はコンテンツ番号、L は行番号を表わすとのこと）。同アーカイブ内の検索エンジンではこの番号により当該の用例箇所へ行単位でアクセス可能である（2018 年 11 月 30 日現在）。



V1 に自動詞が立つ先述の (30) (31) も同様であるが、V2 の *tunas* 「はやくなる」、*moyre* 「おそくなる」が意味的に V1 を補文としてとるような関係となり、V1 のイベント全体に対してその遅速を述べている。これは、V1 に対する副詞的な意味ともとれる（ただし、副詞は動詞の前に立つため統語的には副詞ではない）。

一方で、他の自動詞にも補文を取る（補文標識をとって補文節をその項に取る）ものもあり、これらが *tunas* 「はやくなる、はやい」、*moyre* 「おそくなる、おそい」とどう異なるために助動詞構文を成さないのかが問題となる。これら、助動詞構文において V2 に立つ自動詞がこの 2 形式 (*tunas*、*moyre*) に限られている点については、後章で複合制約の問題としてふれる<sup>50</sup>。

### 2.3.2.2.2. 助動詞構文「V1+Vt」

田村（福田）（1960：76-77）は助動詞の機能を記述するなかで、V2 に立って助動詞としてふるまう他動詞を 16 形式あげ、その用法・用例を示している。また、以後の文法記述のなかで他動詞 V2 の助動詞構文の諸形式が記述されている<sup>51</sup>。

Bugaeva（2014）は助動詞構文の V2 がいずれも補文をとるタイプの動詞である点に着目し、歴史的に複節的な補文節構造であったものが単節化した構文であると分析している。V2 に立つ他動詞は多いため、以下では、語彙的な意味を残し、V1 とのあいだの意味的な補文関係が比較的明らかな *okere*（終える）「V1 *okere* (V1 し終える)」と *oyra*（忘れる）「V1 *oyra* (V1 し忘れる)」に絞ってみていく。それぞれの具体的な用例を示す。

まず、「V1 *okere*」「V1 *oyra*」ともに V1 には他動詞が立つ。

- (35) *ku-toye*                      *ku-ø-kar*                      *okere*    *wa*                      *ku-heseturiri*  
1SG-の畑                      1SG.SBJ-3.OBJ-作る    終える    CONJ                      1SG.SBJ-息をつく

私の畑を作りおえてほっと息をついた

田村（1996：186）

- (36) *k-ø-ukao*                      *oyra*                      *wa*                      *rurikan*  
1SG.SBJ-3.OBJ-しまう                      忘れる    CONJ                      少し湿る

私は（洗濯物を）しまい忘れて少し湿った

田村（1996：821）

<sup>50</sup> 助動詞構文を成す他の自動詞 V2 がある可能性はあるが、先行研究の記述に基づくと確実にいえるのは *tunas* と *moyre* の 2 形式のみといえる。また、後章でもふれるが、他動詞 V2 に立つ助動詞は、自動詞に充当接辞がついて他動詞に派生したものも多い (*e-aykap*、*e-askay*、*e-sinki*、*e-toranne* など、詳しくは後述)。これらが自動詞のまま助動詞構文をなさず、わざわざ結合価を増やすプロセスを経て助動詞となっている点などは、そのプロセスを経ずに自動詞のまま助動詞化している *tunas*、*moyre* との異なりを考えるうえで重要なポイントと考えられる。

<sup>51</sup> 佐藤（2008：78-93）は千歳方言の助動詞形式について用例を上げながら記述している。佐藤（2008）は、動詞の助動詞用法として田村（1960）があげる *ki*、*kopan*、*niwkes*、*okere* に加え、*esinki* 「飽きる」、*emonasap* 「忙しい」をあげている。また、田村（1996）の辞書記述では、*etoranne* 「気力がない」、*koyaykus* 「できない」、*nukuri* 「おっくうである」なども動詞の助動詞用法を有する形式として、各項目で示されている。

「V1 okere」には V1 には自動詞も立つ。

- (37) tane menokopo ø-suke wa ipe-an okere kor  
 今 娘 3SG.SBJ-炊事する て 食事する-1PL.SBJ 終わる と  
 ora ka aynu ø-arki yak ø-pirka  
 それから 人 3PL.SBJ-来る なら 3.SBJ-良くなる

今、娘さんが料理を作っているので、私たちが食事しおえて、それから（談判しに来る）人が来るが良い

田村（1989：50、本稿（3）再掲）

一方で、「V1 oyra」は、資料調査の限りで V1 に自動詞が立つ用例が得られなかった（岸本 2016：7-8）<sup>52</sup>。これが資料の限界による結果であるのか、「V1 oyra」のもつ複合制約なのかは、さらなる資料の追加も含めて引き続き検討する必要がある（語彙的動詞としての他動詞 oyra がとる統語的な補文節構造の存在については後章でふれる）。

また、田村（福田）（1960）で「動詞の助動詞用法」を示すひとつの基準となっていた副助詞 ka 「も」の挿入可能性をみると、「V1 oyra」が V1 と oyra のあいだに ka を挿入することが可能なのに対して、「V1 okere」の用例では V1 と okere のあいだに ka が挿入されている例がみつからない。

- (38) ø-en-nupurkasure hine  
 3SG.SBJ-1SG.OBJ-わけわからなくさせる CONJ  
ku-ø-ye ka oyra wa k-ek  
 1SG.SBJ-3.OBJ-言う も 忘れる CONJ 1SG.SBJ-来る

（借金を取り立てようと思ったのに）彼が私をわけわからなくさせて、私はそれを言うのも忘れてきた

田村（1996：445）

以上、助動詞が他動詞 V2 から転成した形式のうちから「V1 okere (V1 し終わる)」と「V1 oyra (V1 し忘れる)」に限定して用例とその分布を確認した。いずれも V1 には他動詞が立つことができるが、V1 に自動詞が立てるかは助動詞によって異なる。「V1 okere」の V1 に自動詞が立てる一方、「V1 oyra」では V1 に自動詞が立つ例が確認できなかった。また、副助詞 ka の挿入の可能性についても違いがみられ、「V1 oyra」は「V1 ka oyra」という挿入を許す一方、「V1 okere」の用例では ka が挿入される例が得られなかった。

<sup>52</sup> 拙稿、岸本（2016）は、資料調査をつうじてアイヌ語の助動詞構文の用例分布を数的に示した（ただし、調査資料の範囲が限られるため暫定的な数）。このなかでも oyra の V1 に自動詞が立つ例はみられなかった。しかし、他の「V1+V2」は V1 に自他ともに用例が現れることから、制約かどうかは今後の用例追加を含めて検討していきたい。

### 2.3.2.3. 助動詞構文のまとめ

以上、助動詞構文「V1+V2」の用法と形態・統語的な特徴を、助動詞 V2 の自他でわけて概観した。助動詞 V2 には自動詞 (tunas 「はやくなる、はやい」、moyre 「おそくなる、おそい」) も他動詞 (okere 「終える」、oyra 「忘れる」、easkay 「できる、上手だ」ほか) も立って構文を成すが、助動詞 V2 には圧倒的に他動詞が立つ。また、資料調査による用例の分布から、「V1+Vt」においても V1 の自他に複合制約のような偏りがみられた (? Vi oyra)。さらに、副助詞 ka の挿入についても構文形式によって偏りがみられた。

助動詞は形態的な人称変化がないため、V1 と V2 のあいだの人称の一致 (項の共有) は、表層的にはわからないが、複雑述語としての複合条件として検討しながら後章でこれらの複合制約について分析していく。

### 第3章 複雑述語の複合制約

前章までに先行研究と用例をもとにアイヌ語の補助動詞構文および助動詞構文を概観し、部分的にその制約にふれた。本章では V1 と V2 のあいだにみられる複合制約を整理して次章の分析へつなげる。

#### 3.1. 補助動詞構文の複合制約

補助動詞構文「V1+CONJ.wa+V2」は、ともに人称変化する V1 と V2 が意味的に複合してひとつの述語としてふるまう複雑述語構文である。V2 に立つ自動詞として「an (ある、いる)」、「isam (なくなる)」、「inkar (見る)」、「inu (聞く)」、また、V2 に立つ他動詞として「anu (置く)」、「okere (終える)」があげられる。各形式の機能や用例については前章で先行研究とともに示した。

V1 に立つ動詞については、補助動詞構文のもつ機能に対する意味的な制約以外にも、V2 との統語的な人称の一致 (項の共有) に係る複合制約がみられる。アイヌ語の動詞の義務的な人称標示と、それにとまなう結合価が厳守されるシステムは、V1 と V2 の複合においても形態・統語的なレベルで影響をもつと考えられる。

その理由として、V2 にたつ補助動詞形式の自他の制約があげられる。アイヌ語の動詞は自他が人称標示などの付き方で形態的に判別でき、たとえば「見る」という動詞にも次のように自動詞と他動詞の形式がある。

- (39) herikasino    inkar-an  
上の方へ    見る-1PL.SBJ

私たちは上のほうを見た

田村 (1996 : 185)

- (40) aynumosir            a-ø-nukar                    rusuy    wakusu  
人間の国            1SG.SBJ-3.OBJ-見る            たい    ので

(神である) 私は人間の国を見たいので

千葉大学 (2015a\_7-2 : 579)

(39) (40) の下線部はいずれも「見る」という動詞であるが、(39) は自動詞 inkar、(40) は他動詞 nukar である。この自他はそれぞれの主格人称接辞の付き方で判別できる。文脈によって自動詞 inkar は「見やる」というニュアンスであったり、他動詞 nukar は「見える」「会う」「さぐる」のような意味合いで訳しうる幅はあるが、第一義としては「見る」である (田村 1996 : 234、439、中川 1995 : 50、302、萱野 2002 : 86、351)。これは同様に V2 に立つ「聞く」にもあてはまり、自動詞 inu と他動詞 nu という区別がある。

このとき、「V1+CONJ.wa+V2」の V2 に立って補助動詞となるのは自動詞の inkar および inu であり、他動詞の nukar と nu では構文が成立しない。この点から、アイヌ語の補助動詞構

文における補助動詞 V2 は他動詞よりも自動詞が選択されるという複合上の制約があると考えられる。

しかし、構文を成す補助動詞がすべて自動詞かというそうではない。V2 には「anu (置く)」と「okere (終える)」という他動詞 (2 項動詞) が立って補助動詞構文を成している。これらも V1 と同様に人称変化をする形態・統語的に独立性の高い形式である。ただし、前章までにみたとおり、これら他動詞 V2 の構文は、V1 との複合に多くの制約や特異な点が見られる。まず「V1 wa anu」(V1 ておく) は、V1 に自動詞が立つ例がみられない。また、「V1 wa okere」(V1 てしまう) が、「V1 てしまう」という完遂のアスペクト (completive aspect) の機能として構文を成すのは V1 が他動詞の場合に限られ、V1 に自動詞が立つ場合は「とても V1 (である)」という程度強調の機能となる。なお、自動詞 V2 の補助動詞構文は、V1 に立つ動詞の自他に制約がみられない。他動詞 V2 のこれらの点は自動詞 V1 に対する制約、特異性といえる。

さらに「V1 wa okere」は、V1 の如何に関わらず不変化詞のように人称標示が現れない。V1 と V2 のあいだで人称の一致がみられる他の補助動詞構文に比べると「V1 wa okere」は形態的に助動詞的な性格が強いといえる。また、助動詞構文「V1 okere」との対応的な近接性、連続性がみられる点も他の補助動詞とは異なる特徴といえる (Bugaeva 2014 はこれらの点から「V1 wa okere」が補助動詞構文のなかで最も文法化が進んでいる形式と述べている)。このような特殊性も、V2 が他動詞であるという点と無関係ではなさそうである。

以上は、補助動詞構文の V2 の自他による複合制約の仮説である。次節では、V2 の自他の異なりと構文の成立の関係について用例から具体的に観察する。

### 3.1.1. 用例にみられる制約

補助動詞構文における複合制約の仮説をたてる発端となった「V1 てみる」の V2 の自他の異なりが、述部においてどのようにふるまうかを用例から確認する。まず、結論からすると自動詞 V2 の「V1 wa inkar」は補助動詞構文を成すのに対し、他動詞 V2 の「V1 wa nukar」は、単に 2 つの動詞句が接続助詞で等位接続されているだけの意味となる。

(41) arpa-an                      wa              inkar-an  
行く-1SG.SBJ                  CONJ              見る-1SG.SBJ

(私が) 行ってみる

萱野 (1998d : 12、本稿 (16) 再掲)

(42) arpa                              wa              nukar  
2.SBJ.IMP-行く                  CONJ              2.SBJ.IMP-見る

行って、見ろ

佐藤 (2008 : 43、原典 (3) 改変、千歳方言)

(41) は本稿の (16) ですでに示しているとおおり「(父に行くことを禁じられた地へ) いつの日か行ってみたいものだ」という文脈の用例である。行った先の具体的な何かを「見る」という意味ではなく、行為の結果がどうなるかはわからないけれど(視覚的に)判断するという「決着留保」のモダリティ機能として補助動詞構文を成しているといえる。一方で(42)は他動詞 *nukar* が義務的に取る目的語の項にあたるものを「見る」ことになる。

上記のように「V1 wa *inkar*」は補助動詞構文をなし、資料調査の限りでも V1 には自動詞も他動詞も立つ。V1 に立つ動詞の意味的な制約については観察が難しい。本来は、同様に「V1 てみる」の構文を成す「V1 wa *inu*」との使い分けにおいて、留保した結果を「視覚」によって判断する場合に選択される構文である(田村 1972: 154)。一方で、日本語との接触によって「V1 wa *inkar*」が「V1 wa *inu*」に取って代わりはじめ、区別のあいまいな例も散見される(Bugaeva 2018: 268-269)。意味的に V1 をどれほど制約するかはわからないが、資料調査の限りでは、概ね視覚的な判断と関連付けられる例であるといえる<sup>53</sup>。

以上のことから、「V1 てみる」を表わすアイヌ語の補助動詞構文は、V2 に自動詞の形式を立てることで、意味的な制約以外は形態的・統語的な制約を生じさせずに複雑述語として成立しているとみることができる。

V2 が他動詞である「V1 wa *anu*」および「V1 wa *okere*」について、V1 に自動詞を取れないもしくは、取った場合に非常に特殊な意味の構文となることについては、第 2 章のなかで先行研究および用例とともにすでに示しているので本節では割愛する。

以上をまとめると、補助動詞構文における複合制約は以下のように予想される。

- (43) 「V1 wa V2」の V2 には基本的に自動詞が立ち(自他両形ある動詞は自動詞が選択される)、V2 が他動詞の場合は V1 とのあいだに形態・統語的な複合上の問題を有する。

次章では、次節の助動詞構文における制約とあわせて、この仮説に対する統語理論による説明付けを試みる。

---

<sup>53</sup> 移動動詞 (*soyne* 「外に出る」、*arpa* 「行く」、*ahun* 「入る」など)をはじめ、V1 の行為の結果を視覚的に判断ないし理解しうる例が多い。

### 3.2. 助動詞構文の複合制約

助動詞構文「V1+V2」は、人称変化する V1 と不変化の助動詞 V2 が意味的に複合してひとつの述語としてふるまう複雑述語構文である。本稿では「動詞の助動詞用法」とみなせる V2 による構文を「助動詞構文」と呼んでいる。V2 に立つ助動詞を語彙的動詞としての自他で分けると、自動詞 V2 が「*tunas* (はやくなる、はやい)」、「*moyre* (おそくなる、おそい)」の2つであるのに対し、他動詞 V2 は「*oyra* (忘れる)」「*easkay* (できる、上手だ)」「*okere* (終える)」、など V1 と意味的に補文関係をもって「認識・感情」「モダリティ」「アスペクト」を表わすような動詞が立って構文を成す (Bugueva and Nakagawa 2013 : 26)。

これまでの記述に基づき、V2 に立つて助動詞構文を成す動詞の自他に着目すると、自動詞が助動詞としてふるまうパターンが少ないことがわかる<sup>54</sup>。すなわち、助動詞構文「V1+V2」は、圧倒的に他動詞 V2 で成立し、自動詞 V2 は構文成立に対して非常に制約的なパターンであるといえる。一方で、他動詞 V2 の形式には、本来的に他動詞のものと、派生により他動詞になっているものがある。*oyra*「忘れる」や *okere*「終える」などは語基レベルで他動詞といえるが、*etoranne*「面倒だ」、*eaykap*「できない、下手だ」、*easkay*「できる、上手だ」などは、それぞれの自動詞語基に *e-*という充当接頭辞がついて結合価を増やし、他動詞に派生した形式とみることができる<sup>55</sup>。*tunas* や *moyre* がこれらのプロセスを経ずに自動詞のまま助動詞としてふるまえる点、また、その他の自動詞が他動詞に派生することで助動詞としてふるまえる点は、助動詞構文における V2 自動詞の制約を考えるうえで大きな問題となる。

これら極端な偏りからすると、自動詞が V2 に立ちにくい点は統語的な制約であり、そのなかで自動詞 *tunas*、*moyre* が許されるのは、意味的な構造において他動詞 V2 と近い性質を有しているからではないかという仮説が立てられる<sup>56</sup>。助動詞構文をなす他動詞 V2 の構造的な特徴としては、Bugueva and Nakagawa (2013 : 27) が指摘するように、いずれも V1 を意味的に補文として取る動詞 (complement-taking verbs) であるという点があげられる。Bugueva and Nakagawa (2013) は Dixon (2010) の動詞分類に従い、助動詞構文を3つに分類している。

<sup>54</sup> 助動詞 V2 となる動詞の自他の偏りがあるということについては、北海道大学大学院文学研究科教授で指導教員でもある佐藤知己先生からご教示いただいた。これが大きなきっかけとなり助動詞構文の研究を進めることができた。また、この偏りの問題のひとつとして、自動詞の *tunas*「はやくなる、はやい」、*moyre*「おそくなる、おそい」が構文を成すのに対し、なぜその他の多くの自動詞 (特に属性や状態を表わす形容詞的な意味の自動詞) が助動詞構文を成さないのかという重大な課題・論点をご教示いただいた。ご指導に深く感謝申し上げますとともに、ご教示・ご指摘を本研究において展開できるよう今後も課題として取り組んでいく。

<sup>55</sup> 充当接頭辞 *e-*は動詞の語基についてその結合価をひとつ増やす。田村 (1996) は「前の名詞句で表されることがらとの関係を示す」として動詞に「...で、...を用いて、...に関して、...のことで、...するために」というような意味の項を追加する (田村 1996 : 70)。

<sup>56</sup> アイヌ語の動詞は自他が自明的であるが、本研究で分析を進めるうちに形態・統語的な自他だけではとらえきれない、動詞の意味的な性質による構造的な類似性に着目するに至った。この点について、佐藤知己先生からも *tunas* と *moyre* がむしろ他動詞に近く、自動詞と他動詞の中間的なふるまいをしている可能性、また、その段階にある他の自動詞の可能性を考慮するようご指摘を賜った。これにより仮説と研究の方向性が定まった。

Dixon (2010) は、補文を項に取る意味タイプの動詞を次のように定義している。まず、Dixon (2010 : 394) は動詞を大きく Primary verbs と Secondary verbs のグループに分け、前者はそれ自体が動作や状態を参照し文を成せる動詞、後者は他の動詞に対して意味的な修飾をする動詞としている。Primary verbs はさらに A と B に分けられ、A はその項に補文を取らない動詞類、B は補文を取ることができる動詞類である。本稿でいう complement-taking verbs のひとつは、この Primary-B の意味タイプに含まれる動詞グループである。Primary-B のグループの特徴を、Dixon (2010 : 394-396) から要約すると以下のとおり。

- すべての項のロットが名詞句か代名詞で埋められるが、1つ（稀に2つ）の項のロットが補文節で埋められることがある
- Primary-B のいずれの意味タイプも、それ自体の意味的な側面 (semantic profile) を有し、補文節の多様な原則的な戦略とともに現れる
- 意味タイプ : Attention : (a) see, hear, notice, smell, show, (b) discover, find  
Thinking : (a) think, consider, ... (b) assume suppose, (c) **remember, forget**, (d) **know, understand**, (e) believe, suspect  
Deciding : decide, resolve, plan  
Liking : (a) like, love, prefer, regret, fear, (b) enjoy

重要な点としては、補文を項のロットに取るという点と、Primary-B 自体が語彙的な意味を保つという点である。上記の意味タイプで太字としているものは、アイヌ語の助動詞 V2 に形式が認められるものである。

また、Secondary verbs にも complement-taking verbs を認めている。Dixon (2010 : 395, 399) は Secondary verbs について、次のように定義している。

- 深層構造において1つの項のロットが常に補文節で埋められなくてはならない
- 省略も可能であり、表層構造での項のロットでは名詞句だけが現れることもある
- 補文節構造をつうじて文法要素として語彙素として常に Primary verb とつながり、意味的に修飾をする概念である

Dixon はこの Secondary verbs をさらに A、B、C のタイプに分けている。Secondary-A は Primary verb の主題役割になにも追加することなく (Primary verb に項を追加することなく) 意味的な修飾をするもの。Secondary-B は Primary verb への修飾にさいして項を1つ追加するもの。Secondary-C は再度、項を追加するものである。

これらをふまえ、Bugueva and Nakagawa (2013 : 26) は、意味的に「V1+V2」の助動詞を「認知・感情」「モダリティ」「アスペクト」の3タイプに分け、「認知・感情」「モダリティ」をあらわす助動詞 V2 が Primary-B、「アスペクト」をあらわす助動詞 V2 が Secondary



タイプにあてはまると分類している<sup>57</sup>。

以上のことから、アイヌ語の助動詞構文は、V2 に立つ動詞の *complement-taking verbs* としての性質が構文の成立、一方では制約に強く関わるといえる。後章においては自動詞 *tunas*、*moyre* が *complement-taking verbs* としての性質を有する点を、他の自動詞との対照のなかで明らかにしていく。

また、前章で述べたように他動詞 V2 においても、V2 の形式によって V1 との複合制約がみられる。「V1 *oyra*」(V1 し忘れる) は、資料調査の限りで V1 に自動詞が立つ例が得られず、すべて V1 には他動詞が立つ用例であった。また、助動詞構文でひろく認められる副助詞 *ka* の挿入可能性について、「V1 *okere*」で挿入を許している例が得られない点も、「V1 *okere*」の特異性を示している（「V1 *okere*」は補助動詞構文「V1 *wa okere*」との対応的な近接性、連続性がみられ、他の助動詞構文に比して特異なふるまいがみられる）<sup>58</sup>。

### 3.2.1. 用例に見られる制約

助動詞構文において自動詞 V2 が構文を成すパターンが非常に限られているという制約について、今一度、構文的な特徴を整理する。

まず、前章でも述べたが、V2 に自動詞 *tunas* 「はやくなる、はやい」、*moyre* 「おそくなる、おそい」が立って助動詞構文を成すとき、V1 には自動詞も他動詞も立つ。V2 の *tunas*、*moyre* は、V1 の事象全体に対してその行為としての遅速を表わす点で、V1 をイベント項としてとる構造とみなせる。このような特徴は他動詞 V2 の助動詞構文とも概ね共通するといえる。

一方で、*tunas* 「はやくなる、はやい」、*moyre* 「おそくなる、おそい」のように状態を表わす他の多くの自動詞は助動詞構文を成さない。*tunas*、*moyre* のもつ特殊性とともに、状態を表わす他の自動詞の性質が制約を受ける点について明らかにしていく必要がある。

たとえば、自動詞 *pirka* 「よくなる、良い」は、*tunas* や *moyre* のように状態を表わす自動詞であり、*tunas*、*moyre* のように動詞の前の位置に立って副詞として機能するなどふるまいの類似性もみられるが<sup>59</sup>、V2 の位置に立って助動詞構文を形成しない。しかし、語彙的動詞としての自動詞 *pirka* が補文節構造の主節位置で現れる例はある。

<sup>57</sup> Bugaeva and Nakagawa (2013) は「認知・感情」として *amkir* ‘know/remember’, *eramiskari* ‘not know/remember’, *eraman* ‘know/understand’, *erampewtek* ‘not know/understand’, *oyra* ‘forget’, *ruska* ‘feel angry with’, *epotara* ‘worry about’, 「モダリティ」として *easkay* ‘can/be able of’, *eaykap* ‘cannot/be unable of’, *niwkes* ‘be unable to finish/incapable of (doing)’, *koyaykus* ‘be unable/unskillful of’, *etoranne* ‘not want/feel in the mood of (doing)’, 「アスペクト」として *oasi* ‘be about to do’, *okere* ‘finish(doing)’ の各形式をあげている。

<sup>58</sup> ただし、助動詞構文における副助詞 *ka* の挿入頻度は V2 の形式によって偏りが見られる。*eaykap* 「できない」、*nukuri* 「できない」、*oyra* 「忘れる」など否定的な意味の V2 の前では頻出する一方、*easkay* 「できる」などの否定的な意味が含まれない V2 の前ではあまり現れない。*okere* についても、副助詞 *ka* との意味的な相性による結果の可能性もあるが、*okere* の特異な文法化とあわせて今後も検討を続ける。

<sup>59</sup> 自動詞が副詞化するさいは派生接尾辞 *-no* がついて *tunas-no* (はやく)、*moyre-no* (おそく)、*pirka-no* (良く) となって用言の前に立つ。ただし、*tunas*、*moyre*、*pirka* の 3 形式においては *-no* をともなわずに副詞としてふるまう用例も散見される (*tunas ek* はやく来る、*moyre paru* ゆっくりあおぐ、*pirka nu* よく聞け、など)。*-no* の脱落が他の形式でどれほど許されるかは調査が必要であるが、基本的には脱落しないと考えられる。この点でも *pirka* は *tunas*、*moyre* と類似したふるまいを示す。

(44)	<u>ottena</u>	<u>a-ø-tura</u>	<u>hi</u>	<u>ø-pirka</u>	<u>kusu</u>
	アイヌの旦那	1SG.SBJ-3SG.OBJ-連れる	COMP	3.SBJ-良くなる	ので

アイヌの旦那を連れて行ったのがよかったので (猟に成功した)  
アイヌ民族博物館 (C0157L01010)

(44) から、自動詞 *pirka* が補文節を項に取っていることがわかる。これは「*ottena a-ø-tura* (アイヌの旦那を私が連れて行く)」という節が補文標識 *hi* によって補文節となり、主節の自動詞 *pirka* が取る主語の項を埋めているとみられる。このように *pirka* もイベント項を取ることができるわけである。

なお、語彙的動詞としての自動詞 *moyre* 「おそくなる」にも、補文標識をともなってイベント項をとる例がみられる。

(45)	<u>na</u>	<u>cep</u>	<u>ø-hemespa</u>	<u>hi</u>	<u>ø-moyre</u>
	まだ	魚	3PL.SBJ-のぼる	COMP	3.SBJ-おそくなる
	<u>kusu</u>	<u>ne</u>	<u>kuni</u>	<u>a-ø-ramu</u>	<u>wa</u>
	から	だ	と	1SG.SBJ-3.OBJ-思う	CONJ

(魚が少ないのは) まだ魚が川をのぼるのが遅いからだとは私  
田村 (1989 : 64)

一見すると (44) の *pirka* と (45) の *moyre* のあいだにはふるまいの違いがあまりないように思われる。ただし、(45) が助動詞構文に置き換えられるものかどうかは、現時点ではわからない。異なりについては、*tunas*、*moyre* が取りうる項の性質および *pirka* をはじめその他の状態を表わす自動詞が取りうる項との関係のなかで分析・検討をする必要がある。

また、他動詞 V2 においても、複合上の制約が個別の形式に見られる点について前章でふれた。まず、V2 に他動詞 *oyra* 「忘れる」が立つさい、V1 に自動詞が立つ例が得られなかったことから、*oyra* における V1 との複合制約の可能性が考えられる。他動詞 *oyra* 「忘れる」は、前述のとおり Dixon (2010 : 394) の Primary-B に分類される動詞であり、補文を取ることができる動詞である。助動詞構文においては、補文標識などの形態・統語的な要素を欠いて意味的に補文を取ると考えられる。

そのため、語彙的動詞としての他動詞 *oyra* 「忘れる」は補文標識をともなってその項に補文節を取ることができる。このとき補文節をなす動詞には自動詞も他動詞も立つが、この構造により導かれる意味は、助動詞構文での意味と異なる。

- (46) teeta kane a-onaha a-unuhu e-ronnu hi e-ø-oyra  
 昔むかし 1SG-の父 1SG-の母 2SG.SBJ-殺す COMP 2SG.SBJ-3.OBJ-忘れる  
 he ki ya  
 か する か

昔むかし私の両親をおまえが殺したことを忘れたか

千葉大学 (2015b\_16-10 : 1564)

- (47) a-neoro ø-arka hi ka a-ø-oyra no  
 1SG.-どこのところ 3SG.SBJ-痛い COMP も 1SG.SBJ-3.OBJ-忘れる て  
 tan pewtanke a-ø-kususuye  
 この 危急の叫び 1SG.SBJ-3.OBJ-ふりしぼる

どこが痛いのかも忘れて、私は危急の叫びをふりしぼった

千葉大学 (2015c\_19-4 : 1807-1808)

(46) (47) は助動詞構文ではない。補文標識 hi で補文節化された節を、主節の他動詞 oyra 「忘れる」が目的格で補文として取っている。(36) (38) の用例が示すように、助動詞構文「V1 oyra」では、「V1 の行為を遂行し忘れて V1 が未実現である」ということが表わされる。これに対し、(46) (47) のように語彙的動詞としての他動詞 oyra が補文節をとる場合、「すでに実現した行為ないし状態についての記憶的・感覚的な忘却」を意味することができる<sup>60</sup>。少なくとも、助動詞 oyra は後者の意味を表わしえない。

以上のように、「V1 oyra」は語彙的動詞としても助動詞としても補文を取ることができるが、意味的な異なりがみてとれる。助動詞 oyra が V1 に自動詞を取れないかどうかは資料の調査範囲を増やしてより慎重に検討する必要があるが、V1 と oyra の意味的な複合関係、統語的な複合関係について検討し、助動詞における V1 の制約の可能性も検討する。

<sup>60</sup> 未来のことについて言えるかは、用例が得られていないため判断できない。たとえば、「あいつは明日テストがあることも忘れて遊びほうけている」のような場合にどうなるかは、今後の資料調査で明らかにしたい。

## 第4章 複雑述語の分析

### 4.1. 分析に用いる理論について

前章までに示した補助動詞構文と助動詞構文それぞれにみられる V1 と V2 のあいだの複合制約について、本章では生成文法と Role and Reference Grammar (RRG) のふたつの理論を参照して構造を分析し、制約に係る点を明らかにする。

生成文法は、20 世紀半ばに Chomsky が提唱して以来、言語研究における中心的な理論のひとつとして発展してきた。日本語の分析においても応用され、多くの研究が蓄積されている。複文においては補文構造の分析に広く用いられ、日本語の複雑述語の研究においても軽動詞や埋め込み構造をともなう複合動詞などが盛んに分析されてきた（柴谷 1978、Matsumoto 1996、影山 1999 ほか）。しかし、非従属的な構造（等位的な構造など）においては、従来の生成文法による分析では必ずしも十分とはいえず、さらなる一般理論からのアプローチが求められる。また、生成文法は、英語や日本語など研究の蓄積が比較的多い大言語の分析に適用するかたちで発展してきた理論であり、アイヌ語のようなタイプの異なる言語の分析には必ずしも向かない。

一方で、RRG は 1980 年代に Foley および Van Valin によって提唱され、類型論的な多様性に着目し、アイヌ語のようなタイプも含め広く言語の分析に適用できる文法理論として展開されてきた（Foley and Van Valin 1984、Van Valin and LaPolla 1997 ほか）。特に、複雑述語のような複数の述語形式が文法的な依存関係にある構造の分析を理論に組み込んでおり、節連結の類型や操作子の階層など、一般理論としての汎用性をもつ。

以上のことから、アイヌ語の分析には RRG によるアプローチがより適していると考えられるが、まずは従属的な構造をもつアイヌ語の助動詞構文について、生成文法のアプローチによる分析を示す<sup>61</sup>。

### 4.2. 生成文法からのアプローチ

前節で述べたとおり、生成文法は文法理論として中心的かつ発展的である一方、典型的に多様な個々の言語の分析に必ずしも対応しない点、また、複雑述語の分析においては補文構造が中心的な対象である点など、アイヌ語の複雑述語の分析では生成文法にのみ依存せず、他のアプローチとして RRG による分析を導入する。

本稿ではまず、補文構造において生成文法の分析を試みる。アイヌ語の複雑述語においては助動詞構文がこれにあたる。複雑述語の総合的な分析は RRG でおこなうため、ここでは特に、「V1 tunas」(V1 するのがはやい)、「V1 moyre」(V1 するのがおそい) が他の自動詞と異なり助動詞を成せる点についての問題を中心に、日本語の複合動詞研究における生成文法理論の統語分析を導入して検討していく。生成文法と RRG という異なる文法理論を

---

<sup>61</sup> 本章での理論の展開について、佐藤知己先生、加藤重広先生、清水誠先生より重要なご指摘とご指導を賜った。ただし、理論の理解・応用における至らない点はすべて筆者に帰するものである。

同一の現象の考察に混同するのは不適切であるが、統語特徴を洗い出して今後の分析につなげるための参考として、はじめに検討していく。

#### 4.2.1. 日本語の複合動詞と生成理論

アイヌ語「V1+V2」の意味的・統語的な分析の手掛かりとして、研究蓄積が多い日本語の複合動詞の研究をみていく。Nakagawa and Bugaeva (2013 : 2) が、アイヌ語の助動詞構文と統語的に同等な日本語はないと述べているとおり、アイヌ語と日本語では述語の形態統語的な特徴が大きく異なる。しかし、先行研究のとおり、アイヌ語の「V1+V2」はV2の自他に関わらず意味関係上、補文関係の複合であるといえ、日本語の複合動詞にも同様の複合関係がみられる(影山 1993 : 108-113)。以下、日本語の複合動詞の統語的な分類をアイヌ語でも検討し、複合制約について考えていく。

##### 4.2.1.1. 複合動詞のタイプ

日本語の複合動詞<sup>62</sup>は、複合語内部に副助詞など統語的な要素を介入させることができず、語としての形態的緊密性が高い(影山 1999 : 190)。しかし、形態的、統語的な性質の異なりから複合動詞は語彙的複合動詞と統語的複合動詞にわけられる(影山 1993、影山 1999)。影山(1993 : 80-92)は、V1に対する「語彙照応の制約(代用形「そうする」への置換え)」「主語尊敬語化」「受身形化」「サ変動詞への置換え」「動詞重複化」の5つの統語テストから語彙的か統語的かを判断している。これらをパスできるものを統語的複合動詞と呼び、深層構造のレベルでV1とV2が別々の語として独立しているために可能であることを示した。また、そのために補文構造を持つと考えるのが自然である(由本 2005 : 161)。

アイヌ語の「V1+V2」は、先述のとおり副助詞kaを割り込ませることが可能であるため形態的な緊密性が低く、深層構造のレベルではそれぞれ独立した語を立てることになる。また、V1とV2は補文関係にある。これらの点から、日本語の統語的複合動詞の統語構造を参考に、アイヌ語の助動詞構文の複合構造を検討する。

##### 4.2.1.2. 統語的複合動詞の補文関係

従来の生成文法では、深層構造における主節と補文節の主語位置の違いによって、主語繰り上げ構造とコントロール構造のふたつの補文構造が想定されてきた。影山(1993)は、前者のV2が非対格動詞であることから非対格型、後者を他動詞型の補文構造と呼び分け、さらに、V2が補文内の目的語を $\theta$ 標示するかどうかで他動詞型をVP補文型とV'補文型の2つにわけた<sup>63</sup>。ここでは、影山(1993 : 158-160)の3タイプをシンプルに整理して示して

<sup>62</sup> 日本語の複合動詞には「V1テ形+V2」と「V1連用形+V2」があるが、本稿で扱うのは後者のみ。

<sup>63</sup> 影山(1993)は、複合動詞全体の受身化の可能性がV2によって異なる点に着目し、V2が補文内にまで意味的な影響を及ぼすか否かを、補文のV1が最大投射(VP)か中間投射(V')までかという統語構造に反映させた。V1が最大投射(VP)の場合は、PRO主語と目的語に $\theta$ を付与して完成するのに対して、中間投射(V')までの場合は補文内に主語がなく、補文の目的語はPRO主語を越えて主語位置へ移動でき

いる由本（2005：164）から引用する（例文番号は筆者が改変した）。

- (48) 非対格型：～かける、～だす、～過ぎる、～得る  
 VP 補文型：～つける、～そびれる、～遅れる、～かねる  
 V'補文型：～忘れる、～尽くす、～直す、～終える、～合う

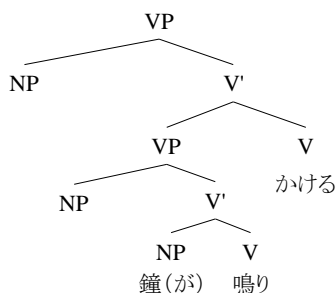


図1 非対格型

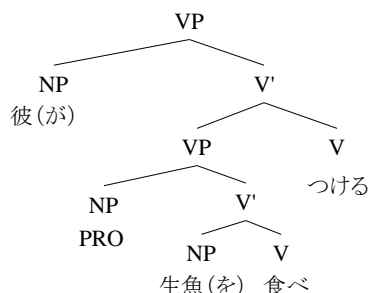


図2 VP 補文型

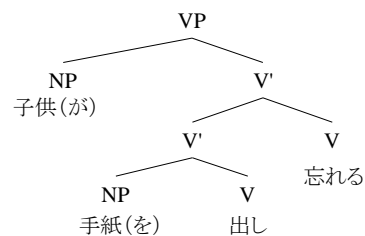


図3 V'補文型

上記の複合構造 3 タイプは、あくまで日本語の統語的複合動詞の補文関係構造を分析するために提示されているものであるため、アイヌ語の助動詞構文に直接適用するには多くの問題がある。しかし、表層での形態的緊密性に異なりはあっても、複雑述語としての深層での構造（複合の構造）を検討するうえでは重要な手掛かりとなる。

#### 4.2.2. アイヌ語「V1+V2」の複合構造

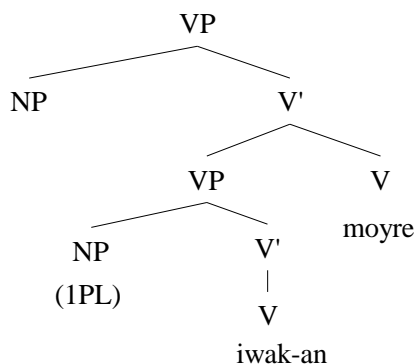
##### 4.2.2.1. 「V1+Vi」の統語構造

アイヌ語の自動詞 V2 は、*tunas* 「はやくなる、はやまる」と *moyre* 「おそくなる、おくれる」の 2 形式があげられる（田村（福田）1960：353）。ほかにも V2 に立って助動詞としてふるまう自動詞がある可能性はあるが、本稿では確実な報告のある 2 形式に限る。

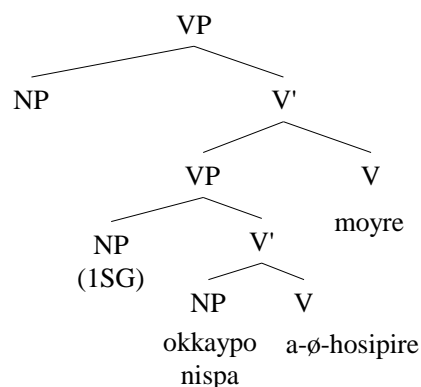
統語的複合動詞の補文関係構造における V2 は、非対格型か他動詞型である（影山 1993：139）。そのため、自動詞 *tunas* 「はやくなる」、*moyre* 「おそくなる」が V1 と補文関係にある場合、非対格型が適用されると考えられる。以下、代表して「V1+moyre」の用例のうち既出の (31) (34) を再掲し、その述部に限定して分析する。

---

ないという相対化最小性の条件に関与しないため、受身化のさいに主節主語へ移動できる構造である。また、V1 も V2 も補文内の目的語への  $\theta$  付与を許す構造である。



**iwak-an moyre**  
 帰る-1PL.SBJ おそくなる  
 私たちが帰るのがおそくなる (= 31)



**okkaypo nispa a-ø-hosipire moyre**  
 旦那 1SG.SBJ-3SG.OBJ-帰す おそくなる  
 私が若旦那を帰すのがおそくなる (=34)

図4 Vi moyre の統語構造

図5 Vt moyre の統語構造

補文 VP 内で V1 が完成し、それを V2 が内項（イベント項）として受けるという構造になる。補文関係とはあくまで意味上での複合関係であり、表層では V2 は不変化の助動詞である。

以上のような非対格型の複合構造は、V2 が主語名詞に意味的制限を課さない（由本 2005：164）。(32)、(33) で示したように、変化動詞、移動動詞など、動作主が有生物の動詞や、ci「煮える」のように無生物を主語（内項）にとる動詞も V1 に立つことができる。

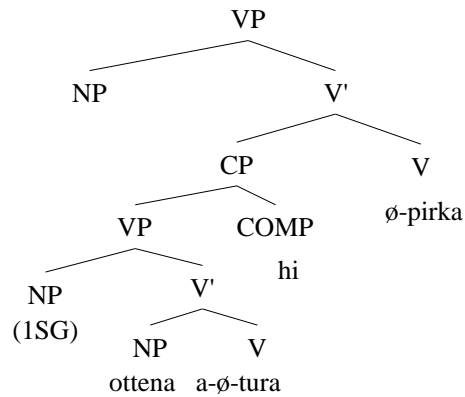
#### 4.2.2.2. 自動詞 V2 の複合制約

「V1+V2」は V2 に入る自動詞が非常に限られている。上記の構造のみを想定するならば、多くの形容詞的な意味をもつ非対格自動詞が V1 に入ることになる。本稿では、同じ非対格動詞 *pirka* 「よくなる」との対照から、*tunas* 「はやくなる」、*moyre* 「おそくなる」が V2 に入りうる理由を考える。

まず、*pirka* の用例であるが、資料調査の範囲では V2 に入って助動詞的にふるまう *pirka* はみられなかった。一方、補文節構造の複文としては以下の例がみられた。既出の (44) を (49) として再掲する。

- (49) ottena a-ø-tura hi ø-pirka kusu  
 アイヌの旦那 1SG.SBJ-3SG.OBJ-連れる COMP 3.SBJ-良くなる ので

アイヌの旦那を連れて行ったのがよかったので（猟に成功した）  
 アイヌ民族博物館（C0157L01010）



ottena a-ø-tura hi ø-pirka

アイヌの旦那を連れて行ったのがよかった (= 44、49)

図 6 pirka の補文節構造

pirka も tunas、moyre も、ともに非対格動詞として内項に補文的な項を取る点で統語構造は類似している (cf. 図 4、5)。しかし、pirka と同様に語彙的動詞として現れるさいの tunas、moyre の人称のふるまいをみると pirka との異なりがみえてくる。すでに (28) (29) でもふれたが、(50) (51) として再掲して樹形図を以下に示す。

(50) eytasa e-tunas  
あまりに 2SG.SBJ-はやくなる

(2人で米を搗いているとき、一方が早すぎて間に合わない状況で)  
あまりにおまえが (搗くのが) はやい

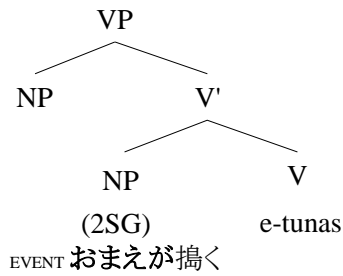
田村 (1996 : 736、本稿 (28) 再掲)

(51) a-ø-kor okkaypo hoski ø-arpa yak ø-pirka.  
1.SBJ-3.OBJ-持つ 青年 先に 2SG.SBJ.IMP-行く なら 3.SBJ-良くなる  
ponno moyre-an na  
少し おそくなる-1SG.SBJ から

にいさんが先に行ってください、ちょっと私は遅れていくから

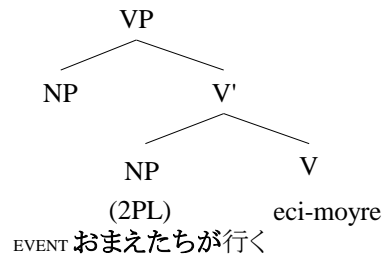
千葉大学 (2015c\_17-2 : 1609、本稿 (29) 再掲)





e-tunas

おまえが (搦くのが) はやい (=28、50)



moyre-an

私 (行くのが) おそくなる (=29、51)

図7 語彙的動詞としての tunas

図8 語彙的動詞としての moyre

このように、tunas「はやくなる」と moyre「おそくなる」は、文脈から補えるイベントの主体（動作主）を、それぞれの内項に主語としてとることができる（もちろん、補文標識や転成をとまなう名詞句ではないため、あくまで (50) (51) の NP がとるのは V2 の動作主にあたる名詞句のみである）。

一方で、pirka「よくなる」はイベント全体を補文として3人称で受けることはできるが、(50) (51) のように、補文内のイベントの動作主を直接 pirka の主語とすることができない (\*pirka-an)。また、pirka がイベントの主体を主語に受けないという点は次の例からもうかがえる。

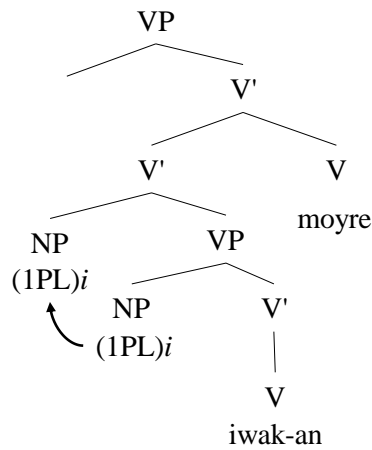
- (52) e-omkekar                      yakaye    sekor    ø-an            pe    ku-ø-nu  
 2SG.SBJ-風邪をひく    そうだ    と    3.SBJ-ある    もの    1SG.SBJ-3.OBJ-聞く  
 a            p            tane            ø-pirka            ya?  
 PRF            もの            もう            3.SBJ-良くなる            か

おまえが風邪をひいたようだとは私は聞いたけれど、もうよくなったのか  
 佐藤 (2008 : 52、千歳方言)

(52) は体調をたずねる表現である。補文構造ではないが、「風邪をひく」というイベントの主体（対象）が2人称であることを考えると (50) (51) のように \*tane e-pirka ya? 「おまえがもうよくなったか (tane もう、e-2SG.SBJ、pirka 良くなる、ya 疑問)」のような疑問文であったり、その答えとして \*tane ku-pirka. 「もうわたしよくなった (tane もう、ku-1SG.SBJ、pirka よくなる)」という表現が予期されるが、いずれも資料の限りは存在しない表現である。以上のことから、「V1+Vi」の複合条件をまとめると次のようになる。

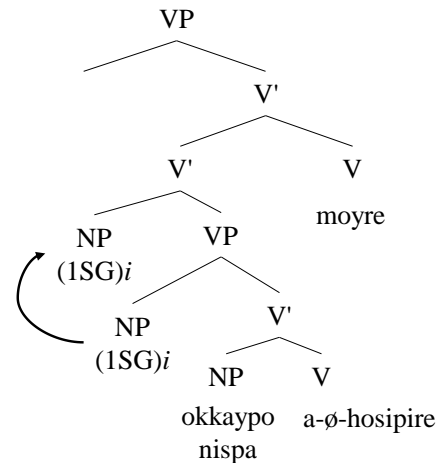
- ・助動詞構文「V1+Vi」が成立するには、深層レベルで非対格動詞 Vi が要求する主語（対象）と、深層レベルで Vi が内項としてとる V1 補文内の主語が一致する必要がある

(31) (34) にもとづいた図 4、図 5 を修正して再掲する。統語構造の示し方としては不適切な点もあるが、暫定的な表示とご理解いただきたい。



**iwak-an moyre**  
 帰る-1PL.SBJ おそくなる  
 私たちが帰るのがおそくなる (= 31)

図 9 Vi moyre の統語構造



**okkaypo nispa a-ø-hosipire moyre**  
 旦那 1SG.SBJ-3SG.OBJ-帰す おそくなる  
 私が若旦那を帰すのがおそくなる (=34)

図 10 Vt moyre の統語構造

統語的複合動詞と異なり、V1 と V2 の形態的な緊密性が低いため、日本語で想定される主語繰り上げは適用していない。そこで、深層レベルで V2 と V1 が主語を共有する点を統語上で示すため、V1 の VP のう上に V' を設け、その指定部に V1 補文内の主語を繰り上げることで moyre の統御下における主語 NP の共有を表わした。

以上のことから、「V1+Vi」が助動詞構文をなす場合は深層で主語の一致を要求し、これを満たせない場合には補文標識を用いた複文として表現されると考えられる<sup>64</sup>。

#### 4.2.2.3. 自動詞 V2 の統語的特徴のまとめ

以上、日本語の複合動詞研究における統語的複合動詞の構造を参考に、アイヌ語の「V1+Vi」の tunas 「はやくなる」、moyre 「おそくなる」の特徴を、pirka 「良くなる」との対照から示した。

助動詞構文「V1+Vi」が成立するには、深層レベルで非対格動詞 Vi が要求する主語（対

<sup>64</sup> ただし、田村 (1989 : 64) は moyre が補文標識 hi をとる例をあげている。cep hemespa hi moyre kusu 「魚がのぼるのがおそいので」(cep 魚、hemespa のぼる[Vi]、hi COMP、moyre おそくなる)。これらの扱いも含め、本稿で示した条件の妥当性を引き続き検討していく。

象) と、深層レベルで Vi が内項としてとる V1 補文内の主語が一致する必要があると分析した。これは、他動詞型の構造と接近し、これを満たす自動詞は深層において他動詞的な意味のふるまいをみせるとみられる。そのため、**tunas**「はやくなる」、**moyre**「おそくなる」は他動詞相当の構造を示すことで助動詞として成立すると考えられる。自動詞の再分類は重要な今後の課題である。

生成文法によるアプローチは非常に限られた点のみであるが、この複合制約の検討も含め、次節以降は補助動詞構文、助動詞構文ともに RRG による分析を試みる。

### 4.3. Role and Reference Grammar からのアプローチ

#### 4.3.1. RRG の基本概念

以下、分析に先立って Role and Reference Grammar (RRG) の基本的な概念について確認していく。拙稿、岸本 (2017a) において示した内容に従い、加筆・修正して以下で示す。

##### 4.3.1.1. RRG における節構造

Van Valin and LaPolla (1997) は統語構造を複雑に抽象化せず、単層的な統語表示を設けて意味表示と関係づけることで節の構造を明らかにする RRG を展開している。このなかで、節 (clause) において述語的要素と非述語的要素という区分および名詞や接置詞句が述語の項であるかいないかという区分がすべての言語において統語的な役割を果たしているとして、節に次のような層状の構造 (Layered Structure of the Clause : LSC) を認めている。以下、Van Valin and LaPolla (1997 : 25-27) を要約する。

まず節には、節構造のなかの統語的な単位を決める要素である述語 (predicate) がある。そして、節には大抵いくつかの名詞句 (接置詞句) が含まれているが、このなかには述語がとる項 (arguments) と、そうではない非項 (non-arguments) の別がある。LSC ではこれらの意味論的に区別される要素を、以下のような統語単位として示している (Van Valin and LaPolla 1997 : 27、原典 Table2.1 改変) <sup>65</sup>。

Nucleus (内核)	述語
Core-Argument (中核項)	述語の意味的に表示される項
Periphery (周辺)	非項要素
Core (中核)	述語+項 (= nucleus+core argument)
Clause (節)	述語+項+非項要素 (= core+periphery)

これら LSC の統語単位は、概ね以下のような関係としてとらえられる (Van Valin and LaPolla 1997 : 26、原典 Fig.2.6 改変)

---

<sup>65</sup> RRG の用語の日本語訳は大堀 (2012) に従う。なお、拙稿、岸本 (2017a) も大堀 (2012) に倣ったが、筆者の不注意により本来は「内核」とあてべき Nucleus に「中核」、「中核」とあてべき Core に「内核」とあててしまったことが掲載後に発覚した。拙稿における Nucleus と Core の概念的な関係・分析に影響はないが、用語の混乱を招いてしまった。本稿では修正し、改めて大堀 (2012) に倣う。

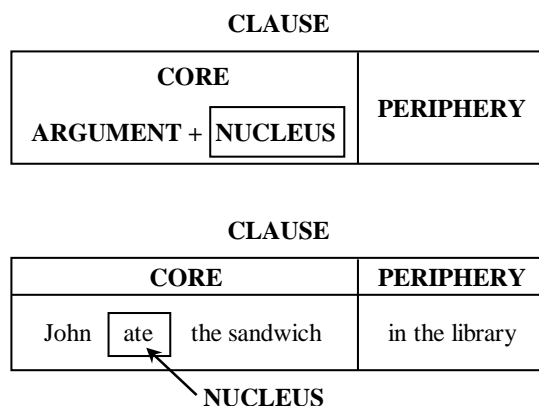


図 11 LSC の構成要素

この LSC の統語単位を樹形図で表すと次のようなモデルとなる (Van Valin and LaPolla 1997 : 31、原典 Fig2.7 改変)。

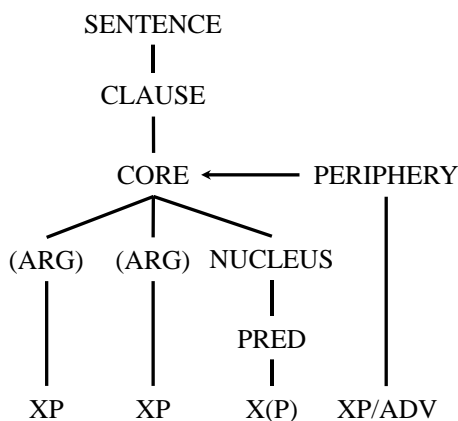


図 12 LSC の形式表示

LSC の利点は、基本的に節構造に抽象的な深層構造を設けず、いわゆる表層形のまま統語レベルの分析が可能にある点にある。このため、線状的な語順に依存した関係性はないために様々な語順に合わせた分析が可能である。形式表示には様々な細則があるが、後ほど必要に応じて述べる。本稿ではアイヌ語の複雑述語である「V1+CONJ.wa+V2」および「V1+V2」における節構造の提示として LSC を用いた分析を試みる。

LSC とあわせて RRG における接続 (juncture) と接合 (nexus) の概念についても先に述べておく<sup>66</sup>。

<sup>66</sup> RRG における nexus は、イエスペルセン (1924) のネクサス (nexus) とは異なる概念である。イエスペルセンによるジャンクションとネクサスは、語の連結における内心構造と外心構造をさす用語であるが、RRG における nexus は、結合する単位間の依存関係を示すものである。

#### 4.3.1.2. RRGにおける接続と接合

単節（単文）である場合は図 2 で示したような比較的単純な統語単位の層で節の分析が可能であるが、複雑述語をはじめとした複文的構造においては、複数の述語が LSC のどのレベルで結合した単位を成しているかで統語的な区別が生じる。Van Valin and LaPolla (1997) は複雑構造の節について、LSC のどの統語単位で結合しているかによって以下の 3 つのレベルを設けている（丸括弧内は筆者が加筆）。

- a. [CORE ... [NUC PRED] ... + ... [NUC PRED] ... ]      Nuclear Juncture (内核接続)
- b. [CLAUSE ... [CORE ... ] ... + ... [CORE ... ] ... ]      Core Juncture (中核接続)
- c. [SENTENCE ... [CLAUSE ... ] ... + ... [CLAUSE ... ] ... ]      Clausal Juncture (節接続)

Van Valin and LaPolla (1997 : 442、原典 (8.2))

述部において複数（例えば 2 つ）の述語がみられる場合、互いが内核のレベル、中核のレベル、節のレベルのいずれのレベルで統語的にリンクしているのかを表わすもので、このように、どの単位同士で結合しているのかという概念が接続 (juncture) である。

一方で、接続の関係にある単位同士がどのような接続関係（等位接続・従属接続など）にあるのかを表わす概念を接合 (nexus) とよび、Van Valin and LaPolla (1997 : 454) は英語や印欧語族における伝統的な従属接続 (subordination)・等位接続 (coordination) の別の他に、連位接続 (cosubordination) を加え、広く言語の分析に対応させている。それぞれの接合タイプを単純化して示すと以下のような関係である。Van Valin and LaPolla (1997 : 454) で図示されているが、同じ概念を埋め込み構造の点から整理して示している Hasegawa (1996 : 46) に基づいて要約する。

まず 2 つの述語概念が埋め込み構造にあるかどうかで 2 つにわけられ、[+埋め込み]であれば従属接合となる。[-埋め込み]のうち接続される両形式のあいだに操作子レベルの依存関係がない場合は等位接合、依存関係がある場合は連位接合となる<sup>67</sup>。すなわち、連位接合とは、複雑構造において非主要単位 (non-matrix unit) が接続のレベルで最低 1 つの操作子 (operator) の表示を主要単位 (matrix unit) に依存するタイプで、接続におけるユニット間の義務的な操作子の共有がある場合の接合といえる (Van Valin and LaPolla 1997 : 455)。

先に述べたそれぞれの接続のレベルでどのようなタイプの接合にあるかを見ることで、統語的な結合関係を分類することができる。RRG における接合関係を以下に図示する。なお、上記の説明と用語を一致させるために、引用にさいし Hasegawa (1996 : 46、原典 Fig.7) の図を筆者が日本語に改変した。

<sup>67</sup> RRG では、語彙項目の表示が 2 つにわけられ、述語や項、付加詞句などの句構造は「構成要素」として LSC に投射される。一方で、TAM などに関わるような文法範疇の形態素は「操作子 (operation)」として LSC に投射され、同一次元では扱われない（それぞれの LSC における投射位置は図 14 で示す）。

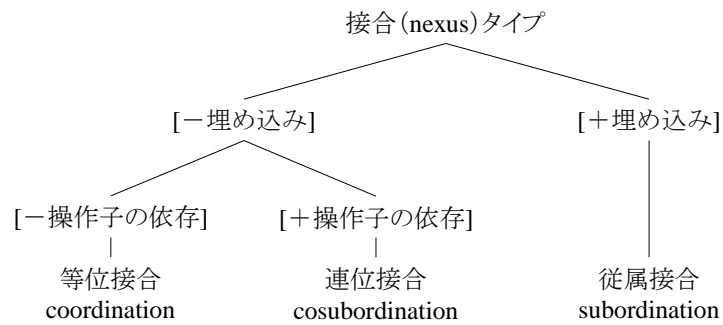


図 13 RRG の接合タイプ

Hasegawa (1996 : 46、原典 Fig.7 改変)

例として、中核連接 (core juncture) の場合の日本語の各接合タイプについて Hasegawa (1996 : 51-55) の分析を以下に要約して示す (日本語の LSC の樹形図は引用)。

a. [中核連接・従属接合] ([+埋め込み]、[+操作子の依存])

「あなたはもう帰っていい」

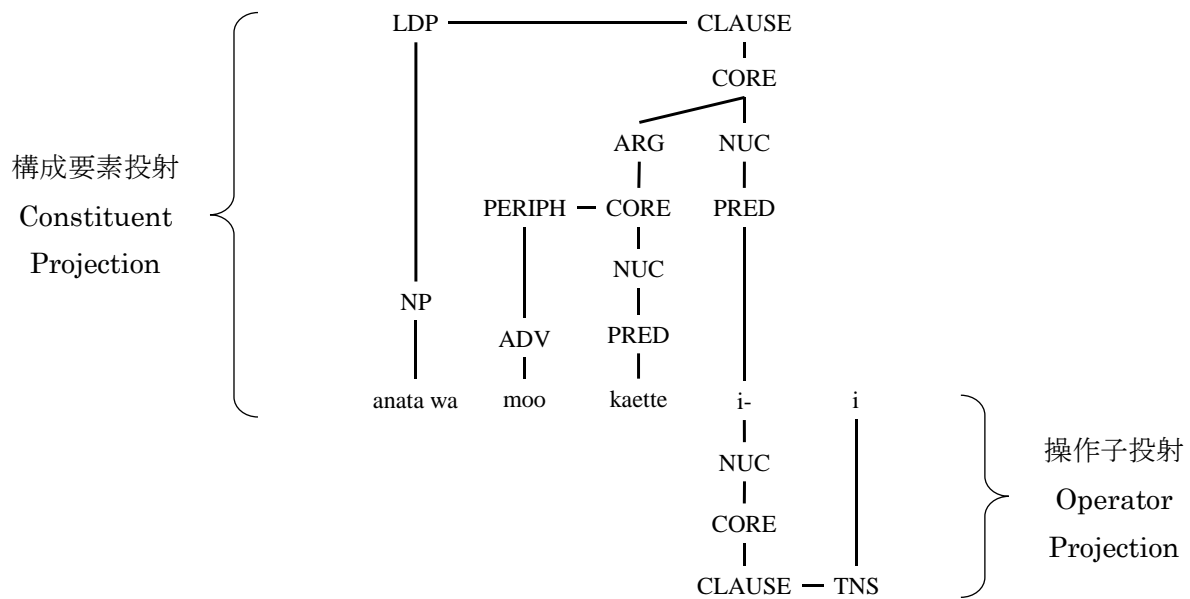


図 14 日本語の中核連接・従属接合

Hasegawa (1996 : 52、原典 Fig.17)

b. [中核接続・等位接合] ([-埋め込み]、[-操作子の依存])

「ジョンはレポートを読まずに会議に来た」

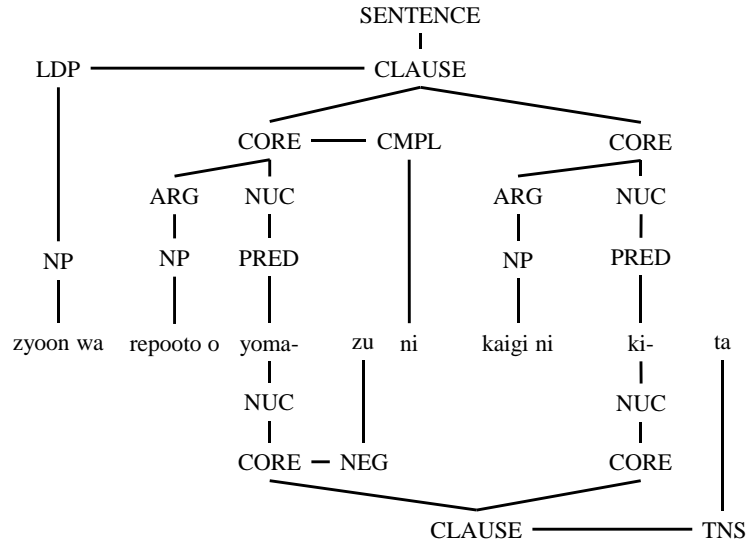


図 15 日本語の中核接続・等位接合

Hasegawa (1996 : 54、原典 Fig.19)

c. [中核接続・連位接合] ([-埋め込み]、[+操作子の依存])

「ジョンは本を借りに図書館に行かなかった」

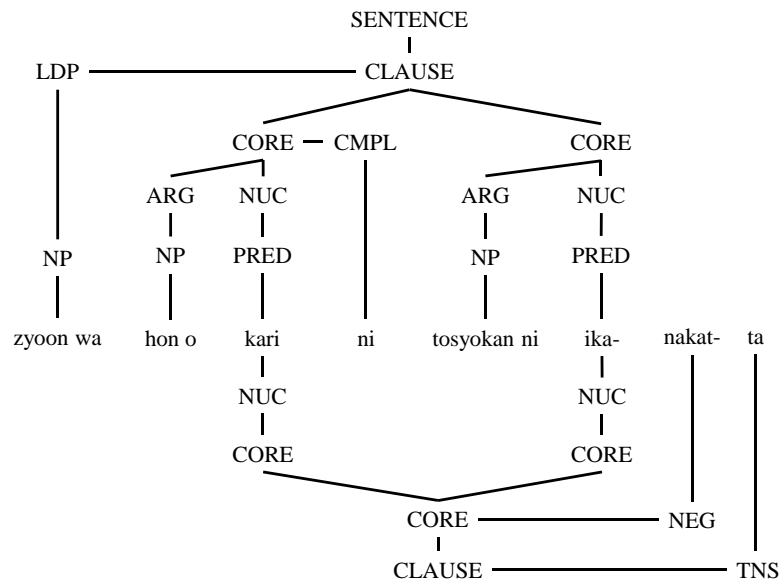


図 16 日本語の中核接続・連位接合

Hasegawa (1996 : 55、原典 Fig.21)



a は従属接合、b は等位接合、c は連位接合の例である。a は「もう帰る (て)」という節が「いい」の項と分析されることから従属接合である。b と c は中核 (CORE) レベルでの操作子の依存関係によって区別されている。すなわち、b の場合は中核レベルの否定のスコープが V1 のみであり V2 は依存していないのに対し、c の否定のスコープは V2 のイベントのみならず V1 と V2 全体をとっていることから依存関係が認められるといえる。時制は中核ではなく節レベルの依存であるため、中核接続の接合を考える上では除外される。以下、接続と接合の関係からアイヌ語の複雑述語構文を検討し、構文における V1 と V2 の複合制約について考察する。

#### 4.3.2. RRG による分析

RRG の枠組みにおける複雑述語のアイヌ語の LSC を検討する。アイヌ語の人称接辞の扱いは難しい問題であるが、人称接辞が義務的な要素であるのに対して実際の名詞句項は任意的な表示であることから、本稿では人称接辞 (personal affix : PAF) をひとまず中核項 (core argument) とし、名詞句項は節内の独立要素として表示する<sup>68</sup>。以下に、本稿で設定するアイヌ語の単節的な LSC モデルを示す。

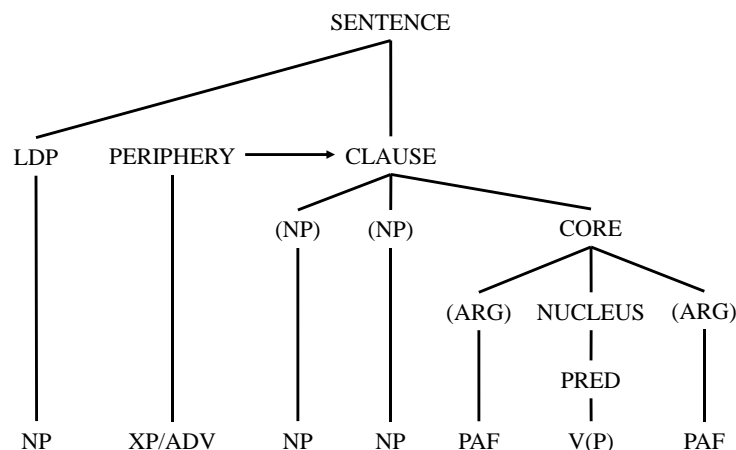


図 17 アイヌ語の LSC モデル

以上のとおり、本来は中核 (CORE) のなかで内核 (NUC) が取る名詞項 (ARG) を、本稿のアイヌ語の分析では人称接辞 (PAF) のスロットとしてもちいた。述語への人称標示は義務的であるが、実際の名詞項は文脈および人称 (1 人称・2 人称) から明らかな場合に表

<sup>68</sup> Van Valin and LaPoll (1997 : 34) において、アイヌ語と同じ主要部標示型の言語である北米のラコタ語の動詞に標示される pronominal affix (代名詞的接辞) を core argument として分析し、名詞句は節内で独立した要素として扱っている。これは、ラコタ語において節内の独立した名詞句の存在に関わらず動詞に標示される項が非常に重要であるためとしている。ラコタ語の代名詞的接辞とアイヌ語の人称接辞の形態・統語的なステータスは異なる可能性があるが、本稿ではラコタ語に倣い人称接辞を core argument として扱う。ただし 3 項動詞における直接目的語の無標示やかばん形態素による複合的な人称標示など、アイヌ語の LSC での表示については今後も引き続き検討を要する。

層で現れないことが多い。そこで、名詞項は中核 (CORE) 内の人称 (ARG=PAF) と一致するかたちで節内の独立要素として立てた。

この表示の妥当性については今後の分析の中で検討し、必要に応じて修正していきたい。

#### 4.3.3. 補助動詞構文の分析

補助動詞構文「V1+CONJ.wa+V2」について、前章 3.1.1.の (43) で示した制約の仮説を (53) として再掲する。

- (53) 「V1 wa V2」の V2 には基本的に自動詞が立ち (自他両形ある動詞は自動詞が選択される)、V2 が他動詞の場合は V1 とのあいだに形態・統語的な複合上の問題を有する。

(本稿 3.1.1. (43) 再掲)

補助動詞 V2 には自動詞のものも他動詞のものもある。また、V2 に比べてオープンである V1 には基本的に自動詞も他動詞も立つが、(53) の仮説のとおり、可能な組み合わせは「Vi+wa+Vi」「Vt+wa+Vi」「Vt+wa+Vt」の3つであり、「Vi+wa+Vt」の組み合わせは資料調査の限りでは用例が得られなかった<sup>69</sup>。

##### 4.3.3.1. 「V1 wa Vi」の LSC

以下ではまず、補助動詞 V2 が自動詞である「V1 wa an」(V1 ている)、「V1 wa isam」(V1 てしまう)、「V1 wa inkar」(V1 てみる)の3形式について、V1 の自他における可能な組み合わせすべての接続・接合関係を LSC で示していく。

###### 4.3.3.1.1. V1 wa an (V1 ている) の LSC

「V1 wa an」(V1 ている)は、V1 に自動詞も他動詞も立つ。V1 が自動詞の場合は、V1 の主体 (動作主・経験者) と an の項が共有され、主格人称が一致する。V1 が他動詞の場合も V1 の主体 (動作主・経験者) と an の項が共有され主格人称が一致するが、動詞によっては V1 の目的語の項と an の項が共有され、an の人称が V1 の目的格人称と一致することもある。

まず、V1 に他動詞が立った場合の一致のゆれも含めた LSC を検討するため、当該例である既出の (8) (9) を (54) (55) として再掲し、その LSC を示す。

<sup>69</sup> 本稿では、3項動詞の kore (くれる) が V2 に立って日本語の「V1 テ形+クレル」(V1 てくれ) に類似した機能を表わす「V1 wa kore」を分析対象から外しているが、kore は V1 に自動詞が立つ (e.g. 「*nenō iki wa en-kore* (そうしてくれ)」(*nenō* そう、*ø-iki* 2.SBJ.IMP-する、*wa* て、*ø-en-kore* 2.SBJ.IMP-1.OBJ-くれ)。V2 が3項動詞の場合の補助動詞構文については、今後の課題として検討していく。

- (54) toan kur eun ku- $\emptyset$ -ye wa  $\emptyset$ -an kusu  
 あの 人 に 1SG.SBJ-3.OBJ-言う CONJ 3.SBJ-ある から  
 $\emptyset$ -pirka na  
 3.SBJ-良くなる ぞ

あの人に頼んであるから大丈夫だよ (lit. 言っている)

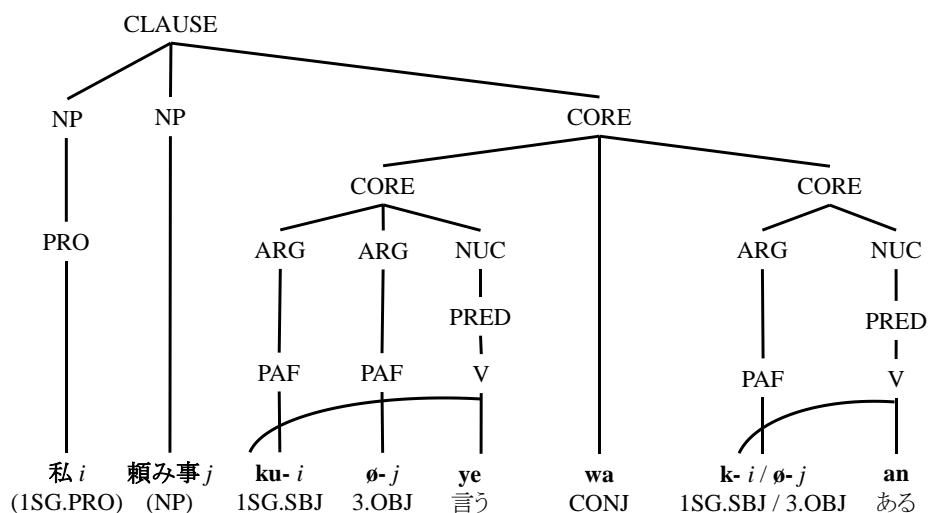
中川 (1981 : 134、原典 (8) 改変、本稿 (8) 再掲)

ただし、このタイプの他動詞は「主体の変化」の結果状態として、V1 と an の人称が主格で一致することも可能である。

- (55) toni un kur eun ku- $\emptyset$ -ye wa k-an kusu  
 あそこ の 人 に 1SG.SBJ-3.OBJ-言う CONJ 1SG.SBJ-いる から  
 $\emptyset$ -pirka wa  
 3.SBJ-良くなる よ

あの人に頼んであるから大丈夫だよ (lit. 言っている)

中川 (1981 : 134、原典 (7) 改変、本稿 (9) 再掲)



ku- $\emptyset$ -ye wa  $\emptyset$ -an / ku- $\emptyset$ -ye wa k-an

私が (頼み事を) 言っている (= 54、55)

図 18 「Vt wa an」の LSC

(54) (55) は、V1 が他動詞であり、V2 の an が V1 の主格もしくは目的格と一致するゆれをみせるタイプの例である。本来は文脈の明らかな資料から用例をあげるべきであるが、このようなミニマルペアを得るのは難しいため、二次資料引用となるが中川 (1981 : 134) があげる上記のミニマルペアを示した。そのため、V1 の目的語にあたる名詞項は明らかではないが、少なくとも中川によって「頼んである」という意識が付されていることから V1

の目的語にはなんらかの「頼み事」にあたる内容が入ると想定される。ここではひとまず NP「頼み事」として V1 の目的語の項を埋める。

さて、補助動詞構文は V1、V2 それぞれが人称変化をして項を取る。そのため、「述語+項」の単位である中核 (CORE) を V1、V2 それぞれに認めるのが妥当である。そのため、図 18 では中核接続 (core juncture) として示した。

接合タイプは先に示したとおり従属接合、等位接合、連位接合の 3 つがある。以下、それぞれの形式においても判断基準となるため、各接合タイプについての記述を引用して示す。まず、埋め込みがある場合は従属接合となるが、中核接続・従属接合の特徴について Hasegawa (1996 : 51) は次のように述べている (日本語訳は筆者による)。

In core juncture, two or more cores, each with its own nucleus and arguments, are linked. In core subordination, the embedded core as a whole is an argument of the matrix core, and thus there is no shared argument.

中核接続においては、それぞれが内核と名詞項をもつ 2 つ以上の中核 (core) が結ばれる。中核接続・従属接合において、全体がメインの中核 (matrix core) の項として埋め込まれる中核 (embedded core) は、従って項を共有しない。

Hasegawa (1996 : 51)

(54) (55) は、V1 と V2 のあいだで項の共有がある。この点で統語的に従属接合ではない。中核接続・等位接合の特徴について Hasegawa (1996 : 52) は次のように述べている (日本語訳は筆者による)。

In a non-embedded nexus at the core level, one argument must be shared between the linked cores.

中核レベルでの非埋め込み接合 (非従属接合) では、結ばれた中核のあいだでひとつの項が必ず共有される。

Hasegawa (1996 : 52)

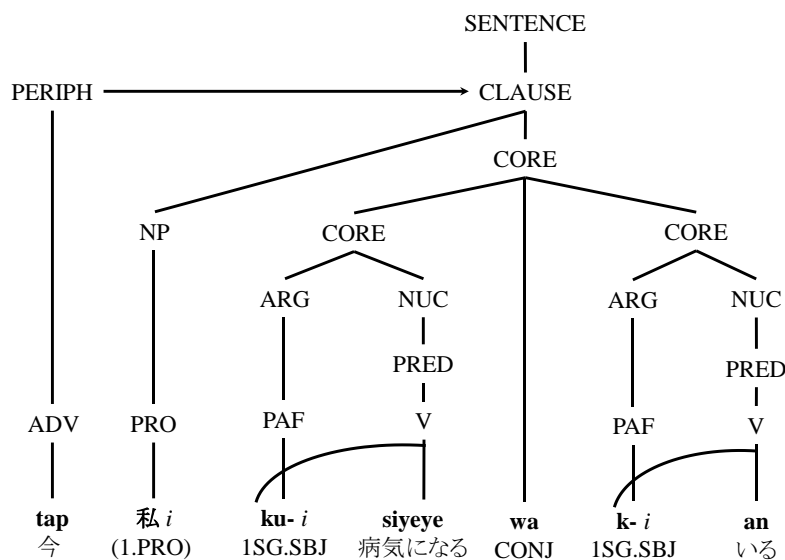
(54) (55) について図 18 の LSC をみると、V1 と V2 の中核内の人称接辞は、節内の名詞句を取っており、V1 と V2 のあいだでも主語・目的語のどちらかが共有される (図中の同一指示  $i$ 、 $j$  のどちらかで V1 と V2 のあいだの項の共有が果たされる)。以上のことから、(54) (55) で示した「Vt wa an」の LSC (図 18) は、中核接続・非従属接合とみることができる。

なお、これは V1 が自動詞の「Vi wa an」においても同じであるといえる。「Vi wa an」の

用例として中川（1981）から引用して示した（5）を以下で（56）として再掲し、そのLSCを示す。二次資料からの引用という問題はあるが、LSCの構造は確認できる。

(56) tap ku-siyeye wa k-an.  
 今 1SG.SBJ-病気になる CONJ 3SG.SBJ-いる

今、私は身体の具合が悪い (lit. 病気になっている)  
 中川（1981：132、原典（2）改変、本稿（5）再掲）



tap ku-siyeye wa k-an

今、私は具合を悪くしている (= 5, 56)

図 19 「Vi wa an」のLSC

「V1 wa an」は V1 が自動詞であっても他動詞であっても中核接続ととらえることができ、項の共有が LSC においても表示できる。また、非従属接合であるといえる。

非従属接合には等位接合と連位接合がある。中核接続における等位接合、連位接合の区別は、Hasegawa（1996：54）が次のように述べている（日本語訳は筆者による）。

The scope of the core operators in core cosubordination covers all linked cores, which is not the case in core coordination.

中核接続・連位接合においては、中核レベルの操作子のスコープが、結ばれているすべての中核をカバーする。これは中核接続・等位接合にはあてはまらない。

等位接続であるのか連位接続であるかを確認するため、操作子要素を含む用例を以下でみていく。

Van Valin and LaPolla (1997 : 47) は、文法的要素の表示である操作子について、操作子を支配するスコープの割り当てとして節 (CLAUSE) > 中核 (CORE) > 内核 (NUCLEUS) のレベルを設け、操作子ごとに LSC で投射されるレベルを次のように規定している。

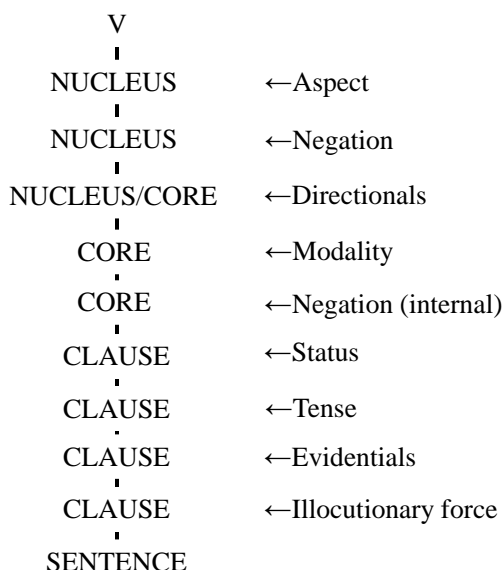


図 20 LSC の操作子投射

Van Valin and LaPolla (1997 : 47、原典 Fig. 2.15)

(54) (55) (56) の LSC から、「V1 wa an」が中核接続であることがわかったため、以下では中核レベルでの操作子のスコープに着目し、そのスコープの範囲から接合関係を検討する。図 20 で示したとおり中核レベルで投射される操作子には主にモダリティと否定がある。以下では、否定を含む「V1 wa an」の LSC から否定のスコープを確認し、接合タイプを検討する。

(57) somo    ikesuy-an                    no                    an-an                    a                    yakne  
 NEG    家出する-1SG.SBJ    CONJ. NEG    いる-1SG.SBJ    PRF    ならば

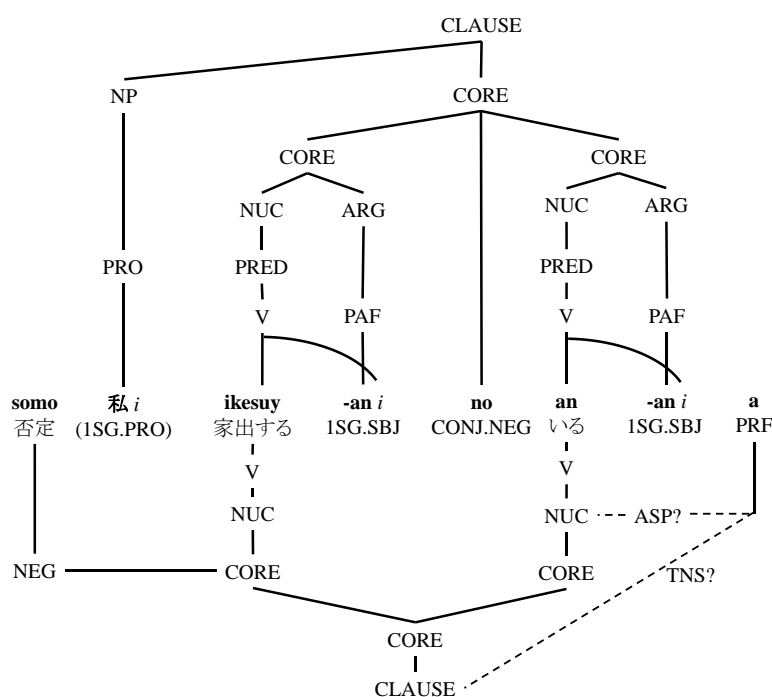
私が出していなかったならば (lit. 私が家出しないでしたらば)

田村 (1984 : 32)

アイヌ語では基本的に動詞の前に否定副詞の *somo* が立つことで否定文を形成する。「V1 wa an」は、他の補助動詞構文と異なり、否定を伴う場合に接続助詞 *wa* が *no* という形式

に規則的に置き換わり「somo V1 no an」になるという特徴を持っている<sup>70</sup>。この接続助詞 no はもっぱら否定文でしか現れない。接続助詞 wa が比較的無標な等位接続のマーカ―として機能するのに対し（田村 1972 : 152）、no は否定文とともに現れて付帯状況をあらわす従属的な接続のマーカ―として機能する（Refsing 1986 : 241、佐藤 2008 : 45、Bugueva 2018 : 255）。

「somo V1 no an」（V1 していない）は、意味的に「V1 wa an」の構造全体にかかるともとれるが、V2 の an「いる/ある」は統語的に否定副詞 somo を取ることができない（\*somo an）。アイヌ語では「ない、なくなる」を表わすさいに否定動詞 isam を用い、日本語のように動詞「ある」を否定する構造を取らない<sup>71</sup>。よって、「somo V1 no an」（V1 しないている/ある）は、統語的に否定が V1 のみをスコープとする構造ととらえることができる。



somo ikesuy-an no an-an a

私が家出していないかった（なら）(lit. 私が家出しないていた（なら）) (= 57)

図 21 「V1 wa an」の否定のスコープ

<sup>70</sup> 「somo V1 no an」のほかに「V1 somo ki no an」という助動詞を差し挟む形式もある。アイヌ語にこの2つの否定形式が存在する点、それによる構造的な制約など非常に重要な問題が多いが、本稿では構文の複雑化を避けるために前者の構造のみを分析する。今後の課題として取り組みたい。

<sup>71</sup> 佐藤（2007 : 11）は、日本語の否定形が「テイナイ」という「イル」を否定する形式をとるのに対し、アイヌ語では「ナイデイル」のように否定が「イル」の前に出る構造を示す点について、アイヌ語におけるブロッキング現象の可能性を指摘している。すなわち、「V1 wa an」の an「いる」を否定するにあたり、単純に否定動詞 isam へ置き換えてしまうと「V1 wa isam (V1 てしまう)」という「対象の損壊・消滅」を意味する既存の補助動詞構文と形式が重複することになり、同時に完了の否定を表わす形式として用いることができないため、アイヌ語では「テイナイ」型の否定にならないと分析している。

アイヌ語の否定の構造上の特徴から、図 21 のとおり V1 のみをスコープとした。また、図 21 では完了を表わすアスペクト形式である助動詞 a のスコープも同時に検討した。助動詞 a のスコープについては、その機能の議論も含めて今後も検討が必要であるが、図 20 の操作子の投射レベルに従えばアスペクトは内核 (NUC) のレベルで投射されることになる。補助動詞構文としてアスペクトは意味的に V1、V2 の全体にかかっているとみることもできるそうであるが<sup>72</sup>、(57) が中核接続である点、否定の条件節である点（家出しないでいたならば）および接続助詞 no が等位ではなく従属的な付帯状況を表わす助詞に置き換わっている点を考えると、V1 と V2 の内核それぞれが完了のアスペクトを受ける（家出しなかった、そうしていた）というよりも、V2 の内核だけをスコープとして「家出しないで（付帯状況）いた」ととったほうが意味的にも自然である。また、そもそも「V1 wa an」自体が完了の機能をもつ補助動詞構文であることを考えると、助動詞 a の「完了」はなにを表わすのかも含め、アイヌ語の時間概念の表示を考える必要がある。図 21 ではテンス相当の時間概念として節レベルで V1、V2 ともにスコープとしてとる可能性も視野に入れた表示も試みた。ただし、アイヌ語には形態論的なテンスはないため、アスペクトと時間概念に関しては今後の課題である。

暫定的な表示など課題は残るものの、「V1 wa an」の構造をめぐる以上の LSC から、統語的な特徴を次のようにまとめる。

(58) 「V1 wa an」は中核接続・等位接合 (core coordination)

これは、Bugueva (2018) が統語テストによって示した「V1 wa an」の強い複節的な特徴と、この構造が歴史的に等位構造から文法化してきた構文であるという分析に矛盾しない<sup>73</sup>。

<sup>72</sup> Bugueva (2018 : 253) は、「V1 wa an」構文における TAM の表示とそのスコープについて用例をもとに「Ainu has no pure tense markers, but it has post-verbal aspectual, modal, and evidential markers. In V1 wa V2, all such markers can occur after V2 (11), and scope over both V1 and V2, which, in fact, describe a single event」(Bugueva 2018 : 253) と分析し、V1 と V2 の事象の単節性を示している。ただし、否定形との組み合わせにおいては、アスペクトのスコープについて言及していない。

<sup>73</sup> Hasegawa (1996 : 86-88) は、日本語の「V1 テ形+アル」(V1 である) の LSC を分析している。まず、「ジョーンが外に車を止めてある」を例に、V2 「ある」が V1 のテ形動詞に対して項を追加せず、全体の結合価に影響を与えないことを示すことから、V2 「ある」は項を取る語彙的な動詞形式ではなく、V1 に対してアスペクトとしての機能を添える助動詞として位置づけ、内核接続・従属接合 (nuclear subordination) を成すと示している。一方で、「手紙が出さないである」は、V1 の「出す」も V2 の「ある」も同じ「手紙」という項を共有する一方で、否定の「ないで」が V1 テ形動詞のみをスコープとしていることから、内核接続・等位接合 (nuclear coordination) と分析している。「V1 テイル」との対照も必要であるが、日本語の「V1 テアル」構文が内核接続である一方、V2 の形態・統語的な独立性が高いアイヌ語の「V1 wa an」(V1 ている、である) は中核接続であるという差異が示された。この点も、Bugueva (2018) が指摘する文法化の程度 (日本語よりアイヌ語の構文のほうが文法化が弱い) の分析とも矛盾しない。



#### 4.3.3.1.2. V1 wa isam (V1 てしまう) の LSC

「V1 wa isam」(V1 てしまう) は、V1 に自動詞も他動詞も立つ。意味的に「損壊・消滅の対象」となる項が isam と共有される。V1 が自動詞の場合は、V1 の主語が isam の項となって「損壊・消滅の対象」となり、ともに主格人称が一致する。V1 が他動詞の場合は V1 の目的語の項と isam の項が共有され、isam の人称が V1 の目的格人称と一致する。

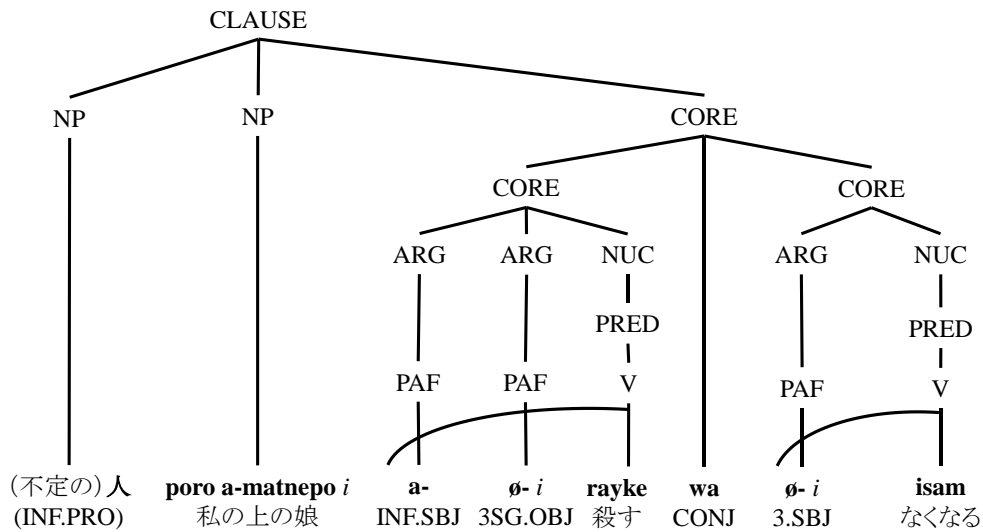
まず、V1 に他動詞が立った場合の LSC (Vt wa isam) を検討するため、当該の用例である既出の (13) を (59) として再掲し、その LSC を示す。

- (59)  $\emptyset$ -poro                      a-matnepo                      a- $\emptyset$ -rayke                      wa                       $\emptyset$ -isam  
 3SG.SBJ-大きくなる 1SG-の娘                      INDF.SBJ-3SG.OBJ-殺す CONJ 3.SBJ-なくなる  
 hawe                      ne  
 話                      だ

私の上の娘は殺されてしまったんだね

(lit. 誰かが私の上の娘を殺して私の上の娘がいなくなったのだ)

千葉大学 (2015c\_18-2 : 1724、本稿 (13) 再掲)



$\emptyset$ -poro a-matnepo a- $\emptyset$ -rayke wa  $\emptyset$ -isam  
 人に私の娘が殺されてしまった (= 59)  
 (lit. 誰か人が私の娘を殺してしまった)

図 22 「Vt wa isam」タイプの LSC

(59) は、V1 が他動詞であり、V2 の isam が V1 の目的格の項を共有する例である。このとき、V2 の isam 「なくなる」が指す消失対象は、他動詞 V1 の目的語である poro a-matnepo 「私の上の娘」であり、V1 と V2 のあいだで共有される。V1、V2 のそれぞれが人称変化を

して項を取っており、特に V1 の主語の項は V2 と共有されず独自に節内の NP をとっている。このことから「V1 wa isam」も「述語+項」の単位である中核 (CORE) を V1、V2 それぞれに認めるのが妥当である。図 22 では中核接続 (core juncture) として示した。

なお、これは V1 が自動詞の「Vi wa isam」においても同じであるといえる。「Vi wa isam」の用例として既出の (14) を (60) として再掲し、その LSC を示す。

- (60) nerok kamuy rametok utar anak ∅-paye wa ∅-isam  
 その 神 勇者 たちは 3PL.SBJ-行く CONJ 3PL.SBJ-なくなる

その神なる勇者たちは行ってしまった

(lit. その神なる勇者たちが行って勇者たちがいなくなった)

千葉大学 (2005b\_16-8 : 1538、本稿 (14) 再掲)

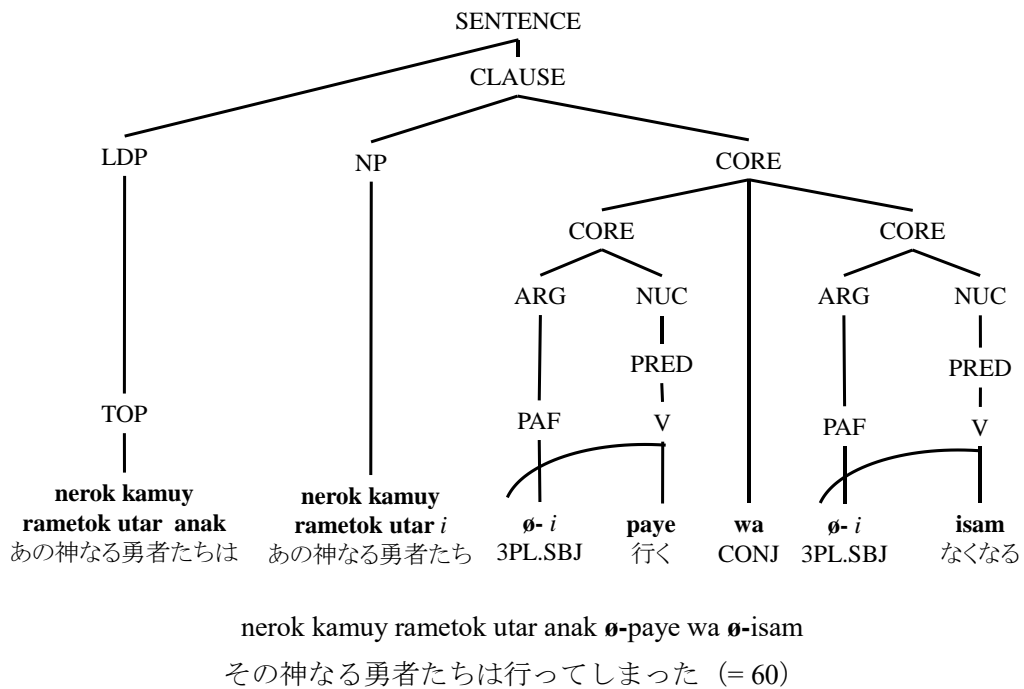


図 23 「Vi wa isam」タイプの LSC

図 23 は V1 が自動詞の場合の LSC である。このとき、V2 の isam 「なくなる」がさす消失対象は、自動詞 V1 の動作主である nerok kamuy rametok utar 「あの神なる勇者たち」である。3 人称の移動主体は、話者の視点で場面からの消失としてとらえることができる。

以上、「V1 wa isam」の LSC を、V1 が他動詞の用例 (59)、V1 が自動詞の用例 (60) に基づいて図 22、図 23 で示した。以上より、「V1 wa isam」は V1 が自動詞であっても他動詞であっても中核接続ととらえることができ、項の共有が LSC においても表示できる。操作子レベルでのスコープの表示は、用例の追加をもって今後も検討していくが、現時点では

分析する適例が得られていない。少なくとも非従属接合である。

(61) 「V1 wa isam」は中核連接・非従属接合 (core non-subordination)

#### 4.3.3.1.3. V1 wa inkar (V1 試みる) のLSC

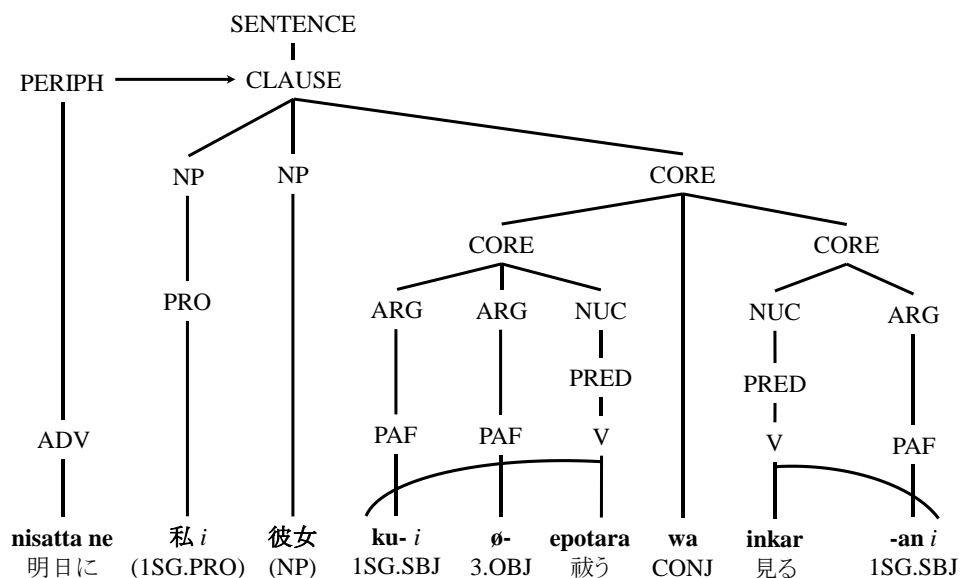
「V1 wa inkar」および「V1 wa inu」はともに「V1 試みる」を表わし、V1に自動詞も他動詞も立つ。日本語の「V1 テ形+ミル」(V1 試みる)と分析的にも機能的にも類似性が見られ、およそ「決着留保」の意味を表わす。V1が他動詞であれ自動詞であれ、V2とは主語が共有され、主格人称が一致する。これは、V1における決着留保する行為の動作主と、その留保した結果を視覚的ないしは非視覚的感覚で判断する主体とが共有されるためである。

以下では「V1 wa inkar」の形式に限ってLSCを示す。まず、V1に他動詞が立った場合のLSC (Vt wa inkar)を検討するため、当該の用例である既出の(15)を(62)として再掲し、そのLSCを示す。

(62) nisatta ne a- $\emptyset$ -epotara wa inkar-an kusu ne  
 明日 に 1SG.SBJ-3.OBJ-祓う CONJ 見る-1SG.SBJ 意志

明日、私が(彼女を)お祓いしてみましよう

田村(1989:40、本稿(15)再掲)



nisatta ne a- $\emptyset$ -epotara wa inkar-an  
 私が彼女をお祓いする (= 62)

図 24 「Vt wa inkar」タイプのLSC

(62) は、V1 が他動詞であり、V2 の *inkar* が V1 の主格の項を共有している。このとき、V2 の *inkar* 「見る」の主語は V1 における動作主の名詞項と共有される。この構文形式も、V1、V2 のそれぞれが人称変化をして項を取っており、特に V1 の目的語の項は V2 と共有されず独自に節内の NP をとっている。このことから「V1 wa inkar」も「述語+項」の単位である中核 (CORE) を V1、V2 それぞれに認めるのが妥当である。図 24 では中核接続 (core juncture) として示した。

なお、これは V1 が自動詞の「Vi wa isam」においても同じであるといえる。「Vi wa inkar」の用例として既出の (16) を (63) として再掲し、その LSC を示す。

- (63)    *ney ta ka arpa-an wa inkar-an rusuy patek*  
           いつ    にか    行く-1SG.SBJ    CONJ    見る-1SG.SBJ    たい            ばかり  
          *ki p ne a korka*  
           する    もの    だ    PRF            が

(父から絶対に行くなと言われてるが)  いつか私は行ってみたいとばかり思っていたものだったけれど

萱野 (1998d : 12、本稿 (16) 再掲)

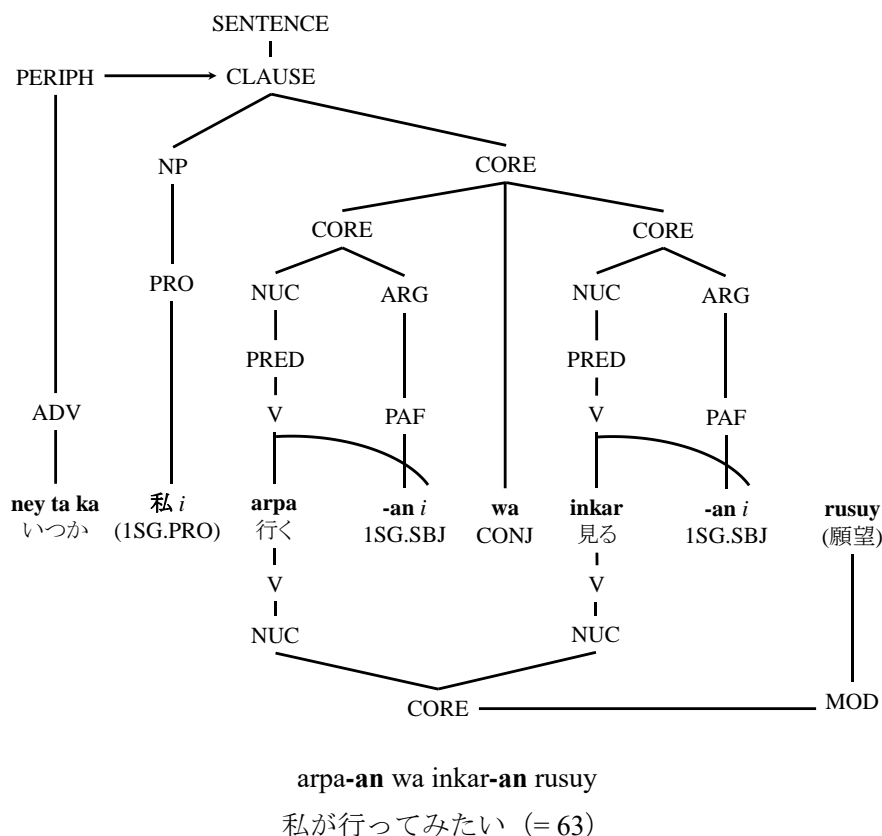
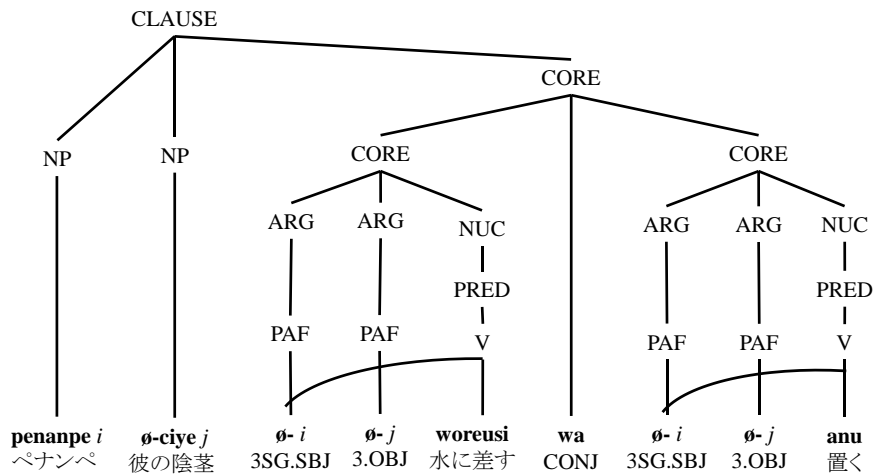


図 25 「Vi wa inkar」タイプの LSC







ø-ciye ø-ø-woreusi wa ø-ø-anu  
 ペナンペが陰茎を水に刺しておいた (= 65)

図 26 「Vt wa anu」タイプの LSC

図 26 は (65) の LSC であり、V1 が他動詞の例である。V1 では行為の動作主と行為の対象が主語と直接目的語の名詞句を埋める。また、V2 は V1 の行為による結果状態の保持にかかわる動作主とその対象が同じく名詞句を埋めることで V1 と V2 のあいだで項が共有される。(65) の項の共有は「ペナンペがその陰茎を水に差し、ペナンペがその陰茎を(そのような状態に)おいた」という関係としてとらえられる。また、これは次の (66) にも当てはまる。

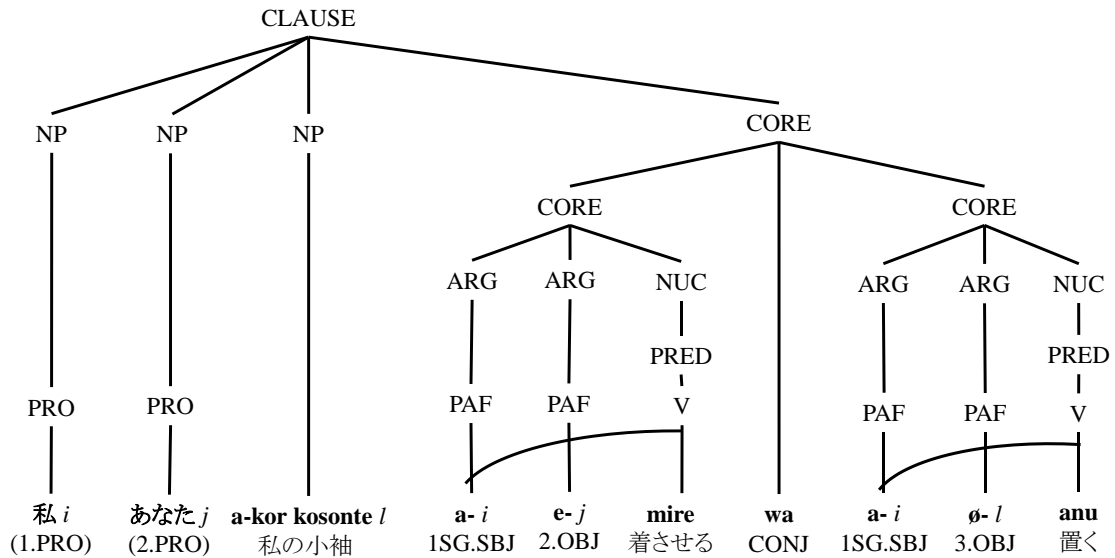
- (66) e-amih *i*    ø-tanne    na  
 2SG-の爪    3.SBJ-伸びる    から  
ø-ø-tuye                      wa    ø-ø-anu  
 2SG.SBJ.IMP-3.OBJ-切る    CONJ    2SG.SBJ.IMP-3.OBJ-置く

お前の爪が伸びているから、切っておけ

萱野 (1996 : 26、本稿 (21) 再掲)







**a-kor kosonte a-e-mi-re wa a-ø-anu**

私があなたに（私の小袖を）着せておいた（= 67）

図 28 「Vt wa anu」タイプの LSC (Vt = 3 項動詞)

図 28 で示した (67) の V1 は 3 項動詞である。アイヌ語の 3 項動詞は、主語、直接目的語、間接目的語の 3 つの項を要求するが、人称標示のスロットは 2 つであるため、主語と間接目的語のみが標示される。(67) は一見して V1 と V2 の人称が一致していないようにみえるが、V2 は V1 で標示されていない直接目的語の項を共有しているとみられる。(67) の項の共有は「私があなたに私の小袖を着せて、私が私の小袖を（そのような状態に）おく」という点で、(65) (66) と同様の項の共有ととらえられる。

V1、V2 とともにそれぞれの結合価を満たすため、それぞれの図のとおり中核接続とみられるが、資料調査の限りでは操作子を標示するような適当な例がなかった。埋め込み文ではないため非従属接合である点は確認できるが、操作子レベルでの依存がある連位接合であるか、依存のない等位接合であるかははっきりとしない。接合関係については今後の用例追加も含め検討を続けるが、現時点では非従属接合として据え置く。

さいごに、補助動詞構文「V1 wa anu」の V1 に自動詞が立つ例がない点について、その制約の可能性を考える。本稿の資料調査の限りでは、「V1 wa anu」の V1 に自動詞が立つ例は見られなかった。自動詞と他動詞 anu の節が接続助詞 wa で接続されている以下の例を検討する。

(68) toan sintoko e-ø-kor wa e-soyne wa  
 あの 行器 2SG.SBJ-3.OBJ-持つ CONJ 2SG.SBJ-外に出る CONJ  
tuymano e-ø-kor wa  
 遠く 2SG.SBJ-3.OBJ-持つ CONJ  
e-arpa wa e-ø-anu  
 2SG.SBJ-行く CONJ 2SG.SBJ.-3.OBJ-置く CONJ それから

あの行器はあなたが持って外に出て遠くに持って行って置いてそれから  
 アイヌ民族博物館 (C0170L01005)

(68) は、接続助詞 wa で動詞が接続されているが、「V1 wa anu」をなしていない。大切な行器（ほかい）を遠くへ持って行って置いて、それから（供養のために）家を焼いてくれと依頼する場面である。この LSC は以下のように示すことができる。

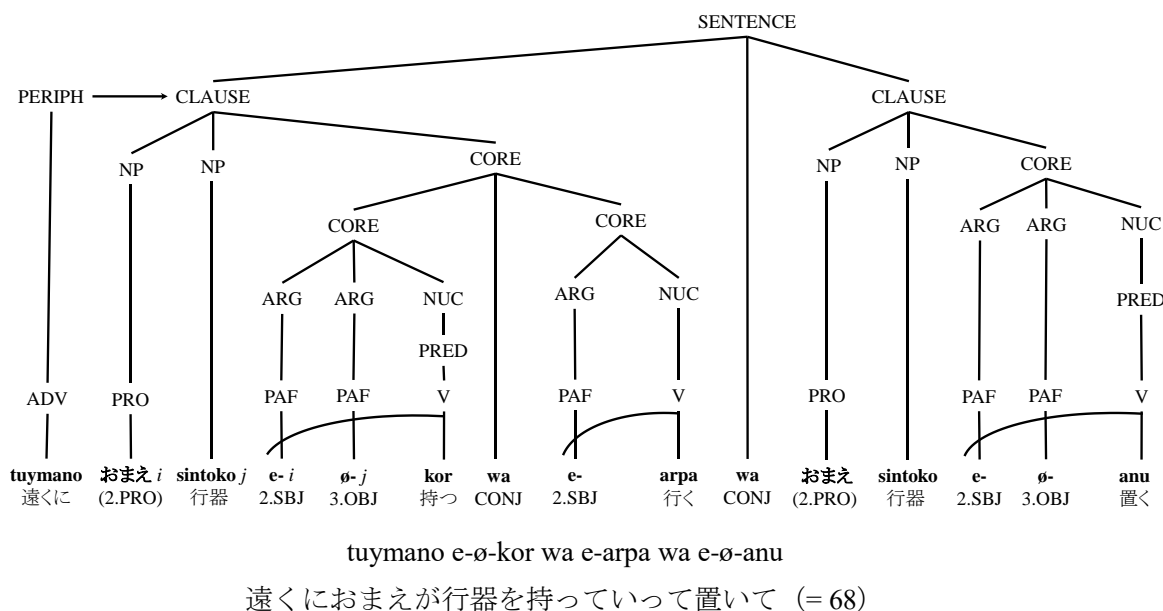


図 29 等位接続の LSC

本稿では分析対象から外したが (68) では「V1 wa arpa」(V1 ていく) が補助動詞構文として中核接続を成している可能性がある。最初の副詞 tuymano「遠くに」がとるスコープが、直後の kor「持つ」ではなく「持って行く」までとると考えられるためである。続く anu「置く」は独立した節をなしており、「kor wa arpa」(持って行く) と接続助詞 wa でつながれて等位接続の関係にある。このときの接続助詞 wa は 2 つの節のイベントの継起関係を表わしている。ただし、主語と目的語の項は意味上で共有されていることから、節接続 (clausal juncture) の関係にはあると考えられる。このときの接合関係は、埋め込み関係ではないのでやはり非従属接合であるといえるが、等位接合か連位接合かは操作子レベルでの依存に依るため判然としない。図 29 ではこれらを反映した LSC を示した。

一方で、仮にこれを「arpa wa anu」(行っておく)でまとめて「V1 wa anu」の補助動詞構文と見た場合は、補助動詞構文「V1 wa anu」で(60)(61)(62)で確認したような目的格の項の共有がなされない。また他動詞 anu「置く」は自動詞 arpa「行く」に存在しない目的格の項を独自に取ることから、アイヌ語の補助動詞構文「V1 wa anu」としては成立せず、図 29 で示したように、単純に接続助詞 wa で節と節が継起的につながった等位接続の文であると捉えられる。

このことから、アイヌ語の補助動詞構文の成立には V2 が取る項がすべて V1 と共有されなくてはならないという制約が存在すると考えられる。

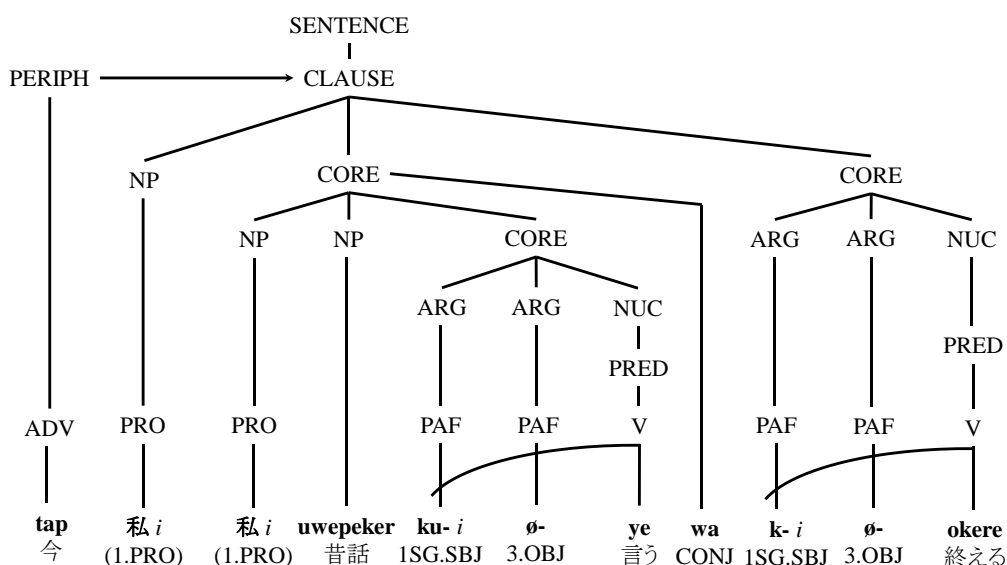
(69) 「V1 wa anu」は中核接続・非従属接合 (V1 と V2 は主語と直接目的語を共有)

#### 4.3.3.2.2. V1 wa okere (V1 てしまう) の LSC

「V1 wa okere」は、文法化が進んでいるために okere 自体がすでに人称変化をしないことが多い。一方で、人称変化がみられる用例のなかで「V1 てしまう」という完了の aspekto の意味をもつ場合は V1 に他動詞が立ち、V1 と okere の主格人称の一致がみられる。以下では(20)(21)をそれぞれ(70)(71)として再掲して、LSCを示す。

(70) uwokpare p uwepeker tap  
 親不孝 もの 昔話 今  
ku-ø-ye wa k-ø-okere hawe tapan na.  
 1SG.SBJ-3.OBJ-言う CONJ 1SG.SBJ-3.OBJ-終える こと だ よ

親不孝者の昔話を今、私が語ってしまったんだよ (lit. 語りおえたんだよ)  
 田村 (1985 : 12、本稿 (20) 再掲)



uwepeker tap ku-ø-ye wa k-ø-okere  
昔話を今、私が語りおえた (= 70)

図 30 「Vt wa okere」の LSC

(70) は V1 に他動詞が立った形式で「V1 wa okere」(V1 てしまう)の構文を成している。okere は語彙的に「終わる」という他動詞であるため、分析的には日本語の「V1 テ形+V2」構文に相当する形式はない(\*V1 ておえる)。(70) は V1 も V2 もともに人称変化しており、それぞれが項を取っているため中核接続とみられる。

Dixon (2010 : 401) は、動詞のなかでも Primary verb と従属的に結びついてその項の 1 つに補文を取るもので、かつ Primary verb に項を追加することなく (Primary verb に主題役割を追加することなく) 文法的な意味合いの修飾をする要素を Secondary-A とよんで分類している。「終わる (finish)」は「始める (start)」「続ける (continue)」「やめる (stop)」などとともに BEGINNING TYPE とされ、深層で項のひとつに必ず補文をとる Secondary verb のひとつとして扱われる (Dixon 2010 : 402)。このことから、V1、V2 とともに人称変化をする「V1 wa okere」の LSC において、V1 の中核 (CORE) を okere がとる項の位置 (アイヌ語の LSC モデルでは節内の独立した NP 位置であるが、V1 は統語的には名詞化はしていないので暫時的に CORE とだけ表示した) に埋め込んだ (図 30)。

(70) において、V2 の他動詞 okere 「終わる」は主格が 1 人称、目的格が 3 人称である。この 3 人称は、目的語の項を補文的に埋める V1 の事象全体をイベント項として受けての標示とみることができる。また、V2 の主語の名詞項と、V1 の主語が一致する。これにより、複雑述語としての項の共有は果たされる。また、この構造と一致の関係を設定することで V1 には自動詞も立つことができる。実際に (24) の pirka wa okere 「とても良い」のように自動詞がたって構文が成立する。ただし、その構文としての意味は V1 が他動詞の場合と異なる。

これまで示してきた他の「V1 wa V2」はいずれも中核接続の等位ないし連位の接合であったが、以上の統語的な特徴から「Vt wa okere」は中核接続・従属接合 (core subordination) と分析できる。

また、Bugaeva and Nakagawa (2013 : 22) が補助動詞構文のなかで最も文法化が進んだ形式と分析する理由として、以下の (71) のような不変化の okere をともなうも用例が多くみられる点があげられる。これは V1、V2 とともに人称変化する「V1 wa okere」と助動詞構文「V1 okere」のちょうど中間的な形式の印象を受ける。以下に、この過渡的と思われる形式の LSC を示す。

- (71) k- $\emptyset$ -oyra                      wa    okere    wa  
 1SG.SBJ-3.OBJ-忘れる    CONJ   終える    CONJ  
 mak      ku- $\emptyset$ -ye                      p  
 どう      1SG.SBJ-3.OBJ-言う              もの

忘れてしまって、何ていうんだ

田村 (1984 : 56、本稿 (21) 再掲)

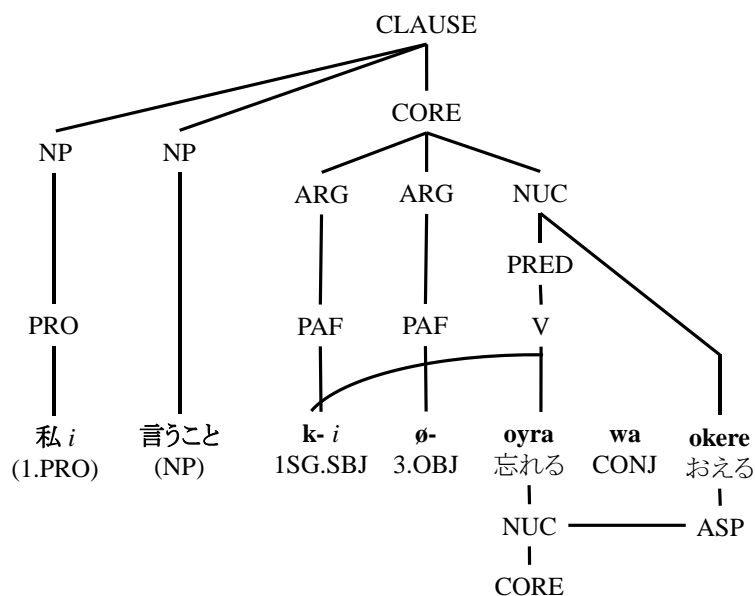


図 31 「Vt wa okere」 (okere 不変化) の LSC  
 私が (話すこと) を忘れてしまった (= 71)

図 31 「Vt wa okere」 (okere 不変化) の LSC

(71) は、V2 が人称変化しない。これは 2 つの内核 (NUC) が同じひとつの中核項をなす複合形式という内核接続 (nuclear juncture) の特徴に一致する。このとき V2 の okere 「終える」は V1 に対して項を追加するなどの中核としての独立性を有さず、もっぱらアスペクト的な意味を添えるにとどまる。このような okere の持つ Secondary verb (Secondary-A) としての特徴から、図 31 のように内核接続・従属接合 (nuclear subordination) として分析できる。また、本来、他動詞としての okere が取る主語と目的語の項を想定すると、主格は内核接続によって V1 の主語と同一であり、目的格は V1 全体をイベント項としてとることによって、V1 とすべての項のスロットが埋まることになる。

述語の内核レベルでの接続は、他の補助動詞構文のように中核レベルでの共有はない。この点で、okere は不変化とみなせ、次の助動詞構文の分析にも大いに応用できる。

- (72) 「V1 wa okere」は内核接続・従属接合 (ただし、V2 は人称変化する)  
 「V1 wa okere」は内核接続・従属接合 (ただし、V2 は不変化)

#### 4.3.3.2.3. 「V1 wa Vt」のLSC まとめ

V2が他動詞の「V1 wa Vt」それぞれの接続と接合の構造をRRGのLSCで示した。(53)の制約に関する仮説からすると、補助動詞構文においてこの「V1 wa Vt」はV1とV2のあいだの複合が制約的なグループと考えられる。それぞれの接続・接合パターンは次のとおり。

- ・ V1 ておく  
「V1 wa anu」(V1 他動詞のみ)                      中核接続・非従属接合 (core non-subordination)
- ・ V1 てしまう  
「V1 wa okere」(V2 が人称変化)                      中核接続・従属接合 (core subordination)  
「V1 wa okere」(V2 が不変化)                      内核接続・従属接合 (nuclear subordination)

これに、V2が自動詞の「V1 wa Vi」の接続・接合パターンを再掲する。

- ・ V1 ている  
「V1 wa an」(V1 自他 OK)                              中核接続・等位接合 (core coordination)
- ・ V1 てしまう  
「V1 wa isam」(V1 自他 OK)                              中核接続・非従属接合 (core non-subordination)
- ・ V1 てみる  
「V1 wa inkar」(V1 自他 OK)                              中核接続・連位接合 (core cosubordination)

以上のことから、中核接続にあるアイヌ語の補助動詞構文には、V2の取る項が常にV1の取る項と関係をもって埋められなくてはならないという条件があるといえる。すなわち、V2が自動詞の場合はV1の自他に関わらずV1が取る項(主語ないし目的語のどちらか)と自動詞V2が取る1つの項が共有され一致することで、中核レベルでの複合が実現する。また、V2が他動詞の場合も同じ条件となり、他動詞V2が取る2つの項が、常にV1の取る項と共有される(ただしokereは異なる特徴を示す)。このことから、V2が他動詞の時には、V1には2項動詞以上しか立てないという制約を生じさせる。よって、自他の両形式をもつ「見る」や「聞く」なども、より制約のない自動詞が選択されて補助動詞構文を成していると考えられる。

V2にokereが立つ場合はV1とV2が従属接合となり、他の補助動詞構文とは異なる特徴を示す。しかし、V2が人称変化する限りでは他の補助動詞構文と同様にV2の取る項が常にV1の取る項と関係を持つ必要がある。従属接合のなかではV1とV2の主格の項が共有されるが、他動詞okereが取る目的格の項はV1をイベント項として補文的に埋め込むことで関係を持つことになる(V2の目的格の項がV1と関係のない独立した名詞項を取るということはない)。そのため、「V1 wa okere」はV2が他動詞でありながらV1には自他ともに

立つことができるが、V1 が他動詞の場合と自動詞の場合とで構文としての機能が異なるなど単純な許容関係ではない。また、内核接続の場合は V2 の *okere* が人称変化を失い、V1 に対して助動詞的にふるまっていると見ることができる。

以上、アイヌ語の補助動詞構文について V2 の自他を基準とした各形式の接続・接合関係を示した。接合関係については暫定的なものが含まれるが、操作子のスコープから分析をおこなう必要があるため、今後も用例の追加などから検討を続けていく。補助動詞構文の成立条件を以下で (73) として示す。

- (73) 補助動詞構文は V1 と V2 が基本的に中核接続の非従属接合の関係にあり、V2 の取る項すべてが常に V1 の取る項と共有されることで構文が成立する。

#### 4.3.4. 助動詞構文の分析

助動詞構文「V1+V2」は、V1 が人称変化する語彙的動詞であるのに対し、V2 は助動詞として形態的に不変化の形式である。この点で V1、V2 とともに人称変化する補助動詞構文とは異なる。一方で、V2 は語彙的動詞の助動詞用法として動詞としての意味的な性格を強くとどめており、意味的な主要部を担うこともある。

助動詞 V2 には自動詞のものも他動詞のものもある。また、V2 に比べてオープンである V1 には基本的に自動詞も他動詞も立つが、V2 の自他には極端な偏りがあり、構文を成すのはほとんどが他動詞 V2 である。V2 に立って助動詞構文を成す自動詞は *tunas*「はやくなる、はやい」と *moyre*「おそくなる、おそい」の 2 形式で (田村 (福田) (1960) ほか)、それ以外は他動詞の形式である。以下では、自動詞 V2 の LSC および他動詞 V2 の LSC をみていく。

##### 4.3.4.1. 「V1+Vi」の LSC

助動詞 V2 が自動詞である「V1 *tunas*」(V1 するのがはやくなる)、「V1 *moyre*」(V1 するのがおそくなる) の 2 形式について、V1 の自他における可能な組み合わせの接続・接合関係を LSC で示していく。なお、反意関係にある 2 形式であるため、以下では形式ごとに小節をわけずに示す。

##### 4.3.4.1.1. 「V1+tunas/moyre」の LSC

「V1 *tunas*」(V1 するのがはやい)、「V1 *moyre*」(V1 するのがおそい) はともに、V1 に自動詞も他動詞も立つ (2.3.2.2.1.参照)。

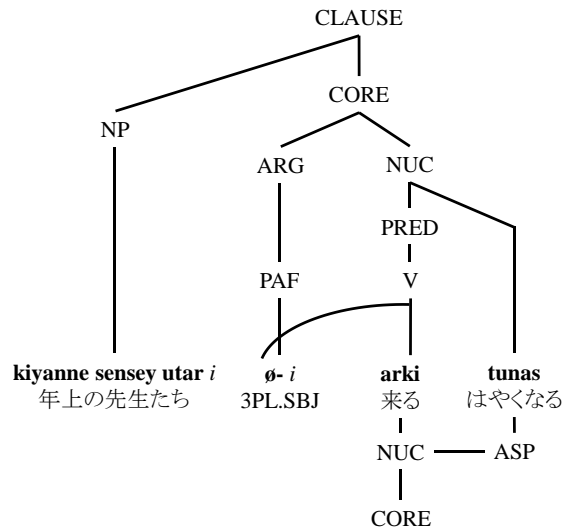
まず、V1 に自動詞が立った場合の LSC を検討するため、当該例である既出の (30) (31) を (74) (75) として再掲し、その LSC を検討する。

- (74) *tane*  $\emptyset$ - $\emptyset$ -*kor*                      *kiyanne* *sensey* *utar*  $\emptyset$ -*arki*                      *tunas*                      *wa*  
今    3SG.SBJ-3.OBJ-持つ    年上の先生    たち    3PL.SBJ-来る    はやくなる    て  
*turano* *kotan* *un*  $\emptyset$ -*hosippa*                      *kuni*                       $\emptyset$ - $\emptyset$ -*ye*                      *akusu*  
一緒に    村    へ    3PL.SBJ-帰る    ことになっている    3SG.SBJ-3.OBJ-言う    と

今、彼女の年上の先生たちが来るのが早くなって、一緒にくにへ帰るのだと彼女が言うので

田村 (1984 : 54、本稿 (30) 再掲)





kiyanne sensey utar **ø-arki tunas**

年上の先生がたが来るのが早くなって (= 74)

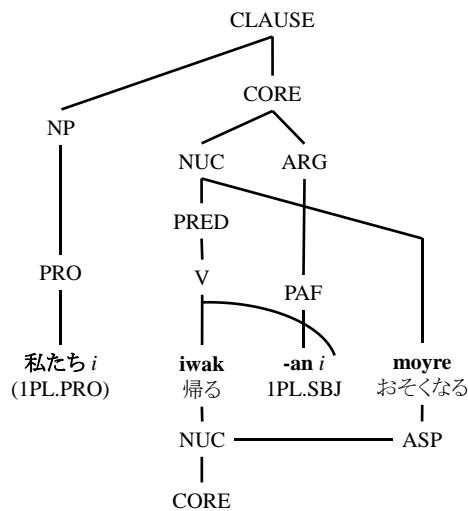
図 32 「Vi tunas」 (tunas 不変化) の LSC

- (75) 

<u>iwak-an</u>	<u>moyre</u>	kor	i-etoko	ta
帰る-1PL.SBJ	おそくなる	と	1PL-の先	に
iwak-an	pakno	ø-an	wa	
帰る-1PL.SBJ	まで	3SG.SBJ-いる	て	

私たちが帰るのが遅いと (おじさんは) 私たちより先に私たちが帰ってくるまで  
いて

萱野 (1998c : 92、本稿 (31) 再掲)



**iwak-an moyre**

私たちが帰るのがおそくなって (= 75)

図 33 「Vi moyre」 (moyre 不変化) の LSC

(74) (75) は、V1 が自動詞であり、助動詞 V2 の *tunas* 「はやくなる」と *moyre* 「おそくなる」もともに自動詞である。V2 の *tunas* と *moyre* が形態的に不変化であるとみる場合は、上記、図 32、図 33 の LSC で示すように内核連接として示すことができる。これは、先の「V1 wa okere」(V1 してしまう : *okere* は不変化) の図 31 と同様のとらえかたである。

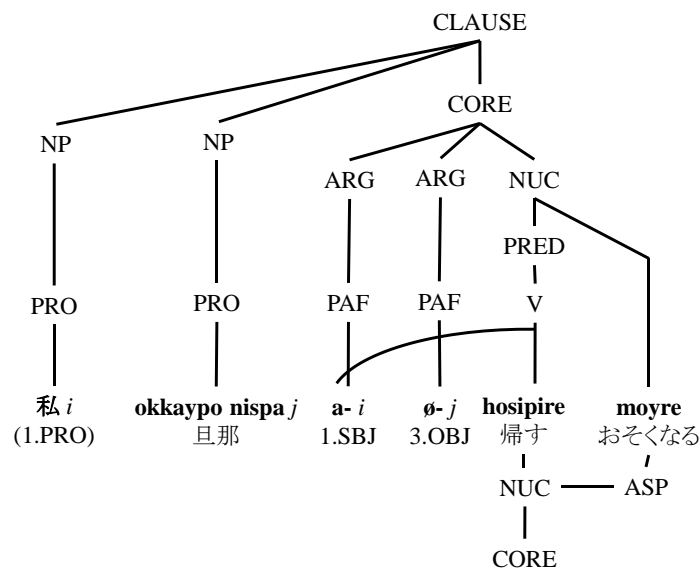
「V1 *tunas*」(V1 するのがはやくなる)、「V1 *moyre*」(V1 するのがおそくなる) は、動詞のなかでも Primary verb (ここでは V1) と従属的に結びついてその項の 1 つに補文を取るもので、かつ Primary verb に項を追加することなく文法的な意味合いの修飾をするという Dixon (2010: 401) の Secondary-A の特徴と一致する。内核連接であるため項の共有はなく、*tunas* 「はやくなる」や *moyre* 「おそくなる」が本来的に要求する主格項も V1 の事象全体をイベント項として取っているとみることができる。よって、LSC では内核連接・従属接合と分析できる。

また、V1 には他動詞も立つことができる。「Vt *moyre*」の例として既出の (34) を (76) として以下に再掲し、その LSC を示す。

- (76) *okkaypo nispa a-ø-hosipi-re moyre*  
 若い男 旦那 1SG.SBJ-3SG.OBJ-帰る-CAUS おそくなる

私が旦那を帰すのがおそくなる

アイヌ民族博物館 (C0178L00774、本稿 (34) 再掲)



*okkaypo nispa a-ø-hosipire moyre*  
 旦那を帰すのがおそくなる (= 76)

図 34 「Vt *moyre*」(*moyre* 不変化) の LSC

V2 に立つ moyre (および tunas) の Secondary-A としての特徴は、内核接続・従属接合の LSC として V1 の自他を問わない点で示される。

tunas 「はやくなる」、moyre 「おそくなる」は助動詞の機能として V1 の行為全体・プロセスの遅速を表わしている (Refsing 1986 : 200)。また、副詞としても V1 に係ることができ (「tunas(no) V1」はやく V1 する、「moyre(no) V1」おそく・ゆっくり V1 する)。V1 が表す行為、プロセスの遅速を表わすことは、動詞の表わす事態の内部的な時間構造に関わる機能ととらえられることから、ここでは広義のアスペクト機能のひとつとした。そのため V2 に立つ tunas、moyre の機能的な意味を図 32、33、34 の LSC ではアスペクトの操作子として内核レベルで投射させている。一方で、tunas 「はやくなる」、moyre 「おそくなる」は、それ自体が語彙的な意味も保っており、V1 を意味上で補文節的にとっている点で、Dixon (2010) の Primary-B の動詞としての性格も有しているといえる。これらの意味タイプの判定も今後の課題のひとつである。

V2 は形態的に不変化であるため表層において人称による項の支配が現れないが、深層においては前述のとおり、自動詞 V2 が V1 の事象全体をイベント項として取ることで複合していると考えられる。自動詞は項のスロットが 1 つしかないため、イベント項が埋め込まれることで統語的な関係は満たされるが、以下の語彙的動詞としての tunas、moyre の用例は、意味的に主格項とイベント項の 2 項をとっているかのようなふるまいをみせる点で特徴的といえる。既出の (28) (29) を (77) (78) として再掲する。

(77) eytasa e-tunas  
あまりに 2SG.SBJ-はやくなる

(2人で米を搗いているとき、一方が早すぎて間に合わない状況で)  
あまりにおまえが(搗くのが)はやい

田村 (1996 : 736、本稿 (28) 再掲)

(78) a-ø-kor                      okaypo hoski      ø-arpa                      yak                      ø-pirka.  
1SG.SBJ-3.OBJ-持つ 青年 先に      2SG.SBJ.IMP-行く      なら      3.SBJ-良くなる  
ponno      moyre-an                      na  
少し      おそくなる-1SG.SBJ                      から

にいさんが先に行ってください、私はちょっと遅れていくから

千葉大学 (2015c\_17-2 : 1609、本稿 (29) 再掲)

これらは、tunas 「はやくなる」、moyre 「おそくなる」が語彙的動詞として用いられる例である。動作主の行為・プロセスの遅速を示すものであり動詞自体はイベント項を取ってはいない。しかし、意味的にはいずれも動作主によりなされる特定の行為 (イベント) の遅速へ言及しているとみられる。(77) を助動詞構文で e-ta tunas 「お前が搗くのがはやい (e-2SG.SBJ, ta 搗く)」、(78) の文を arpa-an moyre 「私が行くのがおそい (arpa 行く、-an 1SG.SBJ)」

のように置き換えて同等の意味の表現を作れるかはわからないが、(77) (78) は文脈からイベント項にあたるものを要求し、その行為・事象の遅速を表わしていると考えられ、主語そのものの属性としての遅速ではない。

#### 4.3.4.2. 「V1+Vt」のLSC

次に、助動詞 V2 が他動詞である形式の LSC を見ていく。他動詞 V2 は形式が多いため、Bugaeva and Nakagawa (2013 : 26) の助動詞の意味的分類にもとづいて「認知・感情」から「V1 oyra」(V1 し忘れる)、「モダリティ」から「V1 etoranne」(V1 するのが面倒くさい、いやだ)、「アスペクト」から「V1 okere」(V1 しおえる) の 3 形式を代表して取り上げる。V1 の自他における可能な組み合わせの接続・接合関係を LSC で示していく。

##### 4.3.4.2.1. 「V1 oyra」のLSC

「V1 oyra」(V1 し忘れる) は、V1 に他動詞が立つ。一方で、V1 に自動詞が立つ例は得られていない(2.3.2.2.2.参照)。また、forget の意味をもつアイヌ語の oyra は、Dixon (2010) の Primary-B の意味タイプの特徴に当てはまる。Primary-B は、そのスロットを補文節で埋めることができ、また、それ自体の意味的な側面 (semantic profile) を保持するものである。

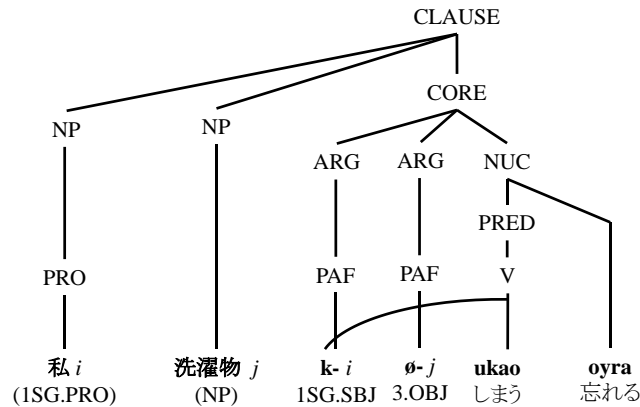
「V1 oyra」も、oyra「忘れる」が特別に文法化した機能的意味で V1 を修飾するわけではなく、やはり語彙的な「忘れる」という意味のまま、むしろ V1 を補文節のように意味的に項として取ることで複合しているといえる。つまり、Primary-B では V2 が意味的な主要部としてふるまい V1 を補文として取る関係であるといえるが、統語的な主要部は V1 である。

V1 に他動詞が立った場合の LSC を検討するため、当該例である既出の (36) を (79) として再掲し、その LSC を示す。

(79)	<u>k-ø-ukao</u>	<u>oyra</u>	wa	ø-rurikan
	1SG.SBJ-3.OBJ-しまう	忘れる	CONJ	3.SBJ-少し湿る

私は (洗濯物を) しまい忘れて少し湿った

田村 (1996 : 821、本稿 (36) 再掲)



k-ø-ukao oyra

私が洗濯物をしまい忘れた (= 79)

図 35 「Vt oyra」(oyra 不変化) の LSC

(79) において、V2 の oyra は形態的に不変化である。また、V1 と V2 のあいだに接続助詞などがあるわけではなく、V1、V2 でひとつの述語を成している。この点で補助動詞構文よりも複雑述語としての緊密性が形態・統語的に高いといえる（ただし、V1 と V2 のあいだに挿入可能な要素があるため、複合語ではない）。

oyra は V1 の他動詞 ukao 「しまう」に対して項（主題役割）を追加しない。そのため、V2 自体が表層においては項を独自にとらず V1 に従うことから内核連接（nuclear juncture）と分析できる。Primary-B としての意味タイプの特徴からすると、oyra 自体は意味的な独立性を持ち（意味的な主要部であり）、その項のスロットのひとつに補文節をとる。そのため、他動詞 oyra に想定される 2 つの項のスロットのうち、ひとつは V1 をイベント項として、もうひとつは、V1 の主語（動作主）が V2 の主語（経験者）の項のスロットを埋める。形態上は示されないが、V2 の oyra は深層において V1 との関係のなかで項を満たしているといえる。

なお、自動詞が V1 に立てない理由は説明がつかない。仮に V1 に自動詞が立ったとしても主語が一致して V1 の自動詞で表されるイベントを oyra が目的語の項として取れば同じ LSC で処理できることになる。oyra に自動詞が立つ例が得られないのが資料調査の限界によるものなのか、意味的な制約によるものなのかは今後の課題である。同じ、「認知・感情」に関わる他の V2 として「V1 amkir」（V1 した覚えがある）、「V1 eramiskari」（V1 した覚えがない）、「V1 eraman」（V1 がわかっている）、「V1 erampewtek」（V1 がわかっていない）などがあげられるが、同じ内核連接・従属接合の LSC のなかで V1 に自動詞も他動詞も取ることができる（岸本 2016 : 7）<sup>75</sup>。

<sup>75</sup> ただし、用例の絶対数が少なく、また eraman も V1 に自動詞が立つ具体的な用例は確認できていない。一方で、これらの形式は補文標識を伴った補文節構造の主節として人称変化して現れる例は多くみられる。



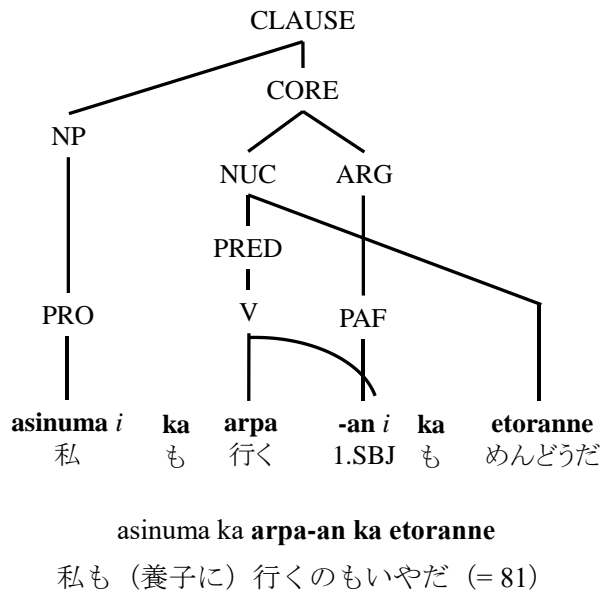


図 37 「Vi etoranne」 (etoranne 不変化) の LSC

V1 には自動詞も他動詞も立てることから、助動詞の *etoranne* は V1 に対して項 (主題役割) を追加しない要素ととらえられる。Primary-B としての意味タイプの特徴から、*etoranne* の他動詞としての本来の項のスロットを想定すると主格を V1 と共有し、目的格の項を V1 の事象全体をイベント項として取っているとみられる。現時点では、(80)、(81) それぞれの LSC を内核接続と分析している。また、V1 を補文的にとる従属接合であるといえる。

(80)、(81) いずれも、V2 が他動詞として V1 の主語を共有し、V1 をイベント項とした補文関係が成立することで構文が成立していると考ええると、これらがもし、充当接頭辞で派生して他動詞になっていない場合、V1 をイベント項として取ることができないために助動詞構文を成さないと予想される。この点で、イベント項としての意味的な複合が「V1+V2」の助動詞構文では重要な点であるといえる。

#### 4.3.4.2.3. 「V1 okere」の LSC

「V1+V2」構文においてアスペク的な意味をもつ「V1 okere」(V1 しおえる) は、意味的に Secondary-A のタイプに近いと考えられている (Bugueva and Nakagawa 2013)。すなわち、深層構造において 1 つの項のスロットが常に補文節で埋められ (表層構造での項のスロットでは名詞句だけが現れることもある)、補文節構造をつうじて文法要素または語彙素として常に Primary verb とつながり、意味的に修飾をする概念としての特徴を有する。Primary-B との違いは意味的な主要部性であり、上で見てきた「V1 oyra」(V1 し忘れる) や「V1 etoranne」(V1 するのがめんどうだ、いやだ) などは、意味的な主要部が助動詞 V2 にあるのに対して、この「V1 okere」(V1 しおえる) はアスペクトとして V1 を修飾している

とみられる。ただし、これらの意味タイプの判断は暫定的なものであり、主要部の判定には助動詞構文 (Auxiliary Verb Construcion) における形態的、統語的、意味的な基準を検討する必要がある。

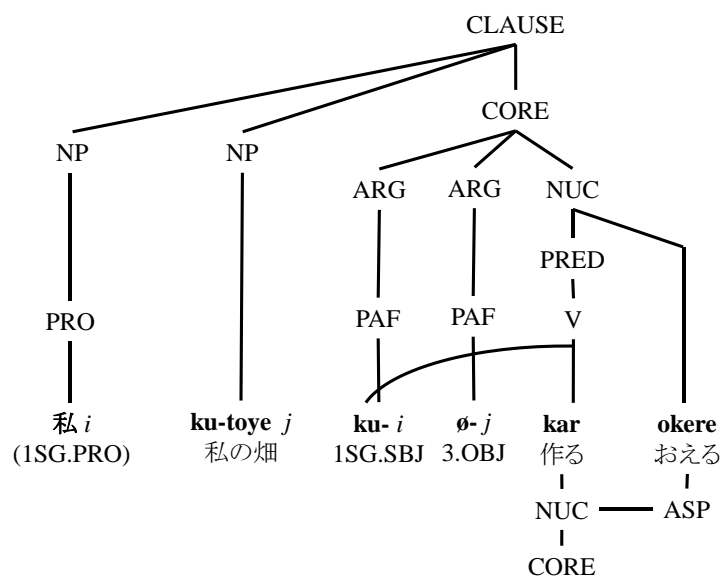
助動詞構文「V1 okere」は補助動詞構文の「V1 wa okere」(V1 てしまう) との構文的な連続性も注目される。なお、補助動詞構文「V1 wa okere」は、V2 が人称変化する場合としない場合のゆれがみられ (ただし、多くは不変化)、人称変化する場合は中核連接、人称変化しない場合は内核連接の従属接合として LSC を示し、述部複合での統語的關係の強さに差異があることを述べた。

V1 には他動詞も自動詞も立つ。当該の用例として既出の (35)、(37) をそれぞれ (82)、(83) として再掲し、以下で LSC を示す。

- (82) ku-toye                      ku-ø-kar                      okere    wa    ku-heseturiri  
 1SG-の畑                      1SG.SBJ-3.OBJ-作る    終える    CONJ 1SG.SBJ-息をつく

私の畑を作りおえてほっと息をついた

田村 (1996 : 186、本稿 (35) 再掲)



ku-toye **ku-ø-kar okere**  
 私が畑を作りおえた (= 82)

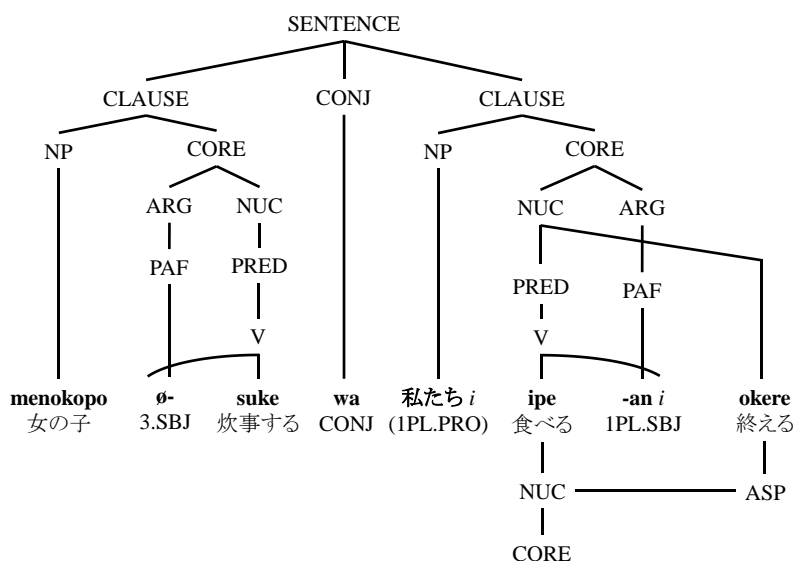
図 38 「Vt okere」(okere 不変化) の LSC



- (83) tane menokopo ø-suke wa ipe-an okere kor  
 今 娘 3SG.SBJ-炊事する CONJ 食事する-1PL.SBJ 終える と  
 ora ka aynu ø-arki yak ø-pirka  
 それから 人 3.SBJ-来る なら 3.SBJ-良くなる

今、娘さんが料理を作っているので、私たちが食事しておえて、それから（談判しに来る）人が来るが良い

田村（1989：50、本稿（2）、（37）再掲）



**ipe-an okere**

私たちが食べおえた (= 83)

図 39 「Vi okere」(okere 不変化) の LSC

(82) (83) のとおり、「V1 okere」は V1 に他動詞も自動詞もとることができることから、形態的に不変化である V2 の okere は V1 に対して項（主題役割）を追加しない。Secondary-A としての意味タイプの特徴から、他動詞 okere の本来の項のスロットを想定すると、主格を V1 と共有し、目的格の項を V1 の事象全体をイベント項として取ることで意味上で補文関係が成り立っている。現時点では、(82) (83) の LSC も内核連接・従属接合として分析している。

4.3.4.3. 「V1+V2」の LSC まとめ

助動詞構文の V2 の自他に着目して LSC を示してきた。この構文は V2 が形態的に変化せず、V1 と V2 がひとつの中核項をとるため、統語的にも緊密性の高い関係である。ただし、V1 と V2 のあいだに限られた要素が割って入ることができる点で、複合語ではない。また、

V1 に対して項の追加もせず、意味的には V2 の主語と V1 の主語が一致し、かつ、V1 の事象全体を補文とする。これらの特徴から、LSC ではいずれも内核連接・従属接合 (nuclear subordination) として分析した。さらに、前節での生成文法によるアプローチの図 9、図 10 で示した構造を満たすといえる。

助動詞 V2 が V1 を意味的に補文として取るというのは、それぞれの形式の意味タイプがもつ Primary-B および Secondary-A の特徴によるものである。いずれの意味タイプもその項に補文を取るものであり、Primary-B では V2 が意味的な主要部としてふるまい V1 を補文として取るのに対して、Secondary-A は V1 が意味的な主要部で、V2 がそれに修飾的な意味を付与するかたちで V1 を補文として取るという意味関係である。V1 と V2 のどちらが主要部であるかは暫定的な判断であり今後も検討を続けるが、いずれも V1 を補文的にとるという点で共通する。

補文を取る形式 (complement-taking verbs) は基本的にその目的語の項に補文をとる。そのため、助動詞構文の V2 も目的語を取る形式 (他動詞) が立つことになり、自動詞の場合は、V2 の動作主が主語の項を埋めてしまうことで V1 をイベント項として取ることができなくなってしまうため、充当接頭辞 e-で他動詞に派生された形式が立てられるといえる。そのため、自動詞 V2 の tunas 「はやくなる」と moyre 「おそくなる」が V2 の位置で主語およびイベント項と関係をもって助動詞構文を成すのは統語的に特殊なふるまいである。「V1 tunas」(V1 するのがはやい)、「V1 moyre」(V1 するのがおそい) は統語的な制約を超えて、意味的に V1 をイベント項として取り、そのプロセスの遅速を表わす一種のアスペクト的な機能を有することを示している。

## 第5章 考察

以下では前章までに RRG の LSC で示した V1 と V2 のあいだの関係を中心に（特に項の共有や関係性について）、アイヌ語の複雑述語における制約を考察する。

### 5.1. 補助動詞構文の制約

補助動詞構文「V1+CONJ.wa+V2」は、V1、V2 ともに人称で変化する点で形態的な緊密性が低く統語的な独立性が高い。そのため、多くの形式で V1 と V2 の中核レベルでの独立性を認めた「中核接続」と分析した。また、V1 と V2 は埋め込みの関係にないことから非従属接合（等位接合・連位接合）である。

V1 と V2 が継起的関係にある等位接合ではなく、意味的にひとつの述語として複合するためには、V1 と V2 のあいだでの項の共有（人称の一致）が大きな条件となる。補助動詞構文における項の共有は、LSC の同一指示の関係から、基本的に V2 の取る項をすべて V1 の項と関連付ける（共有）させる必要がある。V2 が独自に V1 と関係のない項を取るとき、それは単純な等位接続文としてふるまう。これは既出の (41) (42) から確認された。再掲して LSC を示す。

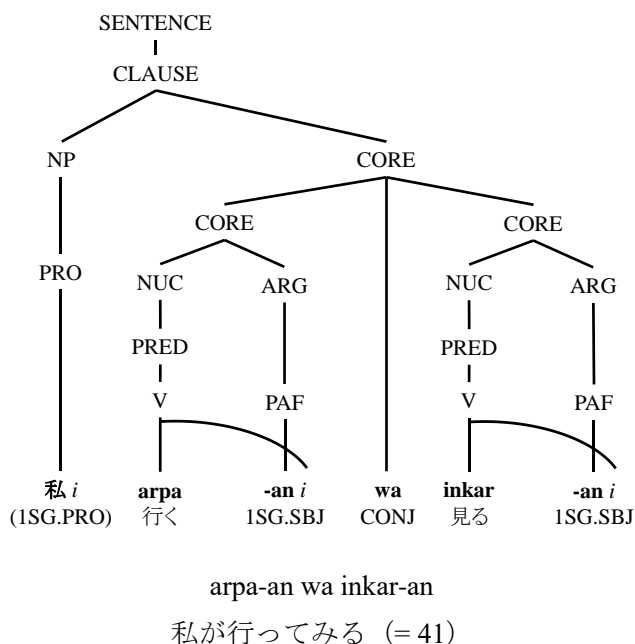


図 40 V1 wa inkar（補助動詞構文）

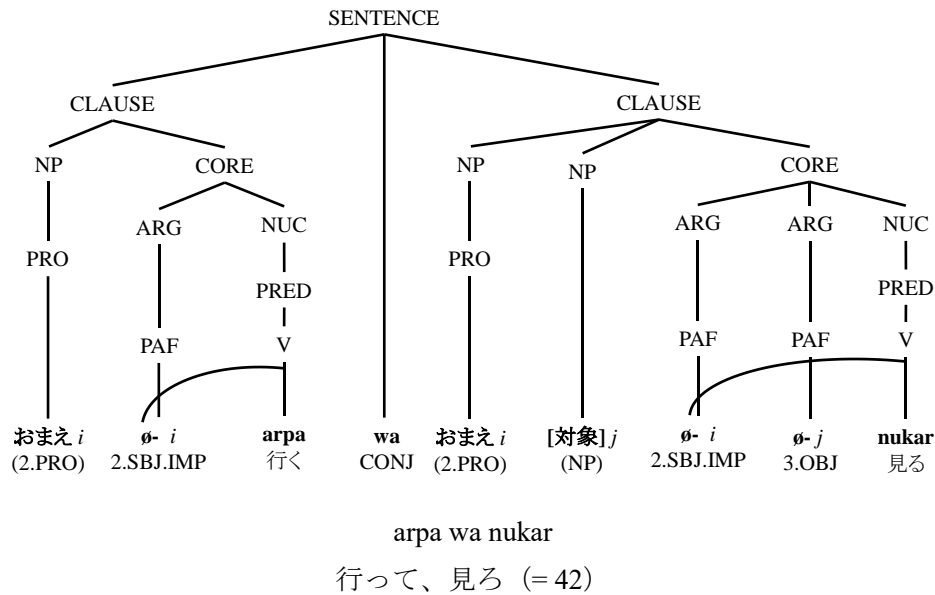


図 41 V1 wa nukar (等位接続文)

図 40 は、V2 が自動詞であり、主格の項が V1 の項と共有されている。一方、図 41 は V2 が他動詞であり、主格の項は V1 と共有される（同一指示である）ものの、V2 の目的格にあたる項は V1 に存在せず、V2 で独自に対象をとらなくてはならない。この場合、V1 と V2 は補助動詞としての複合をせず、2 つの等位接続文と解釈される。

このことから、補助動詞構文の成立には V2 のすべての項が V1 の項と関係をもつということが条件づけられ、基本的には項の共有でもって成立する。inkar「見る（自動詞）」と nukar「見る（他動詞）」のような自他両形ある動詞が V2 に立つさい、自動詞が選ばれて構文を成すのはこの制約のためと考えられる。また、他動詞で構文を成している「V1 wa anu」（V1 ておく）は、この制約のために V1 に自動詞を立てることができないとみることができる。

このことから、補助動詞構文成立上の制約は「V1 の結合価  $\geq$  V2 の結合価」とまとめられる。

なお、他の形式より文法化が進み助動詞形式との連絡がみられる「V1 wa okere」（okere は多く不変化となる）は、(79) の例外として「Vi wa okere」（V1 の結合価 < V2 の結合価）で構文を成す。しかし、V2 が不変化へ形態的に移行している点、構文として抽象化した意味を表わす点、また内核接続・従属接合という点で、他の補助動詞構文とは大きく意味的特徴を異にしている。「Vi wa okere」については今後も文法化の観点から分析を進める必要があるが、その意味では「V1 の結合価  $\geq$  V2 の結合価」の制約の限りではないものといえる。

## 5.2. 助動詞構文の制約

助動詞構文「V1+V2」は、V1、V2ともに人称で変化せず形態的な緊密性が高い。そのため、本稿ではV2に中核レベルでの独立性をみとめず、すべてV1との「内核接続」と分析した。このため、V2が統語的な主要部であるV1に対して項の追加などをおこなわないため、基本的に助動詞構文は自他のすべての組み合わせで用例があらわれる（一部、用例が得られていないものもあるが、本稿での資料調査の限界による可能性あり）。また、V1とV2は埋め込みの関係であることから、従属接合とした。

一方で、アイヌ語の助動詞V2は語彙的動詞の助動詞用法であるために、助動詞としても語彙的動詞の意味を強く保ち、一部のアスペクト機能にかかわる形式（okere「終える」など）を除いて、意味的な主要部はV2とみられる。表層でV2は不変化のため人称による項の要求はないが、V2の本来的な項はV1と関係をもって埋められることではじめて複合条件を満たすとみられる。V2で想定されるすべての項をV1と関連付けて埋めなくてはならないという点（従属接合であるため、1つは主格の項の共有、もう1つはV1をイベント項とする目的格の項への補文の埋め込み）は、補助動詞構文の成立条件と重なるといえる。

このことから、助動詞構文成立上の制約は「V1 結合価  $\leq$  V2 の結合価」とまとめられる。補助動詞構文と異なり、助動詞構文はV1を意味的な補文としてV2の目的格の項にとる構造であるために、V2は他動詞がデフォルトである。仮に、自動詞をV2に立てる場合は、項数を増やす充当接頭辞 e-「～に関して」を自動詞語基に接頭することで他動詞（2項動詞）化させ、助動詞V2としてV1を補文として取らせている。そのため、助動詞構文は他動詞V2に偏って成立し、自動詞V2で構文をなすのはわずかに tunas「はやくなる」と moyre「おそくなる」の2例である。

自動詞 tunas と moyre が V2 に立って助動詞構文として成立するためには、V1 と主格人称が共有され、なおかつ V1 をイベント項として取る必要があるが、tunas と moyre は自動詞であるため統語的には 2 項を同時にマークすることはできない。この点については、前章の 4.2.2.2 において、自動詞 V2 の統御下においてイベント項とその主語の項が tunas、moyre と関係をもつ構造を示した（図 9、図 10）。

自動詞 tunas および moyre が、語彙的動詞として用いられるさいに、単にある行為・イベント全体のプロセスの遅速を表わすだけではなく、そのイベントの主語にあたる項も取り上げて遅速の主体として一致させる点は（cf. (50) (51)）、pirka「よくなる」などの他の自動詞と異なる特徴といえる。pirka は補文標識をとまなう補文節構造でイベント項を取ることができるが、そのイベントの主語を共有することはなく、あくまでイベントを 3 人称で受ける。

一方で、4.3.4.2.2.で取り上げた他動詞 etoranne「～がめんどうだ」は、自動詞 toranne に充当接頭辞 e-が接頭して他動詞化して助動詞構文を成す。これは、以下の用例からわかるように tunas や moyre と同じくイベントの主語をそのまま動詞の主語として一致させることができる。

(84) ku-toranne wa ku-mokor ka a-en-eaykap-te<sup>76</sup>  
 1SG.SBJ-怠ける CONJ 1SG.SBJ-眠る も INDF.SBJ-1SG.OBJ-できない-CAUS

私が怠けて眠ろうにもそうさせてくれない。

田村 (1996 : 77)

限られた用例であるため判断は難しいが、(84) の *ku-toranne* 「私が怠ける」は、なにか具体的なイベントを照応し「私が V することを怠ける」という意味を含意し、そのイベントの主語である 1 人称が直接、自動詞 *toranne* に標示されている。これは *tunas*、*moyre* と同様の意味的な性質を有しているとみられ、現に助動詞構文をなすわけである。しかし、*tunas*、*moyre* と決定的に違うのは、自動詞 *toranne* はそのままでは助動詞になれず他動詞化を要する点である。すなわち、*toranne* は自動詞としてその様態を受ける主語をとることができる一方で、イベント項までは受けることができないため、充当接頭辞によってイベント項を取ることができる派生を要するわけである。

裏を返せば、*tunas* 「はやくなる」、*moyre* 「おそい」は、形態的に自動詞でありながら主語以外にも意味上でイベント項を参照するという特徴を有しているということになるので、意味的には自動詞と他動詞の中間的なし、むしろ他動詞的な性質を有するものと考えられる<sup>77</sup>。*tunas*、*moyre* は V1 に対してその遅速を表わす点で Primary verb に対して常に修飾的な機能を果たすと述べたが、これは「V1 okere」と同様に Secondary-A としての意味タイプを有していると考えられる。

以上、その論拠とするさらなる分析を要する点は多々あるが、自動詞の補文関係においては *pirka* 「よくなる」のように事象全体を指示するもの（補文節構造を取る）、*toranne* 「怠ける」のように事象の主語を指示するもの（ただし、事象全体は指示できない）、*tunas* 「はやくなる」、*moyre* 「おそくなる」のように、事象全体とその事象の主語の両方を指示するものの 3 タイプ（かそれ以上）があるとみられる。従来の形態的な自他以外の、動詞の意味性質に基づいた分類は今後の課題である。

以上より、助動詞 V2 は V1 の主語とイベント項を V2 の項として取ることで助動詞構文が成立するという条件で共通し、自動詞 *tunas*、*moyre* はその意味的な構造に他動詞の Secondary-A タイプのような性質をもつことから自動詞のまま助動詞を形成できるといえる。

<sup>76</sup> 助動詞構文が成立するためには、V1 と V2 の主語（主格項）が一致する必要がある。(84) の *ku-mokor ka a-en-eaykap-te* は、V1 の主語が 1 人称、V2 の主語が不定人称であって一致しないが（当該例のグロス参照）、ともに人称変化する動詞句が副助詞 *ka* を挟んで並んでいる。通常、V2 が動詞句として語形変化する場合は、V1 の動詞が名詞に転成して項としてふるまうが（佐藤 2008 : 91）、(84) の例はその点でも破格といえる。V1 の主語と V2 の目的語で項の一致がみられるが、このような主語の一致のない助動詞構文的な構造をどのように捉えるべきかは、今後の課題である。

<sup>77</sup> *tunas* と *moyre* が他動詞的な性質を有するために助動詞として許されているのではないかという点については、指導教員である佐藤知己先生からもご指導をつうじてご指摘いただいている。

## 第6章 まとめと課題

本稿は、アイヌ語の複雑述語である補助動詞構文 (V1+CONJ.wa+V2) および助動詞構文 (V1+V2) の V1 と V2 のあいだにみられる複合制約を取り上げ、統語的な観点と分析から複合制約のベースとなる項の関係を明らかにした。

アイヌ語の複雑述語は、それぞれの機能の記述において早くから注目されてきたが、複雑述語としての成立そのものに関する統語的・意味的な研究は、Bugueva (2012, 2014, 2018) を筆頭に、Bugueva and Nakagawa (2013)、中川 (2013) など近年になって盛んに論じられる。これら一連の先行研究により、複雑述語としての統語的な単節性や歴史的な変化について通言語的な分析がなされ、本稿においても重要な出発点として多く参照している。一方で、V1 と V2 のあいだの複合制約については、いまだに未解決の点が多く、構文の成立において V2 の自他に偏りがあることは自明であっても、その理由は大きな課題として残っている。

本稿では、RRG 理論の LSC を応用してアイヌ語の節構造を示した。これによって、補助動詞構文・助動詞構文それぞれの V1 と V2 のあいだの項の関係、特に項と人称接辞のあいだの同一指示関係、また CORE レベル、NUC レベルでの共有関係を示すことができた。その結果、従来は主に V2 の主格項と V1 の項の一致が複合の条件とされていた点について、主格に限らず V2 が取るすべての項が V1 の項と関係をもつ必要性があることを示した (非従属接続においては項の共有、従属接続においてはイベント項としての埋め込みによる V1 と V2 のあいだの項の関係性が求められる)。

そのため、非従属接続が基本である補助動詞構文においては V1 と V2 のあいだの項の関係がより成立しやすい自動詞 V2 が選好され、自他両形ある *inkar*、*nukar* (「見る」の自他形式) なども補助動詞としては自動詞の形式が選択されるとみられる。また、従属接続が基本である助動詞構文においては、V1 全体をイベント項として取りやすい他動詞 V2 が選好される。本来、イベント項を取らない自動詞などは助動詞化にさいして充当接頭辞によって他動詞化され、V1 をイベント項として意味上で取ることになる。しかし、語彙的動詞としては自動詞である *tunas* 「はやくなる」、*moyre* 「おそくなる」の反意的な 2 形式に関してはこの限りではなく、そのまま助動詞として用いられる。助動詞は形態的には不変化であり、補助動詞構文のような表層的なレベルでの項の関係が判然としない。そこで、本稿では日本語の統語的複合動詞研究における生成文法理論をもちい、アイヌ語の助動詞構文の深層における V1 と V2 の項の関係を RRG での分析に先立って示した。その結果、他の様態を表わす自動詞 (本稿では *pirka* 「よくなる」と *toranne* 「怠ける」との対照) と *tunas*、*moyre* のあいだで、形態的な自他とは異なる意味的な性質の違いが観察された。

自動詞が補文的に事象を項に取る場合、*pirka* 「よくなる」は事象そのものを主語の項にとる (補文標識で名詞化された事象を 3 人称で受ける) のに対し、*toranne* 「怠ける」のような自動詞は、その事象の主語を主格の項に取れる (*ku-toranne* 「私が怠ける」)。これは通常、*pirka* ではみられない。ただし、自動詞 *toranne* は、怠ける対象にあたる事象全体を項と

して取ることはできないので、これを補文的に取るためには充当接頭辞による他動詞化の派生をする必要がある。しかし、**tunas**「はやくなる」や **moyre**「おそくなる」のような自動詞は、その遅速を表わす事象全体およびその事象の主語を同時に取ることができ、意味上は他動詞のような従属構造を成立させている。

これにより、**tunas** と **moyre** は意味上の項構造においてより他動詞的な性格を有しており、そのために助動詞構文においても変形を受けることなく助動詞としてふるまうことができるという可能性を示した。

本稿は複雑述語の V1 と V2 のあいだにある制約について、統語的な項の関係性から制約の条件を示した。一方で動詞の意味的なレベルでの分析は不十分であり大きな課題として残されている。また、自動詞の再分類も大きな課題として残されている。これを基礎研究として、さらに V1 と V2 のあいだの意味的な制約にも目を向け、特に助動詞構文における **tunas**、**moyre** の他動詞的なふるまいをもつ意味的特徴を他の動詞との関係からより詳細に明らかにしていきたい。



## 謝辞

本研究を進めるにあたって、長年にわたりご指導・ご教示を賜りました佐藤知己先生に深く感謝申し上げます。佐藤先生には学部時代より言語学・アイヌ語のご指導を賜り、不出来な私を常に励まし、また、研究態度や進め方をお示しいただきました。

言語情報学講座の加藤重広先生、李連珠先生、池田証壽先生、ならびにご退官された小野芳彦先生には、学部時代からの長きにわたり折にふれて貴重なご教示・ご指導を賜りました。また、本稿は佐藤先生、加藤先生ならびに西洋言語学講座の清水誠先生にご審査いただき、多くの重要なご指摘・コメントを賜りました。心から感謝申し上げます。さらに、東京理科大学のブガエワ・アンナ先生には、アイヌ語の複雑述語の研究に取り組むうえで貴重なご教示を賜り、また関連するご論考をお送りいただくなど多くのご厚意を賜りました。あわせて係る論文投稿や研究発表で貴重なご指摘・コメントを賜りましたすべての先生がたに厚く御礼申し上げます。

言語研究上の学友、とりわけ言語情報学講座の諸兄姉、後輩たちには日常的に多くの励ましと刺激をいただいております。この場を借りて深く感謝申し上げます。

佐藤知己先生のご紹介を経て在学中からアイヌ語のフィールドワークの機会を得ましたことは、何にも代えがたく貴重な経験となっています。特に、むかわ町の吉村冬子さんには、長年にわたり懇切にアイヌ語をご教示いただき、多くのことを学ばせていただいております。心から感謝申し上げますとともに、ご教示いただいたことを活かせるよう今後とも努力してまいります。また、吉村さんのご家族さまのご理解、ご支援なしには長年にわたるフィールドワークが実現しえなかったことは言うまでもありません。ご厚意に心から感謝申し上げます。あわせて、これまでのフィールドワークの実現には、多くの方々にご支援を賜りました。とりわけ学友の劉冠偉さんには、幾度となく快くお車をお貸しいただくなど、彼のおかげで成しえた貴重な機会は数知れません。また、両親にも多岐にわたり支えていただきました。すべてのみなさまに心から感謝申し上げます。

最後に、本研究課題の進行にあたっては、平成 26 年度から平成 28 年度にわたり日本学術振興会科学研究費（特別研究員奨励費、課題名「アイヌ語の補助動詞に関する記述言語学的研究」、課題番号：14J04824、研究代表者：岸本宜久）の助成を受けました。その成果の一部を本稿にも組み込んでいます。

## 追記

去る平成 30 年 9 月 6 日未明の北海道胆振東部地震では、震源にほど近いむかわ町の吉村さん、ご家族さま、またお世話になった多くの方々が甚大な被害を受けられました。故郷のように親しんだ町は変貌し、お世話になった方々の暮らしも大きく変わってしまいました。一日も早い復興を心から祈念するとともに、これまでの学恩に少しでも報いることができるよう、引き続き精進してまいります。

## 参考文献

- 浅井亨 (1969) 「アイヌ語の文法 アイヌ語石狩方言文法の概略」アイヌ文化保存対策協議会 (編) 『アイヌ民族誌』 下: 771-800. 東京: 第一法規出版.
- イエスペルセン, オットー (1924) 『文法の原理』 上. 安藤貞雄 (訳), 東京: 岩波書店.
- 大堀壽夫 (2012) 「文の階層性と接続構造の理論」『國語と國文學』 89 (11) : 42-52.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 東京: くろしお出版.
- 風間伸次郎 (2015) 「日本語 (話しことば) は従属部標示型の言語なのか?: 映画のシナリオの分析による検証」『国立国語研究所論集』 51-80.
- 萱野茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』 東京: 三省堂.
- 岸本宜久 (2016) 「アイヌ語沙流方言における動詞の助動詞用法と制約」『北方人文研究』 9: 17-38.
- 岸本宜久 (2017a) 「アイヌ語の複雑述語における接続と接合」『北海道言語文化研究』 15: 49-70.
- 岸本宜久 (2017b) 「アイヌ語の複雑述語における補文構造」日本言語学会第 154 回大会口頭発表. 首都大学東京, 2017 年 6 月 24 日.
- 岸本秀樹・由本陽子 (2014) 「複雑述語の射程」岸本秀樹・由本陽子 (編) 『複雑述語研究の現在』 1-15.
- 北原次郎太 (2011) 「アイヌ語継承の現状」木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛 (編) 『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』 91-96. 立川: 国立国語研究所.
- 金田一京助 (1931) 「アイヌユーカラ語法摘要」『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』 1-233. 東京: 東洋文庫.
- 久保寺逸彦 (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿: 久保寺逸彦アイヌ語収録ノート調査報告書』北海道教育庁生涯学習部文化課 (編). 札幌: 北海道教育委員会.
- 斉藤純男・田口善久・西村義樹 (2015) 『明解言語学辞典』 東京: 三省堂.
- 佐藤知己 (2006) 「アイヌ語千歳方言のアスペクト - kor an、wa an を中心として」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 (12) : 43-67.
- 佐藤知己 (2007) 「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて - 特に完了を表す形式をめぐって -」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 (13) : 1-14.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 東京: 大修館書店.
- 田村 (福田) すゞ子 (1956) 「アイヌ語の動詞の構造」『言語研究』 1956 (30) : 46-64.
- 田村 (福田) すゞ子 (1960) 「アイヌ語沙流方言の助動詞: アイヌ語の助詞についての報告 その 1」『民族学研究』 24 (4) : 67-78.

- 田村すゞ子 (1972) 「アイヌ語沙流方言における《…して…》の表現」『國學院雜誌』73 (11) : 147-163.
- 田村すゞ子 (1978) 「アイヌ語と日本語」『岩波講座日本語 12: 日本語の系統と歴史』197-226. 東京: 岩波書店.
- 田村すゞ子 (1988b) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』1: 7-94. 東京: 三省堂.
- 田村すゞ子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』東京: 草風館.
- 田村すゞ子 (2002) 『アイヌ語音声の研究 (平成 13 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (2)) 研究成果報告書)』東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 知里真志保 (1936) 『アイヌ語法概説』東京: 岩波書店.
- 知里真志保 (1942) 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」『樺太廳博物館報告』4 (4) : 51-172.
- 知里真志保 (1953) 「アイヌ語の助詞」『言語民俗論叢: 金田一博士古稀記念』913-932. 東京: 三省堂.
- 知里真志保 (1955) [1973] 「アイヌの散文物語—川下の者の昔話—」『北方文化研究報告』(10) . 『知里真志保著作集』2: 137-192. 所収.
- 中川裕 (1981) 「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」東京大学文学部言語学研究室 (編) 『言語学演習'81』131-141.
- 中川裕 (1993) 「アイヌ語の Arity Calculation」『国文学解釈と鑑賞』58 (1) : 163-168.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』東京: 草風館.
- 中川裕 (2003) 「日本語とアイヌ語の史的関係」ボビン, アレキサンダー・長田俊樹 (編) 『日本語系統論の現在』209-220. 京都: 国際日本文化研究センター.
- 中川裕 (2006) 「アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み」塩原朝子・児玉茂昭 (編) 『表記の習慣のない言語の表記』1-44. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 中川裕 (2013) 「アイヌ語における動詞連続」日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェクト (アイヌ語班) 平成 25 年度第 1 回研究発表会口頭発表. 国立国語研究所, 2013 年 7 月 6 日.
- 服部史郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24 (4) : 31-66.
- 服部四郎 (1964) 『アイヌ語方言辞典』東京: 岩波書店.
- ブガエワ, アンナ (2014) 「北海道南部のアイヌ語」児島康宏・長崎郁 (訳) 『早稲田大学高等研究所紀要』(6) : 33-76.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37-82.
- 村崎恭子 (1963) 「千島アイヌ語絶滅の報告」『民族学研究』27 (4) : 51-55.
- 村崎恭子 (1996) 「話し手の絶えた樺太アイヌ語 (第 112 回大会研究発表要旨)」『言語研究』

(110) : 232.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語：モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 東京：ひつじ書房.

吉田妙子 (2012) 『日本語動詞テ形のアスペクト』 京都：晃洋書房.

Aikhenvald, Alexandra.Y. (2006) Serial Verb Constructions in Typological Perspective, In: Aikhenvald, A.Y & Dixon R.M.W (eds.), *Serial Verb Constructions A Cross-linguistic Typology*: 1-68. Oxford: Oxford University Press.

Alsina, Alex, Joan Bresnan, and Peter Sells (1997) Complex predicate: Structure and Theory. In: Alsina, Alex, Joan Bresnan, and Peter Sells (eds.) *Complex Predicates*, 1-12. Chicago: University of Chicago Press.

Amberber, Mengistu, Brett Baker, and Mark Harvey (2010) *Complex predicates: Cross-linguistic perspectives on event structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

Anderson, Gregory D. S. (2004) *Auxiliary Verb Constructions in Altai-Sayan Turkic*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Anderson, Gregory D. S. (2006) *Auxiliary Verb Constructions*. Oxford: Oxford University Press.

Asai, Toru (1974) Classification of dialects: Cluster analysis of Ainu dialects. *Bulletin of the Institute for the Study of North Eurasian Cultures* 8: 45-136.

Baker, Mark (1996) *The polysynthesis parameter*. Oxford: Oxford University Press.

Bugaeva, Anna (2004) *Grammar and folklore texts of the Chitose dialect of Ainu : Idiolect of Ito Oda*. Endangered Languages of the Pacific Rim (A2-045) , Suita: Osaka Gakuin University.

Bugaeva, Anna (2012) Southern Hokkaido Ainu. In: Nicolas Yranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*, 461-509. London: Routledge.

Bugaeva, Anna and Hiroshi Nakagawa (2013) *V-V Complexes in Ainu*. NINJAL International Symposium 2013 ‘Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages’, National Institute for Japanese Language and Linguistics, 14 December 2013.

Bugaeva, Anna (2014) *Clause fusion as a process of forming complex predicates in Ainu and Japanese*. Syntax of the World's Languages VI, University of Pavia, 8 September 2014.

Bugaeva, Anna (2018) Ainu complex predicates with reference to Japanese. In: Pardeshi, Prashant and Kageyama, Taro (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, Handbooks of Japanese Language and Linguistics Series 6, 247-272, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

Dixon, Robert M. W. (2010) *Basic linguistic theory*, 2: Oxford: Oxford University Press.

Folry, William A. and Robert D. Van Valin, Jr (1984) *Functional syntax and universal grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.

Hasegawa, Yoko (1996) *A Study of Japanese Clause Linkage -The Connective TE in Japanese*,

- Tokyo: The Center for the Study of Language and Information Publications.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex predicates in Japanese: a syntactic and semantic study of the notion 'word'*, Tokyo: Kurosio Publishers.
- Lomashvili, Leila (2011) *Complex Predicates: The Syntax-morphology Interface*, Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Refsing, Kirsten (1986) *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*, Vibor: Aarhus University Press.
- UNESCO (2010) *Atlas of the World's Languages in Danger*, 3rd edition, Paris: UNESCO Publishing.
- Van Valin, Robert D., Jr and Randy J. LaPolla (1997) *Syntax -Structure, Meaning and Function*, New York: Cambridge University Press.

## 資料

- 萱野茂 (1998a) 『萱野茂のアイヌ神話集成 カムイユカラ編 I』 1. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998b) 『萱野茂のアイヌ神話集成 カムイユカラ編 II』 2. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998c) 『萱野茂のアイヌ神話集成 カムイユカラ編 III』 3. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998d) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウエペケレ編 I』 4. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998e) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウエペケレ編 II』 5. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998f) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウエペケレ編 III』 6. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998g) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ユカラ編 I』 7. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998h) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ユカラ編 II』 8. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998i) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ユカラ編 III』 9. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (2005) 『新訂復刻 ウウエペケレ集大成』 東京: 日本伝統文化振興財団.
- 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』 東京: 岩波書店.
- 田村すず子 (1984) 『アイヌ語音声資料』 1. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1985) 『アイヌ語音声資料』 2. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1986) 『アイヌ語音声資料』 3. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1987) 『アイヌ語音声資料』 4. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1988a) 『アイヌ語音声資料』 5. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料』 6. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 千葉大学 (2015a) 『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2 年次 (北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書』 1. 千葉: 国立大学法人千葉大学.
- 千葉大学 (2015b) 『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第

2 年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書』2. 千葉: 国立大学法人千葉大学.  
千葉大学 (2015c) 『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第 2  
年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書』3. 千葉: 国立大学法人千葉大学.

#### **ウェブサイト**

アイヌ民族博物館「アイヌ語アーカイブ」<http://ainugo.ainu-museum.or.jp/>（2018 年 11 月 30  
日アクセス）

付録

## アイヌ語複雑述語の代表的な用例

V1 wa an **項の共有** Vi wa an (V1SBJ *i*-V2 SBJ *i*) : No.1~26、Vt wa an (V1SBJ *i*-V2 SBJ *i*) : No.27~34、Vt wa an (V1OBJ *i*-V2 SBJ *i*) : No.35~37)

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
1	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	a 座る	田村 (1984 : 36)	osiso un, kamuy ekasi <u>ø-a</u> <u>wa ø-an</u> . 右座 に 神 爺 3SG.SBJ-座る CONJ 3SG.SBJ-いる 右座に神のような老翁が座っている
2	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	an いる	田村 (1988a : 24)	hinak wa i-(y)etok ta suy <u>ø-an</u> <u>wa ø-an</u> ruwe an? どこ から 1PL.OBJ-の前に また 3SG.SBJ-いる CONJ 3SG.SBJ-いる の だ どこから私たちより先になって、また、(妹がこの狩小屋に) いるのだ？
3	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	arpa 行く	田村 (1985 : 44)	ø-nikekke wenkur ø-oro ta <u>arpa-an wa an-an</u> wa kusu 3SG.SBJ-木折る 貧乏人 3.SBJ-のところに 行く-1.SBJ CONJ いる-1.SBJ から 木折り貧乏人のところに私は行っているから
4	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	as 立つ	萱野 (1998d : 24)	ø-pirka tusokni <u>ø-as</u> <u>wa ø-an</u> pe ka a-ø-karkar 3.SBJ-良い 熊繫柱 3.SBJ-立つ CONJ 3.SBJ-いる の も 1SG.SBJ-3.OBJ-飾り付ける 立派な熊を繋ぐ太い柱が立っているのも私が飾り付けた
5	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	ek 来る	田村 (1984 : 52)	ø-pon katkemat <u>ø-ek</u> <u>wa ø-an</u> wa turano ukoysoytak-an. 3.SBJ-小さい 淑女 3SG.SBJ-来る CONJ 3SG.SBJ-いる て 一緒に 話し合う-1PL.SBJ 若く立派な女性が来ていて、一緒に私たちは話し合った
6	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	hacir 落ちる	萱野 (2005 : 185)	sonno ka ni ø-pon horkew <u>ø-hacir</u> <u>wa ø-an</u> hine 本当に 木 3.SBJ-小さい オオカミ 3SG.SBJ-落ちる CONJ 3SG.SBJ-いる て (山へ行くと) 本当に木製の小さなオオカミが落ちていて



7	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	hemuymuye 着物を頭か らかぶって 寝る	田村 (1984 : 40)	a- $\emptyset$ -koapkas ka somo ki no <u>hemuymuye-an</u> wa <u>an-an</u> 1SG.SBJ-3.OBJ-に行く も NEG する て 着物を被って寝る-1SG.SBJ CONJ いる-1SG.SBJ ruwe ne a korka の だ PRF が そこへ私は行きもしないで私は着物を頭からかぶって寝ていたのだったけれど
8	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	horak 倒れる	田村 (1988a : 12)	$\emptyset$ -poro pero <u><math>\emptyset</math>-horak</u> wa <u><math>\emptyset</math>-an</u> wa 3.SBJ-大きい ナラ 3.SBJ-倒れる CONJ 3.SBJ-いる て 大きいナラの木が倒れていて
9	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	hotke 寝る	萱野 (2005 : 16)	ape sam ta <u>hotke-an</u> wa <u>an-an</u> akusu 火 側 に 寝る-1SG.SBJ CONJ いる-3SG.SBJ と 火のそばで私が横になっていると
10	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	inkar 見る	萱野 (1998d : 90)	$\emptyset$ -mikemike kor $\emptyset$ -ek siri a- $\emptyset$ -nukar hine 3.SBJ-光る ながら 3.SBJ-来る 様子 1SG.SBJ-3.OBJ-見る て <u>inkar-an</u> wa <u>an-an</u> akusu 見る-1SG.SBJ CONJ いる-1SG.SBJ と (何か) 光りながら来るのを私が見ていると
11	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	iruska 怒る	萱野 (1998f : 20)	$\emptyset$ -sikeweri aynu <u><math>\emptyset</math>-iruska</u> wa <u><math>\emptyset</math>-an</u> hine ene hawan hi 3SG.SBJ-背が高い 人 3SG.SBJ-怒る CONJ 3SG.SBJ-いる て こう 話す こと とても背が高い人が怒っていて、こう言った
12	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	iyoski 酔う	田村 (1985 : 72)	earkinne $\emptyset$ -iyoski hine <u><math>\emptyset</math>-iyoski</u> wa <u><math>\emptyset</math>-an</u> rapokke ta すっかり 3.SBJ-酔う て 3.SBJ-酔う CONJ 3.SBJ-いる その間に すっかり酔っばらって、酔っているその間に

13	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	kiyanne 年上である	田村 (1989 : 12)	<u>ø-kiyanne wa ø-an</u> menoko ene hawean hi 3.SBJ-年上だ CONJ 3.SBJ-いる 女 こう 話す こと 年上である女性がこう言った
14	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	koyyanke 波に打ち上げられる	田村 (1989 : 66)	isokapiw sinep ø-ray hine <u>ø-koyyanke wa ø-an</u> kusu アホウドリ ひとつ 3SG.SBJ-死ぬ て 3SG.SBJ-打ち上げられる CONJ 3SG.SBJ-いる から アホウドリが一羽死んで波に打ち上げられているため
15	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	matkor 妻を持つ	田村 (1985 : 42)	asinno <u>ø-matkor wa ø-an</u> ruwe ne yakka 新しく 3SG.SBJ-妻を持つ CONJ 3SG.SBJ-いる の だが (旦那が) 新しく妻をめとっていたのだが
16	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	mokor 眠る	萱野 (1998d : 86)	ø-hotke tek a p orano <u>ø-mokor wa ø-an</u> korka 3SG.SBJ-寝る 少し PRF もの それから 3SG.SBJ-眠る CONJ 3SG.SBJ-いる が ちょっと寝ただけけれど、それから眠っていたのだけれど
17	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	ponpakkay 赤子を背負う	田村 (1989 : 22)	<u>ø-ponpakkay wa ø-an</u> ruwe ka, a-kor nispa utar ø-ø-nukar ruwe ne. 3SG.SBJ-赤子背負う CONJ 3SG.SBJ-いる の も 旦那 たち 3.SBJ-3.OBJ-見る こと だ (上の娘が) 赤子を背負っているのも、旦那さんがたがご覧のとおりだ
18	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	poro 大きくなる	田村 (1985 : 42)	nen poka <u>ø-poro wa ø-an</u> ruwe ne p なんとかして 3SG.SBJ-大きくなる CONJ 3SG.SBJ-いる の だが (孤児となった村長の息子は自力で) なんとか大きくなっていたのだが
19	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	ramne そのままある	田村 (1988a : 76)	nea pon su ka <u>ø-ramne wa ø-an</u> pirkep ka ø-ramne その 小鍋 も 3.SBJ-そのままである CONJ 3.SBJ-ある 白米 も 3.SBJ-そのままである その小さい鍋もそのままであって、精白したものもそのままであった

20	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	ray 死ぬ	田村 (1988a : 60)	muntum ta cise ka ape ka $\emptyset$ -isam uske ta <u>ray-an wa an-an</u> 草の中で 家も 火も 3.SBJ-ない ところで 死ぬ-1SG.SBJ CONJ いる-1SG.SBJ 草むらの中で家も火もないところで私は死んでいる
21	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	rewsi 泊まる	萱野 (1998d : 108)	te ta <u><math>\emptyset</math>-rewsi wa <math>\emptyset</math>-an</u> nispa sorekusu $\emptyset$ - $\emptyset$ -tokuyekor wa ここで 3.SBJ-泊まる CONJ 3.SBJ-いる 旦那 それこそ 3SG.SBJ-3.OBJ-親しい て ここに泊まっている旦那はそれこそ親しくて
22	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	san 下ってくる	田村 (1985 : 26)	a- $\emptyset$ -kor katkemat <u><math>\emptyset</math>-san wa <math>\emptyset</math>-an</u> na 1SG.SBJ-3.OBJ-もつ 奥さん 3.SBJ-行く CONJ 3.SBJ-いる よ 奥様が (くだって) 来てらっしゃてるよ
23	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	siknu 生きる	田村 (1985 : 12)	$\emptyset$ -i-erampokwen a nispa poka sone <u><math>\emptyset</math>-siknu wa <math>\emptyset</math>-an</u> hawe he an? 3SG.SBJ-1.OBJ-憐れむ PRF 人 でも 本当に 3.SBJ-生きる CONJ 3.SBJ-いる 話 か ある (飢饉とのことだが) 私を憐れんだ村長だけでも本当に生きているのか?
24	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	situri 伸びる	田村 (1984 : 54)	hawe ne yakun, arpa arpa <u><math>\emptyset</math>-situri wa <math>\emptyset</math>-an</u> pe? それならば 行く 行く 3.SBJ-伸びる CONJ 3.SBJ-いる もの それならば、行く先、行く先に伸びているものは? (なぞなぞ)
25	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	sokar 座を整える	萱野 (1998e : 100)	ape $\emptyset$ -etok ta katkemat <u><math>\emptyset</math>-sokar wa <math>\emptyset</math>-an</u> hine 火 3.OBJ-の先 で 女性 3SG.SBJ-座を整える CONJ 3SG.SBJ-いる て 炉端で女が座を整えていて
26	Vi wa an V1SBJ-V2 SBJ	yan あがる	田村 (1986 : 20)	sonno ka akketek hem $\emptyset$ -an hunpe <u><math>\emptyset</math>-yan wa <math>\emptyset</math>-an</u> hi kusu 本当に ホタテ貝 も 3SG.SBJ-ある クジラ 3SG.SBJ-あがる CONJ 3SG.SBJ-いる ので (浜に) 本当にホタテ貝もあり、クジラもあがっているの

27	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ	epunkine 守る	萱野 (1998e : 26)	tan menoko <u>a-<math>\emptyset</math>-epunkine</u> wa <u>an-an</u> korka この 女 1SG.SBJ-3SG.OBJ-守る CONJ いる-1SG.SBJ が (エゾマツの女神である私が) この女を守っているが
28	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ	eraman わかる	萱野 (2005 : 198)	nep ne yakka $\emptyset$ -i-(y)epakasnu wa <u>a-<math>\emptyset</math>-eraman</u> wa <u>an-an</u> 何であっても 3SG.SBJ-1SG.OBJ-教える て 1SG.SBJ-3SG.OBJ-わかる CONJ いる-1SG.SBJ pe ne kusu もの だ から 何であっても私に教えて、私がそれを覚えているものだから
29	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ	kohepututu ...でふくれつ らをする	萱野 (2005 : 228)	easir nupe tura <u>a-<math>\emptyset</math>-kohepututu</u> wa <u>an-an</u> ruwe ne a wa まったく 涙 とともに 1.SBJ-3.OBJ-でふくれつらする CONJ いる-1.SBJ の だ PRF て 本当に涙をながして私はふくれつらをしていた (心配していた) のだった
30	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ	kor もつ	田村 (1985 : 8)	tapne sine po <u>a-<math>\emptyset</math>-kor</u> wa <u>an-an</u> a korka このとおり ひとり 子 1.SBJ-3.OBJ-もつ CONJ いる-1.SBJ PRF が このとおり、一人の子を私がつもっていたけれど
31	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ	mi 着る	田村 (1985 : 2)	hotke-an kor a- $\emptyset$ -mi amip patek <u>a-<math>\emptyset</math>-mi</u> wa <u>an-an</u> pe 寝る-1.SBJ ながら 1.SBJ-3.OBJ-着る 着物 ばかり 1.SBJ-3.OBJ-着る CONJ いる-1.SBJ もの (寝ても覚めても) 私が着ていた着物ばかりを私が着ていたものを
32	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ	nukar 見る	萱野 (1998f : 58)	eani anakne e-motoho <u>a-<math>\emptyset</math>-nukar</u> wa <u>an-an</u> あなたは 2.SBJ-の素性 1.SBJ-3.OBJ-見る CONJ いる-1.SBJ あなたは、私があなただの素性をみている (しっている)

33	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ	tere 待つ	萱野 (2005 : 179)	ni $\emptyset$ -pirka uske a- $\emptyset$ -nukar wa ek-an kusu ne na, 木 3.SBJ-良いところ 1.SBJ-3.OBJ-見る て 来る-1.SBJ つもり ぞ <u><math>\emptyset</math>-i-tere wa <math>\emptyset</math>-an</u> 2.SBJ.IMP-1.OBJ-待つ CONJ 2.SBJ. IMP-いる 木が良いところを私が見てくるからな、私を待っている
34	Vt wa an V1SBJ-V2 SBJ V1OBJ-V2 SBJ	eyam 大切にしま う	田村 (1989 : 76)	Sirkometu $\emptyset$ -uni ta ekasi ikor ona ikor 人名 3.SBJ-の家に 爺 宝 父 宝 <u><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-eyam wa <math>\emptyset</math>-an</u> pe ne kusu 3.SBJ-3.OBJ-大切にしまう CONJ 3.SBJ-いる もの だ から シリコメトゥの家じいさんの財産、父の財産が大切にしまっているものだから ※ 項の共有は V1SBJ-V2 SBJ もしくは V1OBJ-V2 SBJ

35	Vt wa an V1OBJ-V2 SBJ	kimorura 山に運ぶ	萱野 (2005 : 189)	ta an <u>a-<math>\emptyset</math>-kimorura wa <math>\emptyset</math>-an</u> $\emptyset$ -pon menoko この 1.SBJ-3.OBJ-山に運ぶ CONJ 3.SBJ-いる 3.SBJ-小さい 女 この、私が山に運んでいる女の子
36	Vt wa an V1OBJ-V2 SBJ	kokari ...に...をくる む	萱野 (1998e : 30)	amip $\emptyset$ - $\emptyset$ -sanke tan amip <u>a-<math>\emptyset</math>-kokari wa <math>\emptyset</math>-an</u> pe ne hine 着物 3.SBJ-3.OBJ-出す この 着物 1.SBJ-3.OBJ-にくるむ CONJ 3.SBJ-ある の である て 着物を出して、私がこの着物にくるんであったものであつて
37	Vt wa an V1OBJ-V2 SBJ	satke 干す	田村 (1986 : 30)	a-sanpehe, ni $\emptyset$ -ka ta <u>a-<math>\emptyset</math>-satke wa <math>\emptyset</math>-an</u> a p 1.SBJ-心臓 木 上 に 1.SBJ-3.OBJ-干す CONJ 3.SBJ-ある PRF もの 私の心臓、木の上に私が干していたのだが

V1 wa isam **項の共有** Vi wa isam (V1SBJ *i*-V2 SBJ *i*) : No.38-49、Vt wa isam (V1OBJ *i*-V2 SBJ *i*) : No.50-53

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
38	Vi wa isam	arpa 行く	田村 (1985 : 36)	kuca or un <u>ø-arpa wa ø-isam</u> ø-okake ta 狩小屋 ところ へ 3.SBJ-行く CONJ 3.OBJ-なくなる 3.OBJ-のあとに 狩小屋のところへ行ってしまったあとに
39	Vi wa isam	ekimne 山へ行く	田村 (1989 : 34)	a-yuputari ka <u>ø-ekimne wa ø-isam</u> ø-okake ta ne kusu. 1.SBJ-兄たち も 3.SBJ-山へ行く CONJ 3.OBJ-なくなる 3.OBJ-のあとに だから 私の兄たちも山へ行ってしまったあとだから
40	Vi wa isam	hosippa 帰る	田村 (1989 : 20)	aynu opitta, <u>ø-hosippa wa ø-isam</u> rok ø-okake ta 人 みな 3.SBJ-帰る PL CONJ 3.OBJ-なくなる PRF 3.OBJ-のあとに 人がみんな帰ってしまったあとに
41	Vi wa isam	ikesuy 家出する	萱野 (2005 : 219)	ene ø-wen puri ø-kor sinne <u>ø-ikesuy wa ø-isam</u> wa orowan こう 3.SBJ-悪い 習慣 3.SBJ-もつ なる 3.SBJ-家出する CONJ 3.SBJ-なくなる てそれから このような性悪になって家出してしまっ、それから
42	Vi wa isam	karkarse 転がる	田村 (1986 : 22)	hine hunak un <u>ø-karkarse wa ø-isam</u> そして どこ へ 3.SBJ-転がる CONJ 3.SBJ-なくなる そしてどこかへ転がっていった
43	Vi wa isam	kemekot 餓死する	田村 (1985 : 10)	aynu poroser <u>ø-kemekot wa ø-isam</u> a ruwe ne 人 大部分 3.SBJ-餓死する CONJ 3.SBJ-なくなる PRF ことだ 人のほとんどが餓死してしまったのだ
44	Vi wa isam	kira 逃げる	萱野 (2005 : 103)	ø-e-hoppa tek hine <u>ø-kira wa ø-isam</u> ruwe ne hine 3.SBJ-2.OBJ-置き去る さつと て 3.SBJ-逃げる CONJ 3.SBJ-なくなる ことだて (雌オオカミが) おまえをさつと残して逃げてしまったので

45	Vi wa isam	ray 死ぬ	田村 (1985 : 8)	a-unuhu ka, tunas <u>ø-ray wa ø-isam</u> 1.SBJ-の母 も 早く 3.SBJ-死ぬ CONJ 3.SBJ-なくなる 私の母も早く死んでしまった
46	Vi wa isam	san 下りていく	田村 (1985 : 6)	a-ø-kor nispa <u>ø-san wa ø-isam</u> 1.SBJ-3.OBJ-もつ 旦那 3.SBJ-行く CONJ 3.SBJ-なくなる ø-okake ta cis-an a -an a 3.OBJ-あと に 泣く-1.SBJ 反復 -1.SBJ 反復 私の旦那が行ってしまったあと、私は泣きに泣いた
47	Vi wa isam	soyne 外に出る	田村 (1989 : 48)	ø-inkar a ø-inkar a ayne oraun 3.SBJ-見る 反復 3.SBJ-見る 反復 あげく それから hetopo <u>ø-soyne wa ø-isam</u> ruwe ne また 3.SBJ-外に出る CONJ 3.SBJ-なくなる ことだ (男が家に入ってきて) 見まわしたあげく、また外へ出て行ってしまったのだ
48	Vi wa isam	us 消える	萱野 (2005 : 35)	ape ka <u>ø-us wa ø-isam</u> oraun 火 も 3.SBJ-消える CONJ 3.SBJ-なくなる それから 火も消えてしまった、それから
49	Vi wa isam	yaykirare 一目散に逃げ る	田村 (1987 : 42)	a-ø-pasusu p ne kus, <u>ø-yaykirare wa ø-isam</u> kus keraypo INDF.SBJ-3.OBJ-見破る もの だから 3.SBJ-一目散に逃げる CONJ 3.SBJ-なくなる おかげで 見破ったものだから (敵が) 一目散に逃げて行ってしまったおかげで (助かった)

50	Vt wa isam	e 食べる	萱野 (1998f : 78)	kam us uske epitta <u>a-ø-e</u> <u>wa isam</u> ruwe ne aan 肉 つく ところ 全部 INDF.SBJ-3.OBJ-食べる CONJ 3.SBJ-なくなる こと だ なあ 肉のついているところすべて、食べられてしまったのだなあ
51	Vt wa isam	momka 流す	田村 (1984 : 50)	cise turano, <u>a-ø-momka</u> <u>wa ø-isam</u> 家 とともに INDF.SBJ-3.OBJ-流す CONJ 3.SBJ-なくなる 家とともに流されてしまった
52	Vt wa isam	rayke 殺す	田村 (1985 : 4)	iwor or un a-ø-se wa, 山奥 ところ へ INDF.SBJ-3.OBJ-背負う て <u>a-ø-rayke</u> <u>wa ø-isam</u> yak ø-pirka INDF.SBJ-3.OBJ-殺す CONJ 3.SBJ-なくなる なら 1.SBJ-良い 山奥へ誰かが (ばあさんを) 背負って行って、誰かが殺してしまえ
53	Vt wa isam	uska 消す	田村 (1984 : 58)	sunkeno kanpinuye-an kor <u>ø-ø-uska</u> <u>wa ø-isam</u> 嘘に 書く -1.SBJ と 3.SBJ-3.OBJ-消す CONJ 3.SBJ-なくなる 間違って書くと消してしまう



V1 wa inkar **項の共有** Vi wa inkar (V1SBJ *i*-V2 SBJ *i*) : No.54~58、Vt wa inkar (V1SBJ *i*-V2 SBJ *i*) : No.59~61

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
54	Vi wa inkar	ahun 入る	田村 (1985 : 8)	cise or ta <u>ahun-an wa inkar-an</u> hike, rupnekur anak ø-isam 家 ところ に 入る-1.SBJ CONJ 見る-1.SBJ たら 大人 は 3.SBJ-いない 家に私が入ってみると、大人はいなかった
55	Vi wa inkar	arpa 行く	萱野 (1998d : 12)	ney ta ka <u>arpa-an wa inkar-an</u> rusuy いつにか 行く-1.SBJ CONJ 見る-1.SBJ たい いつか (私が) 行ってみたい
56	Vi wa inkar	ran 下りる	萱野 (2005 : 141)	kunneiwa pet or ta <u>ran-an wa inkar-an</u> kor 朝 川 ところ に 下る-1.SBJ CONJ 見る-1.SBJ と 朝に川のところへ私がおりてみると
57	Vi wa inkar	soyene 外に出る	田村 (1989 : 2)	ø-poro tatuspe a-ø-kor hine <u>soyene-an wa inkar-an</u> akusu, 3.SBJ-大きい たいまつ 1.SBJ-3.OBJ-もつ て 外に出る-1.SBJ CONJ 見る-1.SBJ と cip ø-mom wa ø-san hi kusu 舟 3.SBJ-流れる て 3.SBJ-下る こと から 大きいたいまつを私が持って外に出てみると、舟が流れて下っている
58	Vi wa inkar	ukoterke 相撲をとる	田村 (1989 : 74)	ukoterke-an wa inan kur hoski ø-yayeramkomo ya 相撲をとる-1.SBJ て どちら人 先に 3.SBJ-力尽きて負ける か <u>ukoterke-an wa inkar-an</u> kusu ne 相撲をとる-1.SBJ CONJ 見る-1.SBJ つもり 相撲をとってどちらが先に力尽きて負けるか相撲をとってみます

59	Vt wa inkar	epotara おはらいする	田村 (1989 : 40)	hawe ne yakun nisatta ne, <b>a-Ø-epotara wa inkar-an</b> kusu ne それならば 明日に 1.SBJ-3.OBJ-お祓いする CONJ 見る-1.SBJ つもり それならば、明日に私がお祓いをしてみます
60	Vt wa inkar	kohemespa ...に登る	田村 (1984 : 38)	kamuy nupuri ka <b>a-Ø-kohemespa wa inkar-an</b> ruwe ene oka hi 神 山 上 1.SBJ-3.OBJ-に登る CONJ 見る-1.SBJ こと こう ある こと 神の山の上に私が登ってみるとこうであった
61	Vt wa inkar	kosinewe ...を訪ねる	田村 (1989 : 76)	<b>a-Ø-kosinewe wa inkar-an</b> sekor yaynu-an 1.SBJ-3.OBJ-を訪ねる CONJ 見る-1.SBJ と 思う-1.SBJ 私がそこに訪ねて行ってみようと思った

V1 wa inu **項の共有** Vi wa inu (V1SBJ*i*-V2 SBJ *i*) : No.62、 Vt wa inu (V1SBJ*i*-V2 SBJ *i*) : No.63~65

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
62	Vi wa inu	yantoetun 宿を借りる	萱野 (1998g : 146)	oro un ø-arpa wa <u>ø-yantoetun</u> wa <u>ø-inu</u> そこへ 2.SBJ.IMP-行く CONJ 2.SBJ.IMP-宿を借りる CONJ 2.SBJ.IMP-聞く sekor a-ø-ye akusu と 1.SBJ-3.OBJ-言う と そこへ行って宿を借りてみなさい (泊めてもらってみなさい) と私が言う と
63	Vt wa inu	ye 話す	千葉大 (2015a : 472)	arpa-an wa a-ø-uk easkay pe ne hawe ne yakun 行く-1.SBJ て 1.SBJ-3.OBJ-取る できる ものである 話 である なら <u>a-ø-ye</u> wa <u>inu-an</u> kusu ne wa 1.SBJ-3.OBJ-言う CONJ 聞く-1.SBJ つもり よ 私が行って取ってくることができるものなら、私が言ってみよう
64	Vt wa inu	e 食べる	田村 (1987 : 75)	ø-pirka konpu ku-ø-satke, <u>ø-e</u> wa <u>ø-inu</u> yan 3.SBJ-良い 昆布 1.SBJ-3.OBJ-干す 2.SBJ.IMP-食べる CONJ 2.SBJ.IMP-聞く IMP よい昆布を私が干した、食べてみなさい (歌)
65	Vt wa inu	toptukan はじく	田村 (1996 : 383)	<u>ø-ø-toptukan</u> wa <u>ø-inu</u> wa mayehe ø-pirka hike ø-ø-hok 3.SBJ-3.OBJ-はじく CONJ 3.SBJ-聞く て 響き 3.SBJ-良い たら 2.SBJ.IMP-3.OBJ-買う (茶碗を) 爪ではじいてみて響きが悪かったら買いなさい

V1 wa anu **項の共有** Vt wa anu (V1SBJi/OBJj-V2 SBJi/OBJj) : No.66~74

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
66	Vt wa anu	kar 作る	田村 (1985 : 4)	a-macihi $\emptyset$ -iyuta a $\emptyset$ -iyuta a wa 1.SBJ-妻 3.SBJ-搗く 反復 3.SBJ-搗く 反復 て pirkep <u><math>\emptyset</math>-<b>kar</b></u> <u>wa <math>\emptyset</math>-<b>anu</b></u> kor orowano 精白米 3.SBJ-3.OBJ-作る CONJ 3.SBJ-3.OBJ-置く と それから 私の妻が搗きに搗いて精白米をこしらえておくと、それから
67	Vt wa anu	eokokte ...に引っ掛ける	田村 (1996 : 126)	<u><b>k-<math>\emptyset</math>-eokokte</b></u> <u>wa <b>k-<math>\emptyset</math>-anu</b></u> a p $\emptyset$ -esirpici 1.SBJ-3.OBJ-引っ掛ける CONJ 1.SBJ-3.OBJ-置く PRF もの 3.SBJ-はずれる 私がそこに引っ掛けておいたものがはずれた
68	Vt wa anu	esikte ...でいっぱいにする	田村 (1996 : 124)	amam saranip oro <u><b>a-<math>\emptyset</math>-esikte</b></u> <u>wa <b>a-<math>\emptyset</math>-anu</b></u> ro 米 編み袋 中 1PL.SBJ-3.OBJ-いっぱいにする CONJ 1PL.SBJ-3.OBJ-置く 勧誘 編み袋のなかを米でいっぱいにしておこう
69	Vt wa anu	etarare ...に刺す	田村 (1996 : 360)	a- $\emptyset$ -ninu kuni kem <u><b><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-etarare</b></u> <u>wa <b><math>\emptyset</math>-anu</b></u> INDF.SBJ-3.OBJ-縫う よう 針 2.SBJ.IMP-3.OBJ-刺す CONJ 2.SBJ.IMP-3.OBJ-置く 誰かが縫うように針をさしておきなさい
70	Vt wa anu	hosipire もどす	田村 (1996 : 458)	ohorka <u><b><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-hosipire</b></u> <u>wa <b><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-anu</b></u> 後ろへ 2.SBJ.IMP-3.OBJ-もどす CONJ 2.SBJ.IMP-3.OBJ-置く 後ろへ戻しておきなさい (突き出ているものを引っ込めておきなさい)
71	Vt wa anu	kapkapa 平べったくする	田村 (1996 : 278)	noyasito <u><b><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-kapkapa</b></u> <u>wa <b><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-anu</b></u> よもぎ餅 2.SBJ.IMP-3.OBJ-平べったくする CONJ 2.SBJ.IMP-3.OBJ-置く よもぎ餅をぺったらこくしておきなさい

72	Vt wa anu	ocatcari ...にふりかけ る	田村 (1996 : 453)	konru $\emptyset$ -rarak                      na una <u><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-ocatcari</u> wa <u><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-anu</u> 氷 3.SBJ-すべすべする ぞ 灰 2.SBJ.IMP-3.OBJ-ふりかける CONJ 2.SBJ.IMP-3.OBJ-置く 氷がつるつるしているから、灰をそこにふりかけておきなさい
73	Vt wa anu	rarakka すべすべに する	田村 (1996 : 563)	ita <u><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-rarakka</u> wa <u><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-anu</u> 床板 2.SBJ.IMP-3.OBJ-すべすべにする CONJ 2.SBJ.IMP-3.OBJ-置く 床板に (油をひいて) 磨いておきなさい
74	Vt wa anu	ikokarkari ものにくる む	田村 (1996 : 225)	toan cikapnok $\emptyset$ -rupus yak $\emptyset$ -wen na あの 鶏卵 3.SBJ-凍ると 3.SG-悪い ぞ <u><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-ikokarkari</u> wa <u><math>\emptyset</math>-<math>\emptyset</math>-anu</u> 2.SBJ.IMP-3.OBJ-ものにくるむ CONJ 2.SBJ.IMP-3.OBJ-置く あの卵、凍るといけないから何かにくるんでおきなさい

V1 wa okere **項の共有** Vt wa okere (V1SBJ i-V2 SBJ i) : No.75~78、Vt wa okere (uninflected V2) : No.79~81、Vi wa okere : No.82~84

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
75	Vt wa okere	ye 言う	田村 (1985 : 12)	uwokpare p uwepeker, tap <b>ku-ø-ye wa k-ø-okere</b> 親不孝するもの物語 こう 1.SBJ-3.OBJ-言う CONJ 1.SBJ-3.OBJ-終える hawe tapan na 話 だぞ 親不孝ものの物語をこのように私が語りおえたんだぞ
76	Vt wa okere	karpa 作る	アイヌ民族博物館 (C0148L00347)	a-unihi hoskino <b>a-ø-karpa wa a-ø-okere</b> 1.SBJ-の家 先に 1.SBJ-3.OBJ-作る CONJ 1.SBJ-3.OBJ-終える 私の家を先につくりおえた
77	Vt wa okere	ki する	アイヌ民族博物館 (C0158L00852)	sinnurappa ka <b>a-ø-ki wa a-ø-okere</b> yakun ora 供養 も 1.SBJ-3.OBJ-する CONJ 1.SBJ-3.OBJ-終える たら それから 先祖供養も私がしおえたら、それから
78	Vt wa okere	eukasuy 手伝い合う	アイヌ民族博物館 (C0158L00887)	<b>a-ø-eukasuy wa a-ø-okere</b> hine 1PL.SBJ-3.OBJ-手伝い合う CONJ 1PL.SBJ-3.OBJ-終える て 私たちが互いに手伝いおえて

79	Vt wa <u>okere</u>	oyra 忘れる	田村 (1984 : 56)	<b>k-ø-oyra wa okere</b> wa mak ku-ø-ye p... 1.SBJ-3.OBJ-言う CONJ ?-終える て どう 1.SBJ-3.OBJ-言う こと 私が忘れてしまった、どう言おう...
80	Vt wa <u>okere</u>	e 食べる	久保寺 (1977 : 100)	<b>a-ø-e wa okere</b> 1.SBJ-3.OBJ-食べる CONJ ?-終える (死んだ女を) 私が食べおえた

81	Vt wa <u>okere</u>	ronnu 殺す	久保寺 (1977 : 301)	a-rushka kusu ø-arki wa ø-an kamuy <u>a-ø-ronnu wa okere</u> 1.SBJ-怒る ので 3.SBJ-来る CONJ 3.SBJ-いる 神 1.SBJ-3.OBJ-殺す CONJ ?-終える 私は腹は立っていたので、来ている神々をすっかり殺してしまった
82	Vi wa okere	hepututu ふくれつら する	田村 (1985 : 60)	oro ta a-yupihi ø-iwak, <u>ø-hepututu wa okere</u> kane ところに 1.SBJ-兄 1.SBJ-帰る 3.SBJ-ふくれつらする CONJ ?-終える ほど そこに兄が帰ってきて、ひどくふくれつらをするほどで
83	Vi wa okere	pirka 良くなる	田村 (1985 : 18)	<u>ø-pirka wa okere</u> ø-pon menoko, ø-soyne hine, 3.SBJ-良くなる CONJ ?-終える 3.SBJ-小さい 女 3.SBJ-外に出る て とても美しい娘が外に出て
84	Vi wa okere	sattek 痩せる	萱野 (1998e : 52)	ene ø-an kamuy ne a korka <u>ø-sattek wa okere</u> こう 3.SBJ-ある 神 である PRF が 3.SBJ-痩せる CONJ ?-終える このような神であったが、非常に痩せている

V1 tunas (Vi tunas : No.85-87、Vt tunas : No.88-91)

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
85	Vi tunas	arki 来る	田村 (1984 : 54)	tane, ø-ø-kor      ø-kiyanne      sensey utar <b><u>ø-arki      tunas</u></b> wa いま 3.SBJ-3.OBJ-もつ 3.SBJ-年上である 先生 たち 3.SBJ-来る はやくなる て いま、娘さんの年上の先生がたが来るのがはやくなって
86	Vi tunas	rupne 大きくなる	アイヌ民族博物館 (C0203L00349)	hoski a-ø-kor      a      a-mippo utar <b><u>ka ø-rupne      tunaspa</u></b> p      ne kusu 先に 1.SBJ-3.OBJ-もつ PRF 1.SBJ-孫 たち も 3.SBJ-成長する はやくなる もの だ から 先に私がもった私の孫たちも大きくなるのがはやいものだから
87	Vi tunas	mokor 眠い	田村 (1989 : 32)	kotan or      ta      san-an      hike      tane <b><u>ø-mokor      tunas</u></b> utar      ø-mokor 村 ところ に 下って行く-1.SBJ たら もう 3.SBJ-眠る はやくなる 人々 3.SBJ-眠る 村に私がくだって行くと、もう眠るのがはやい人々が眠っている
88	Vt tunas	eese 承諾の返事 をする	アイヌ民族博物館 (C0160L00779)	<b><u>a-ø-eese      tunas</u></b> aan      humi an 1.SBJ-3.OBJ-承諾の返事をする はやくなる なあ 感じ する 私がそれについて承諾の返事をするのがはやかったなあという気がする
89	Vt tunas	einonnoytak 祈る	アイヌ民族博物館 (C0172L00252)	<b><u>a-ø-einonnoytak      tunas</u></b> 1.SBJ-3.OBJ-祈る はやくなる 私がそれに祈るのがはやい
90	Vt tunas	kasi kik 叩き祓う	アイヌ民族博物館 (C0172L00253)	<b><u>kasi a-ø-kik      tunas</u></b> kusu 上 1.SBJ-3.OBJ-叩く はやくなる ため 私が叩いて祓うのがはやいため
91	Vt tunas	opici 放す	アイヌ民族博物館 (C0169L00364)	<b><u>a-ø-opici      tunas</u></b> 1.SBJ-3.OBJ-放す はやくなる (地面に足が届いたので) 私は手を放すのがはやかった (すぐに手をはなした)



V1 moyre (Vi moyre : No.92~96、Vt moyre : No.97~98)

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
92	Vi moyre	ahun 入る	アイヌ民族博物館 (C0158L00034)	sinot-an wa <u>ahun-an moyre</u> kor 遊ぶ-1SG.SBJ て 入る-1SG.SBJ おそくなる と 私が遊んでいて (家に) 入るのがおそくなると
93	Vi moyre	apks 歩く	アイヌ民族博物館 (C0179L00456)	<u>eci-apkas moyre</u> rapok 2PL.SBJ-歩く おそくなる その間 あなたたちが歩くのがおそいその間に
94	Vi moyre	ek 来る	田村 (1996 : 440)	<u>e-ek moyre</u> wa ora rur takupi ø-an 2SG.SBJ-来る おそくなる てそれから 汁 だけ 3.SBJ-ある あなたが来るのがおそくて、それで汁しかない
95	Vi moyre	hosippa 帰る	アイヌ民族博物館 (C0151L00579)	paskur utar <u>ø-hosippa moyre</u> kor カラス たち 3.SBJ-帰る おそくなる と カラスたちが帰るのがおそくなると
96	Vi moyre	tasaytak 返事する	アイヌ民族博物館 (C0157L00506)	<u>tasaytak-an moyre</u> akusu 返事をする-1.SBJ おそくなる と (その旦那さんに) 私が返事するのがおそくなると
97	Vt moyre	hosipire 帰らせる	アイヌ民族博物館 (C0178L00774)	okkaypo nispa <u>a-ø-hosipire moyre</u> yakun 若い男 旦那 1.SBJ-3.OBJ-帰らせる おそくなる なら 若い旦那を帰すのがおそくなるなら
98	Vt moyre	ye 言う	田村 (1984 : 54)	<u>e-ø-ye moyre</u> 2.SBJ-3.OBJ-言う おそくなる あなたが言うのがおそい

V1 oyra (Vt oyra : No.99~102、Vt ka oyra : No.103)

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
99	Vt oyra	nu 聞く	萱野 (1998d : 52)	inan macihi eun ø-pokor hawe ne ya ka <u>ku-ø-nu</u> oyra korka どの 妻 に 3.SBJ-妊娠する 話 だ か も 1.SBJ-3.OBJ-聞く 忘れる が どの奥さんに子供ができたのだかも聞き忘れたけれど
100	Vt oyra	ye 言う	萱野 (1998d : 58)	<u>ku-ø-ye</u> oyra hawe ne korka 1.SBJ-3.OBJ-言う 忘れる 話 である が 私が言い忘れたことであるが
101	Vt oyra	nomi まつる	アイヌ民族博物館 (C0148L00290)	sipase kamuy <u>a-ø-nomi</u> oyra とても重い 神 1.SBJ-3.OBJ-まつる 忘れる まことに尊い神を私はまつるのを忘れた
102	Vt oyra	ukao しまう	田村 (1996 : 821)	<u>k-ø-ukao</u> oyra wa ø-rurikan 1.SBJ-3.OBJ-しまう 忘れる て 3.SBJ-少し湿る 私がしまい忘れてそれが少し湿った
103	Vt ka oyra	ye 言う	田村 (1996 : 445)	ø-en-nupurkasure hine <u>ku-ø-ye</u> ka oyra wa k-ek 3.SBJ-1.OBJ-わからなくさせる て 1.SBJ-3.OBJ-言う も 忘れる て 1.SBJ-来る 私をわけわからなくさせて (借金の取立を) 私が言うのも忘れてきた

V1 okere (Vi okere : No.104~105、Vi okere (様態を表わす Vi) : No.106、Vt okere : No.107~112)

No.	組み合わせ	V1	資料	用例
104	Vi okere	ipe 食べる	田村 (1989 : 50)	tane menokopo ø-suke wa <u>ipe-an</u> <u>okere</u> kor いま 娘 3.SBJ-炊事する て 食事する-1PL.SBJ 終える と いま娘さんが炊事をして私たちが食事をおえると
105	Vi okere	uhuy 燃える	萱野 (2005 : 147)	tane <u>ø-uhuy</u> <u>okere</u> kane kor nea supya ø-rikin いま 3.SBJ-燃える 終える ながら その 煙 3.SBJ-のぼる いまや燃えおわるほどになり、その煙がのぼる
106	Vi okere	pirka 良くなる	アイヌ民族博物館 (C0213L00031)	<u>ø-pirka</u> <u>okere</u> ø-pon menoko pet sam ta ø-san hine 3.SBJ-良くなる 終える 3.SBJ-小さい 女 川 そばに 3.SBJ-行くて とても美しい娘が川のそばにくだって行って
107	Vt okere	kar 作る	田村 (1985 : 38)	nea so <u>a-ø-kar</u> <u>okere</u> その 座 1.SBJ-3.OBJ-つくる 終える その座を私が整えおえた
108	Vt okere	asi 立てる	萱野 (1998d : 24)	inaw ka <u>a-ø-asi</u> <u>okere</u> kor イナウ も 1.SBJ-3.OBJ-立てる 終える と イナウも私が立て終えると
109	Vt okere	ku 飲む	萱野 (1998d : 24)	inonnoytak-an kor a-ø-ku hine <u>a-ø-ku</u> <u>okere</u> hi 祈る-1.SBJ つつ 1.SBJ-3.OBJ-飲む て 1.SBJ-3.OBJ-飲む 終える NMLZ oraun soyne-an hine それから 外に出る-1.SBJ て 私が祈りながら酒を飲んで、飲み終えると、それから私は外に出て

110	Vt okere	ye 言う	田村 (1987 : 74)	tane yukar opitta <u>ku-ø-ye</u> <u>okere</u> kusu orowano いま 英雄叙事詩 みな 1.SBJ-3.OBJ-言う 終える から それから いま、ユカラをすべて私が語りおえたので、それから
111	Vt okere	uhuyka 燃やす	アイヌ民族博物館 (C0207L00158)	cip <u>a-ø-uhuyka</u> <u>okere</u> 舟 1.SBJ-3.OBJ-燃やす 終える 私が舟を燃やしおえる
112	Vt okere	e 食べる	アイヌ民族博物館 (C0170L00603)	hoski a-ø-uk pe <u>a-ø-e</u> <u>okere</u> 先に 1.SBJ-3.OBJ-取る もの 1.SBJ-3.OBJ-食べる 終える 先に私が取ったものを私が食べおえた